前の原・塚原

昭和49年度竜丘地区農業構造改善事業埋蔵文化財発掘調査報告書

1975・3

長野県飯田市教育委員会
飯田市農業協同組合

前の原・塚原

1975・3

長野県飯田市教育委員会
飯田市農業協同組合

序

飯田下伊那地は古代から文化の開けた土地であって，古墳や古代の各種の遺跡が占在している。これらの遺跡地からは遺物が多数出土し，住居址と生活用具である土器や，当時の生活を物語る墓地などが発見されている。これらに接する度に先人の残した文化のすばらしさに打たれるのである。我々はこれら遺跡，遺物を大切に保存し，或は記録に残すなどの責任をさえ感じている。

今回飯田市では比較的下段の竜丘地区の構造改善事業が行われることになり，古代遺跡地の前の原地籍の調査発掘を行い，農道改良工事の行われる古墳のある塚原地籍の調査発掘を行った。この地域一帯は古くから水田桑園などの耕地であったので農業関係者と十分協議をおこなった。広い地域であるので相当の日数と費用を用したが調査関係者の献身的努力によって所期の目的を果すことができた。

それにつけても調査団長の佐藤甦信氏，調査員今村正次氏と多数発掘作業員の骨折に感謝し，指導に当られた大沢和夫，今村善興，相原健の方々にもお礼申上げ，尚佐藤氏は図版や写真のほか出土品の保存などに意を用い，立派な記録を報告書としてまとめられたことに対して深甚な謝意を表く厚く御礼申上げます。

昭和50年 3 月

飯田市教育長

矢　亀　勝　俊

例　　言

1. 本書は昭和49年度第２次農業構造改善事業に伴う前の原遺跡・塚原遺跡とこれらに関連する古墳の発掘調査報告書である。

2. 本書は報告書作成の期限があり，このため調査結果についての充分な検討，研究がなされず，資料提供に重点をおいて編集した。

3. 編集は佐藤が担当し，調査結果の一部を今村・片桐・松村全二・飯田高校考古学班が分担執筆し，文末に文書を記し，それ以外は佐藤が執筆にあたった。

4. 遺構・遺物の作図及び遺構写真は佐藤が担当し，遺物写真は木下平八郎氏に依頼した。

5. 遺構実測図のうちピット内に記してある数字は床面からの深さを㎝であらわし，縮尺は図示してある。

6. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目　　次

序

例　　言

I　環　　境 …… 1

1．自然的環境 …… 1

2．歴史的環境 …… 4

II　発掘調査経過 …… 7

III　調　査　結　果 …… 10

(I)　前の原遺跡と古墳群 …… 10

1．前の原遺跡の遺構と遺物 …… 13

(1)　住　居　址 …… 13

ア　縄文時代中期末住居址 …… 13

イ　古墳時代住居址 …… 29

ウ　平安時代住居址 …… 38

エ　中世の住居址 …… 39

(2)　柱　列　址 …… 40

(3)　土　　坑 …… 42

ア　前の原遺跡土坑一覧表 …… 42

イ　土坑1号出土の土器 …… 42

(4)　遺構外の遺物 …… 43

2．前の原古墳群の調査結果 …… 43

(1)　前の原3号古墳 …… 43

(2)　高　見　塚 …… 43

(II)　塚原古墳群と塚原遺跡 …… 46

1．鏡　　塚 …… 46

2．塚原1号・2号・3号住居址 …… 46

ま　と　め …… 50

1．前　の　原 …… 50

2．塚　　原 …… 51

調　査　組　織 …… 52

お　わ　り　に …… 54

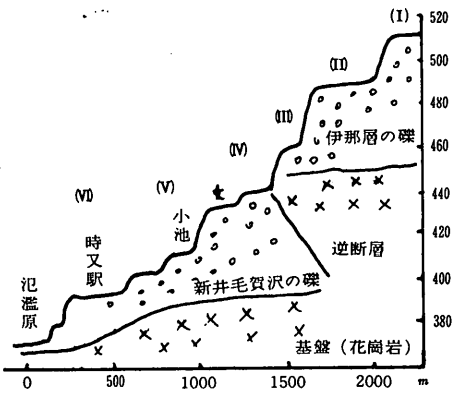
1．環　　境

1．自然的環境

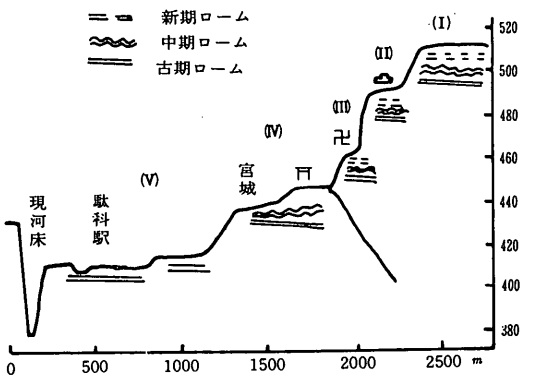
前の原遺跡，塚原遺跡は、長野県飯田市竜丘地区桐林に所在する。竜丘地区は旧竜丘村で，飯田市駄科，桐林，長野原，時又，上川路となり，竜丘地域全体の呼び名となっている。飯田市街地から5㎞～6㎞南にある。北は毛賀沢で松尾，鼎町に，南は久米川で川路に，東は天竜川で下久堅，竜江に境し，西は丘陵でもって伊賀良に接している。西半分は丘陵，東半分は段丘の平坦面となり，天竜川に沿って並ぶ松尾地区と川路地区の間にあって，川が削り残した丘 ― 自然堤防の上にある。東境をなす天竜川が花崗岩を刻みこんだ渓谷をなしているため，天竜川に接するというものの沖積低地は地区の南東の上川路と時又の一部の僅かであり，大部分は洪積期の台地からなり，その台地上に東から西に次第に高くなっている段丘地形が発達している。

竜丘地区の段丘面を上段から見ると，(I)最上段に高位段丘(注1)0の臼井原段丘面がかり，長い間の風雨に削られ凹凸ある段丘面をなしている。(II)は，(I)より20m下った鈴岡公園面，前林面で，巾は鈴岡面で200m，前林面で300mほどあり，(II)との比高差40mの段丘崖をもって(III)の念通寺面，万寿山公園面の巾は50m以内の狭い段丘面がある。(IV)は，伊那谷の第6段丘で中位段丘に位置づき，駄科面，長野原面，桐林面で竜丘の大部分を占めている。(V)は，駄科駅面と桐林小池面・塚原面・久保尻平面で，伊那谷の第7・8段丘面の下位段丘となり，(VI)は，沖積段丘となり，時又面，上川路面となり，さらに時又，川路の最低位面となり，天竜川の氾濫原となり，天竜峡の渓谷の入口に至る2㎞の間は水害地帯となっている。これを地形断面図でみると次のようである。

桐林断面図

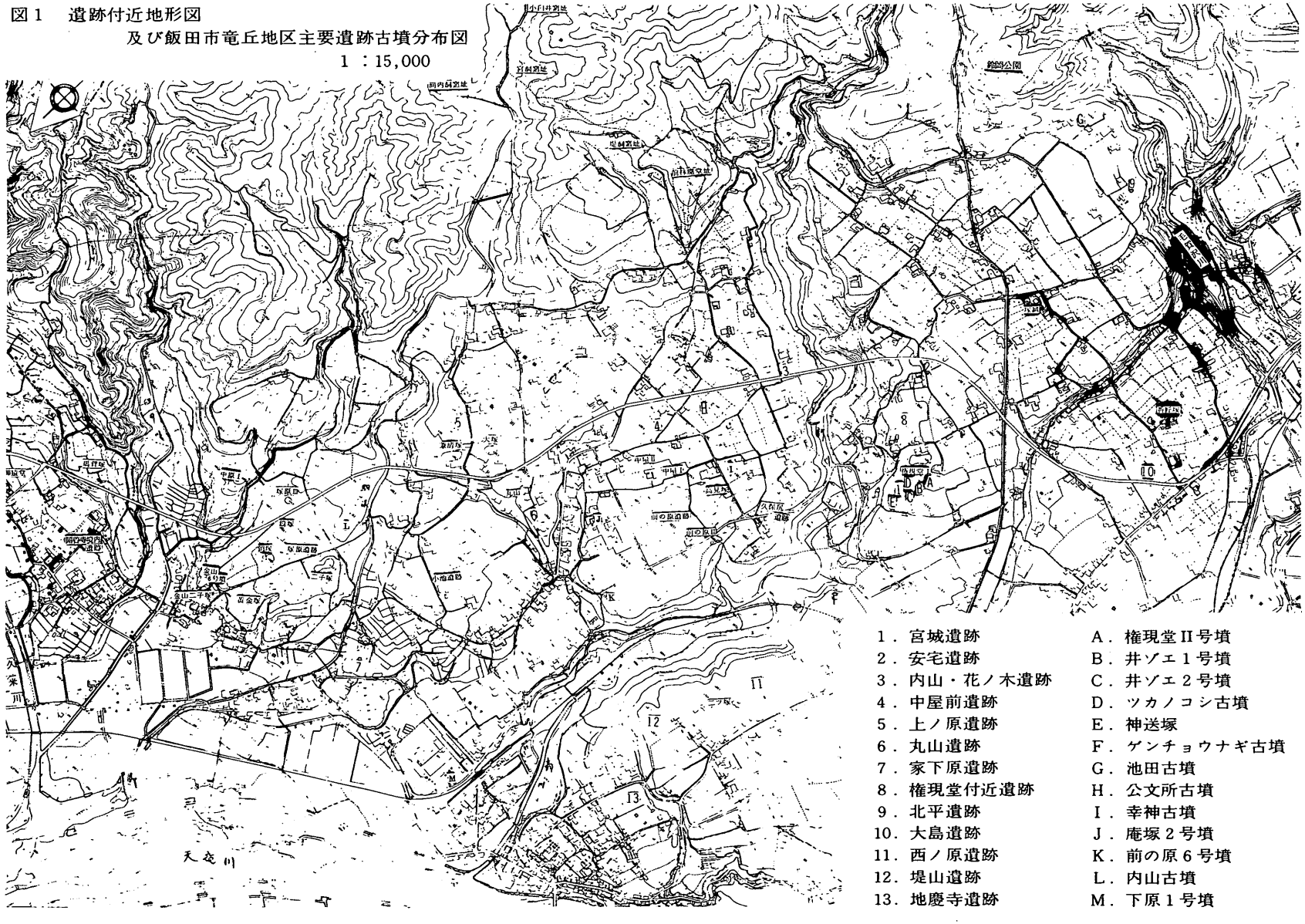


駄科断面図



竜丘地区断面図（竜丘村誌による）

図１　遺跡付近地形図
及び飯田市竜丘地区主要遺跡古墳分布図
１：15,000



1．宮城遺跡
2．安宅遺跡
3．内山・花ノ木遺跡
4．中屋前遺跡
5．上ノ原遺跡
6．丸山遺跡
7．家下原遺跡
8．権現堂付近遺跡
9．北平遺跡
10．大島遺跡
11．西ノ原遺跡
12．堤山遺跡
13．地慶寺遺跡

A．権現堂Ⅱ号墳
B．井ゾエ１号墳
C．井ゾエ２号墳
D．ツカノコシ古墳
E．神送塚
F．ゲンチョウナギ古墳
G．池田古墳
H．公文所古墳
I．幸神古墳
J．庵塚２号墳
K．前の原６号墳
L．内山古墳
M．下原１号墳

図版Ⅰ　竜丘地区航空写真

これら段丘を切って天竜川の支流が北から毛賀沢川・新川・駒沢川・臼井川・久米川が東流して天竜川にそそいでいる。このうち新川の浸蝕は著しく，東流する新川はさらに大きくカーブして南流し，巾100ｍ～230ｍ，深さ30ｍ～40ｍの浸蝕谷を形成し，もとは同一面であった駄科，長野原面と桐林面を分けている。

前の原遺跡は飯田市桐林前の原410の3番地ほかに所在し，竜丘小学校のある平坦面で，桐林段丘面の南東端部に広がる南北350ｍ，東西320ｍに及ぶ遺跡で，標高427ｍ。竜丘小学校のすぐ南は段丘崖となり，比高差20ｍで小池遺跡のある下位段丘面となる。東は比高差37ｍを測る新川の浸蝕谷となって切られ，北には凹地帯を隔てて同位段丘面の久保尻があり，新川の浸蝕谷となるが，西は，桐林面が800ｍにわたる平坦面をなすが，西に行くに従い僅かに高まって（高距５ｍを測る），前林面・臼井原面の丘陵帯に接する。

前の原微地形をみると，遺跡のすぐ北は１ｍ～４ｍの比高差をもつ巾10ｍ～20ｍの凹地帯が東西方向に走り，東側は深く新川の浸蝕谷につながっているが，西に行くに従い浅くなっている。旧河川の流路を示すものとみられる。この凹地帯を隔てて久保尻遺跡がある。西は，やや傾斜面をもって一段高まり中屋遺跡となり，そこには中屋Ⅰ号，Ⅱ号古墳がある。

遺跡の地層は，地表から20cm前後の黒土，10cm～15cmの黄褐色土，15cm内外の黒褐色土があってローム層となる。遺跡の北側は凹地帯に接して１ｍ内外の高距をもつ残丘状をなし，ここは深さ１ｍ以上の黒土の堆積層をもち，この北斜面に高見塚跡がある。

塚原遺跡及び，塚原古墳群は飯田市竜丘桐林塚原2914番地ほかに所在する。

塚原は北から東にかけて駒沢川，袋洞の沢によって切られる伊那谷第７段丘面にあり，標高400ｍ～410ｍ，南北200ｍ～300ｍ，東西300ｍの台地面にかつては20数基の古墳が存在していた飯田地方の代表的な古墳群の所在地である。

塚原の北は，臼井原段丘の凹凸ある残丘面が次第に低くなり，北から桐林面，さらに一段低い小池・塚原・中原面を構成している。塚原の北から東は駒沢川の深さ10ｍの浸蝕谷で切られ，小池遺跡のある小池面と対し，台地の東端部は緩い傾斜をもって次第に低くなり，比高差５ｍの最低位洪積段丘の小台地を形成して，さらに沖積面へと続くが，東流する駒沢川は天井川となって南にカーブし，その西側は一段低く天竜川の氾濫原となっている。塚原の西には袋洞の沢の深さ10ｍ～15ｍの谷があり，中原面に対し，さらに臼井川を隔てて開善寺山の台地と続く。南は袋洞の沢が，臼井川に合流する地点から浸蝕谷は終わって，沖積面となり，川路の天竜川氾濫原へとつながる。その合流点の東側の台地 ― 塚原の南端の段丘崖下には比高差10ｍの小さな舌状台地があり，ここに金山古墳群が存在する。

塚原の北側を国道151号線が南北方向に走っているが，他は桑園となっている。

2．歴史的環境

竜丘地区の段丘上には多くの遺跡が存在しており，近時その調査が各所に行なわれている。駄科面では国道151号付替工事に伴う調査(注２)により安宅遺跡では弥生後期，古墳時代から平安時代の集落の存在が確かめられ，この周辺から縄文中期の遺物が多く発見されている。川端・大島では中世の遺構が検出され，北平では農耕中に炉址と縄文中期土器が発見されている。昭和48年度鈴南地区農業構造改善事業に伴う調査では，宮城遺跡(注３)で縄文中期勝坂期の住居址３軒の調査と好資料が得られ，神送塚と付近古墳(注４)の調査では消滅古墳３基の周濠とその所在地，規模を確認し，神送塚出土の埋替えられた多くの副葬品が

発見され，これらの構築年代，墳丘構築についての推測が得られている。

桐林面では，国道151号付替工事の際に内山・花の木遺跡調査(注5)で古墳期から平安期の集落の存在が確かめられている。昭和45年飯田高校考古学研究クラブによって前の原1号住居址の調査(注6)がなされ，縄文中期の加曽利E期の好資料が得られ，この期の集落の存在も予想された。48年度小池地区農業構造改善事業に伴う調査(注7)で弥生終末期の住居址，古墳時代から平安時代の集落の存在が確かめられ，好資料が得られ，縄文晩期の土坑も発見されている。

上川路面では48年飯田市考古資料館建設用地の調査(注8)で中世の寺院址が調査され，縄文中期から弥生，古墳，平安時代に至る資料も発見され，開善寺境内遺跡が，沖積段丘面に各期にわたる遺跡であることがわかった。

竜丘地区で特に注目すべきは，飯田下伊那地方で最も古墳密度の高いことである。竜丘地区の面積7.9km^2の小範囲に138基の古墳のあったことが調査(注9)されており，現存古墳37基と数える。この中前方後円墳9基がある。駄科面には前方後円墳に塚越1号墳，権現堂1号墳があり，権現堂古墳群は，48年度調査の井ゾエI・II号墳，ツカノコシ古墳，神送塚等があり，駄科面には下伊那地方円墳第2の大きさをもつ番匠塚が現存する。

桐林面には，段丘南西端部に飯田下伊那地方前方後円墳の最古とみられる兼清塚があり，この北に大塚，国道151号を隔てた東に丸山の前方後円墳が段丘上に立地している。これらの他に桐林面には，前の原古墳群があり10基に及ぶ古墳の存在が調査され，中屋にはI・II号墳が，久保尻には5基，内山に5基の古墳が，桐林段丘面の先端近くに密集して存在していた。

塚原古墳群は前方後円墳二子塚（飯田市指定）を盟主とし，飯田下伊那地方最大の円墳鎧塚（5号）鎧塚（4号），黄金塚(10号)，内山塚(2号)，塚原3号墳が現存し，かつては20数基の古墳が存在していたといわれ，16基の古墳の存在が調査され，下伊那地方における典型的な古墳群の姿を残している。

塚原古墳群の南の段丘崖下の小台地には金山塚の前方後円墳を盟主とする10基を数える金山古墳群があり，塚原の西の中原台地にはかつては中原I・II号墳があり，その西の開善寺山台地には前方後円墳馬背塚（県指定）が，上川路面には御猿堂古墳（県指定）があり，馬背塚は前方，後方部におのおの巨大な横穴式石室をもつ後・III期の，御猿堂は後方部の中腹に横穴式石室をもつ後・I期の代表的な古墳である。

前林は奈良時代に比定される古瓦・瓦塔(注10)の出土した「前林廃寺址」が存在し，宮洞よりは塼仏(注11)の出土，開善寺境内よりは多量の古瓦の出土をみており，奈良時代の寺院の存在が推定されている。小臼井・堤洞・河内洞には平安期の窯址群(注12)が存在している。

中世にはいって鎌倉時代には伊賀良の庄の地頭北条江馬氏によって開禅寺が創建され，さらに信濃の国司小笠原氏によって開善寺として発展をみせている。室町初期には鈴岡城が構えられ，鈴岡小笠原氏の本拠となって中世末期にいたっている。

注1　松島信幸「伊那谷の段丘」1966　下伊那地質資料№2
松島は伊那谷の洪積段丘を高位段丘0～2，中位段丘3～6，下位段丘7・8，沖積段丘9・10を設定している。

注2　大沢和夫・佐藤甦信「安宅・大島」1969　長野県飯田建設事務所

注3　遠藤藤麻呂「宮城遺跡と神送塚付近古墳群」小池・宮城・神送塚　1974　飯田市教育委員会

注4　〃

注5　遠藤藤麻呂「内山遺跡調査概報」1967　伊那10月・11月号

注６　飯田高校考古学班「飯田市竜丘前ノ原遺跡調査報告」1974　長野県考古学会誌17

注７　佐藤甦信「小池遺跡」　小池・宮城・神送塚　1974　飯田市教育委員会

注８　佐藤甦信「開善寺境内遺跡」1974　飯田市教育委員会

注９　市村咸人「下伊那史第２巻」1955　下伊那誌編纂会

注10　大沢和夫「前林発見の瓦塔について」1961　伊那７月号

注11　遠那真周「飯田市竜丘宮洞発見の塼仏」1966　伊那４月号

注12　中田美稔「古跡」竜丘村誌　1968　竜丘村誌編纂会

II 発掘調査経過

第２次農業構造改善事業飯田市竜丘地区の昭和49年度計画は桐林久保尻と桐林塚原の両地区において実施されることになった。

久保尻地区は前の原遺跡の所在するところで，ここは昭和45年飯田高等学校考古学班によって１号住居址の調査がなされ，住居址の２分の１余を発掘し，縄文中期末の好資料を多く得ており，この期の集落の存在も予想された所であり，構造改善区域内には前の原３号古墳の所在した西端部がかかり，高見塚・中屋Ｉ号古墳の所在した位置も計画内に含まれている。

塚原は飯田下伊那地方の代表的な古墳群の所在地であり，このため構造改善事業は古墳所在地は避け農道改設のみとし，圃場整備を行なわないよう計画段階で決定したものである。

これら遺跡の記録保存のために，国・県・市の補助と，地元の一部負担のもとに農業構造改善事業計画に発掘調査費が計上され，本次調査が行なわれることになったものである。

前の原遺跡での改善計画面積5.8haの広面積に及ぶため，経費，期日の制約のため，１号住居址を中心とする区域に重点をおき，さらに前の原３号墳の西周濠の所在，高見塚，中屋Ｉ号墳の所在位置をたしかめることにした。

塚原では，農道改設用地内と鏡塚の西端部が一部農道にかかるため，これに重点をおいて調査を実施した。発掘調査は昭和49年10月15日から11月22日まで行ない，その後工事中に発見された遺構，遺物の出土状況調査が行なわれた。発掘調査日誌は次の表で示すことにした。

発掘調査日誌

月日	天候	日誌
10・11	晴	前の原・塚原の現地をみ，発掘準備，計画をたてる。
15	くもり	**前の原遺跡** 器材運搬，テント張り，グリッド設定，１号址東半分の調査にかかる。
16	晴	１号址の調査　２・３号址の検出　前の原３号墳周濠の調査
17	晴	２号址の表土排除　南北方向にのびる周濠検出　４～７号址検出
18	くもり 小雨	１号址掘り下げ　２号・４号址の調査　周濠により５号址は切られ，他は調査区域外となり１部の調査に終わる。
19	雨	休み
20	（日）	休み
21	晴 くもり	２号・４号址床面まで掘る。４号址遺物多し。　周濠北13ｍ調査　８号址検出…周濠できられる。
22	雨	休み
23	晴	２号址掘り上げ，４号址床面調査，土坑1号検出，縄文後期の土器１個体あり掘り上げ　周濠さらに北東にすすむ　掘り上げ

月日	天候	日誌
10・24	晴	2号址実測，4号址掘り上げ。埋甕を検出。井水のため北4分の1は調査不能。 3号・9号址プラン検出にかかる。3号墳周濠，北側は深くなるが東側調査区域外となる。
25	晴	4号・8号址実測。土坑2号検出掘り上げ。3号・6号・7号・9号・10号址プラン検出作業 — 全面表土を排除　11号・12号・13号址検出
26	晴	9号・11号・12号・13号址を掘りはじめる。11号址遺物多し。 土坑3～7号検出，掘り上げ，実測。土坑8～11号検出。4号址埋甕調査，掘り上げ。
27	(日) 雨	休　　み
28	晴	9号・7号・11号・12号・13号址の調査　　9号址深さ50cmで床面に達せず。
29	晴	カマド検出　　床面に達す。遺物多し。
30	くもり 雨	午前中作業　9号址床面に達し石製模造品（勾玉）を検出 7号・11号・12号・13号址床面の調査　13号址完掘
31	くもり	3号・6号址の調査にかかる。6号址東壁よりに焼土の厚い堆積あり。
11・1	晴	7号・9号・11号・12号・13号址掘り上げ，写真撮影，12号・13号実測。 11号址埋甕3こをもつ。6号址カマド検出。3号址の調査をすすめる。
2	晴	6号址完掘，3号址・10号址の調査，10号は3号址に，10号址は6号址に切られる。14号・15号・16号址の検出，8～10号土坑掘り上げ。7号・11号址実測。 11号址埋甕3個のたち切り調査，実測，掘り上げ。
3		休　　み
4	晴	下伊那教育会考古学委員会による14号址の調査。プラン十分つかめず。
5	雨	休　　み
6	晴	10号・15号・16号址の調査。15号址平安期。15址の下に16号址（古墳期）あり。 17号・18号址を検出。6号・9号址の実測。3号址完掘。
7	朝小雨 晴	17号・18号址の調査にかかる。18号址の北にピット群を検出，10号址完掘 15号址調査
8	晴	15号址完掘，実測，16号址の調査，17号址床面に接し土器多量の出土，3号・10号址実測。高見塚のトレンチⅠ・Ⅱ調査。古墳の痕跡なし。9号址床面の土を水ぶるい。
9	くもり	16号址カマド検出，壺2個体出土。17号址中央部に多量の土器掘り上げ。14号址の調査（委員会）床面に達す。18号址北のピット群は柱列址Ⅰとなり，北側へ拡張，排土作業。9号址の土水ぶるい。高見塚のトレンチⅢ・Ⅳ調査。古墳の痕跡なし。トレンチに住居址とみるを検出。
10	晴	14号址（委員会）の床面調査。台付甕1個体の出土
11	晴	14号・16号址完掘，写真，実測。17号址床面調査。6号址の土水ぶるい。 柱列址Ⅰの拡張排土作業 — 盛土のため苦労する。
12	晴時々 くもり 朝土凍る	17号址完掘，全体測量にかかる。柱列址Ⅰの検出作業 6号址の水ぶるい — 焼土下の床面の土より臼玉5個を発見 （日没ごろより寒さをます）
13	晴 強　風	柱列址Ⅰの調査・柱列址Ⅱを17号址東側に検出調査。　水ぶるい，さらに臼玉5個を発見,10個となる 17号址，高見塚トレンチⅠ～Ⅳの実測。
14	晴 土凍る	柱列址Ⅰ掘り上げ（さらに北にのびるとみる），写真，実測。19号址を検出，調査。18号址の調査にかかる。中屋Ⅰ号墳のトレンチⅠ調査，痕跡なし。 **塚原調査**にかかる。 — 新設道路の側溝に遺構をさぐる。

月日	天候	日誌
11・15	晴	18号・19号址（中世）完掘，20号址の調査。 塚原　鏡塚の道路となる1部分のトレンチ調査，周濠の検出。
16	くもり	鏡塚墳丘，トレンチ調査部の実測。農道用地の調査 — 遺構・遺物なし。
17	(日)雨	休　み
18	雨	休　み
19	晴	農道用地の調査，遺構なし，粘土質に水が溜り，調査難行。 前の原　中屋Ⅰ号墳調査トレンチⅡを掘る。周濠検出，高見塚トレンチVの調査 6号・9号・16号址のカマドたち割調査　20号址拡張調査。 南北方向の第1号道路用地側溝部の調査。21号（縄・中）・22号（古墳） 23号址（平安）の住居址の存在をたしかめる。
20	くもり	塚　原　農道用地の調査，遺構・遺物なし。 前の原　20号址，3分の1を掘り上げ，盛土のための調査を断念，高見塚トレンチVの調査。残丘上より北に下がって周濠を検出。中屋Ⅰ号墳トレンチ調査実測 全体測量，測量の一部を残し，現場調査を終わらす。テント，器材の撤収。
21	くもり 雷　雨	20号址実測　全体測量
22	晴	全体測量　測量不備箇所の修正。現地調査完了。
1・12	くもり	前の原，工事中埋甕の発見によりより調査。1個は掘り上げられており，他の1個体は現状で残る。床面と壁面を確認，実測，掘り上げ，24号址とする。
13	晴	埋甕箇所の調査・測量をなす。
2・14	くもり 夜　雨	塚原2号道路東傾斜面より工事中土師器の出土調査，道路の断面に住居址の存在を確認（奈良時代）
15	晴	1号・2号・3号址を確認調査，測量（古墳時代～奈良時代）

発掘作業終了後，遺物の整理，実測，製図をなし，報告書の作成にとりかかる。

Ⅲ 調 査 結 果

(Ⅰ) 前の原遺跡と古墳群

前の原遺跡の農業構造改善計画面積は5.8haの広面積であり，昭和45年飯田高校考古学班の調査した1号住居址を中心にして，竜丘小学校敷地より北120ｍ，第2号道路より北25ｍ，第1号道路の東に南北50ｍ×東西50ｍの区域を調査区Ⅰとし，ここに重点をおいた。西より東へａ・ｂ・ｃ……ｙ列，南より北へ1・2・3……25列の2ｍ×2ｍのグリッドを設定した。（図2）この調査区の東側は前の原3号墳の所在地であり，用地内に周濠の存在が予想された。調査区Ⅰの北50ｍには第Ⅱ調査区を設定，高見塚の所在した地域にトレンチⅠ～Ⅴを設定し，さらに構造改善区域の西端部に中屋Ⅰ号墳の所在していた地点があり，ここにトレンチⅠ・Ⅱを設定した。広面積であり，費用，期限の制約のため，その他の

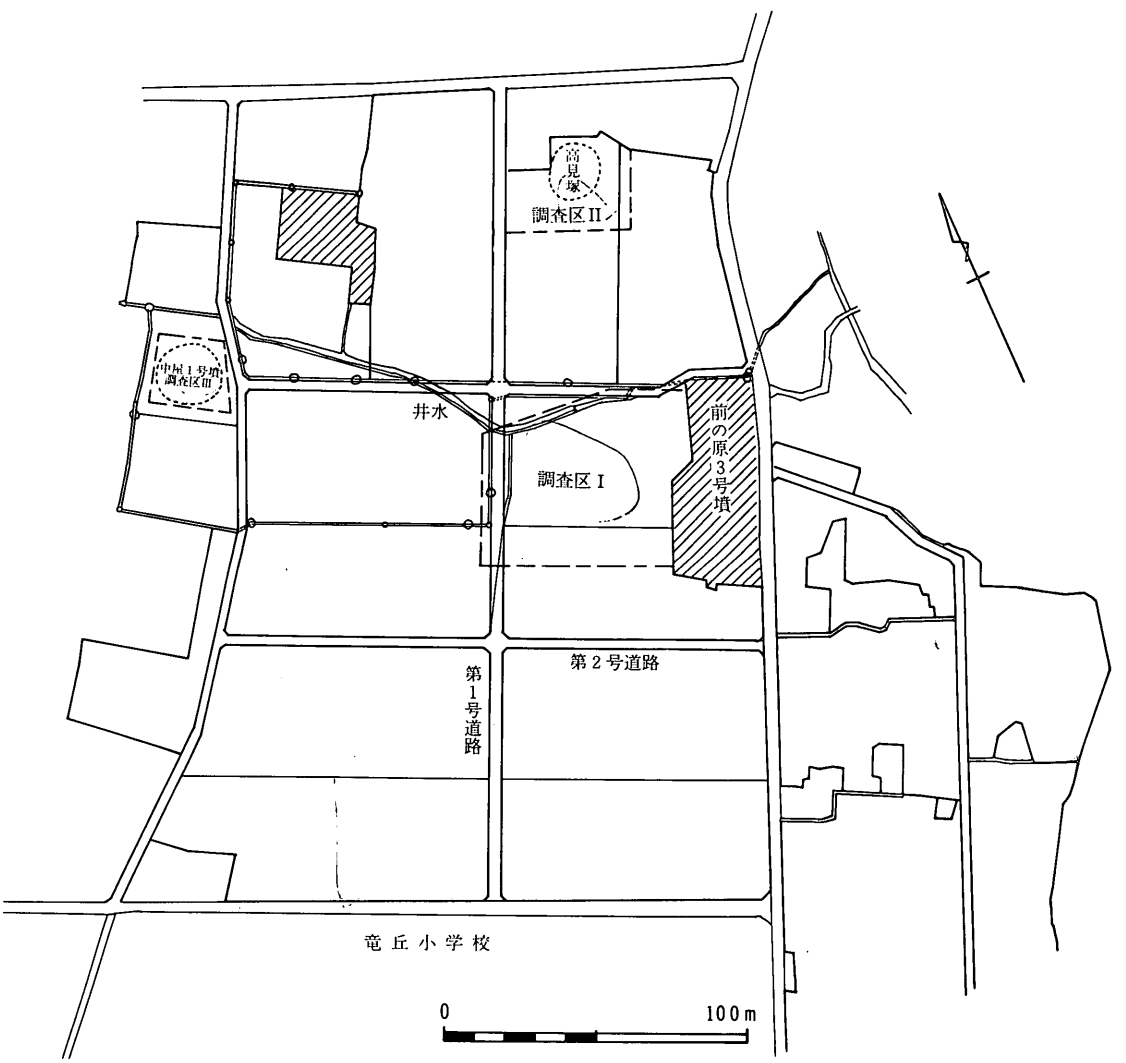


図2　第2次農業構造改善事業飯田市竜丘久保尻地区（前の原）

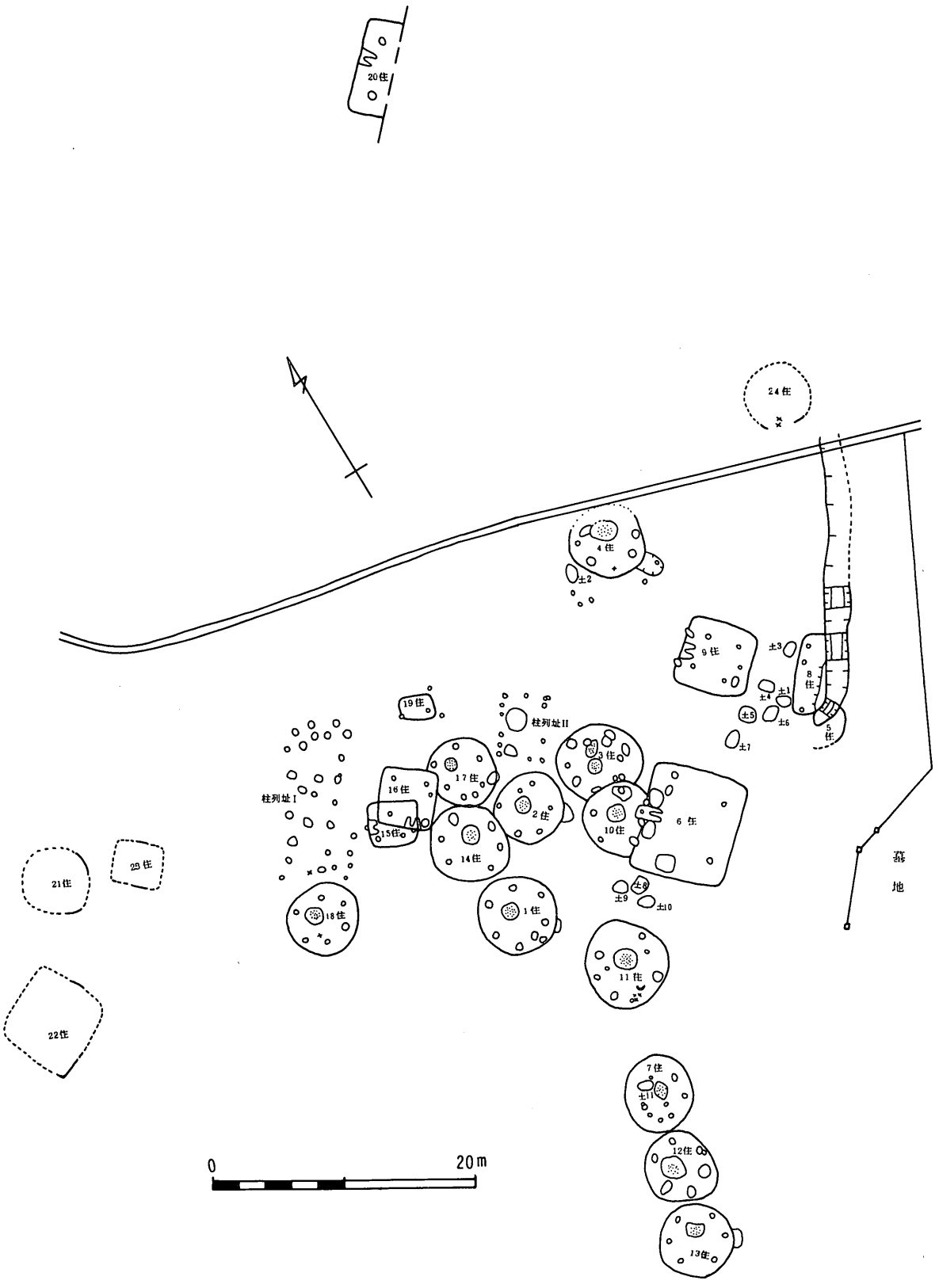

20住
24住
4住
±2
9住
±3
8住
±4
±1
±5
±6
5住
±7
19住
柱列址II
3住
17住
16住
柱列址I
2住
15住
10住
6住
14住
±9
±8
±10
1住
11住
21住
23住
18住
22住
7住
±11
12住
13住
墓地
0
20m

図３　前の原遺跡遺構図

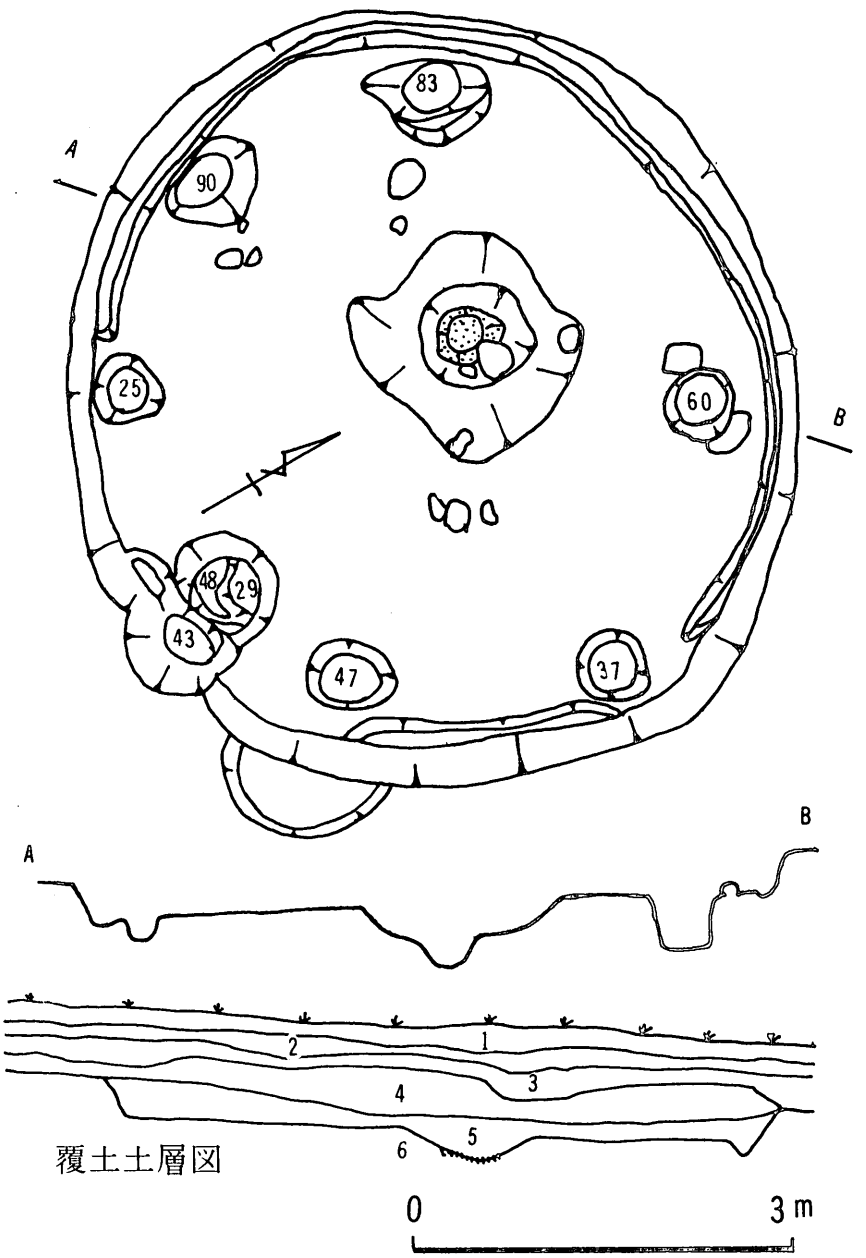

A
B
83
90
25
60
48
29
43
47
37
覆土土層図
1. 耕土　2. 黒色土
3. 黄褐色土
4. 黒褐色土（木炭を含む）
5. 暗褐色土
6. ローム
0
3 m

図４　前の原１号住居址

区域は工事中，遺構発見の際調査を行なうことにした。

Ⅰ．前の原遺跡の遺構と遺物

発掘調査によって発見された遺構は次のようである。（図３）

住居址　24軒

縄文中期末　15　　古墳時代　7　　平安時代　1　　中世　1

柱列址　2

土坑　11

(1) 住　居　址

ア，縄文時代中期末住居址

１号住居址

遺構（図４）調査区Ⅰのほぼ中央にあって，かつて飯田高校考古学班により，西２分の１以上が[注１]発掘され，多くの好資料を得たところである。今次，東半分の調査をなし，その全容を明らかにした。径南北5.8m，東西6.1mのほぼ円形のローム層へ深さ30cm掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は６ことみるが，南壁に接した重なり合うピットがある。炉址は中央より北にあって，炉石ははずされたとみられる痕跡をもつ。1.8m×1.8mの不整形な方形状をなし，床面より50cmの深さに掘りこまれている。床面は堅く，南面を除き，壁に沿って巾10～15cm，深さ10cm前後の周溝をもつ。南南東テラス上に柱穴を中心にした位置に径1.3m，深さ15cmの半円状の掘りこみがある。出入口ともみられる形状をなすものである。遺物の出土状況は，昭和45年発掘時に比し少なく，炉を中心とした位置に住居の廃絶後投げ入れたとみる状態であり，床面に接するものは少なかった。

遺物（図25・26・44）　土器・石器・土製品がある。**土器**には，図25の１～８にみるように底部からふくらんできた胴部が頸部でしまって大きく外反するものが口辺部で強く内湾するキャリバー形の深鉢を中心とする土器であり，文様は口辺部におけるつなぎ渦巻文と，それにはさまれる区画文，胴部・頸部には波状文，連弧文を特徴とし，地文には縄文，条線文が施される。１～４は木曽川下流地帯の咲畑式土器そのものであり，他も東海地方との関連の深い土器群である。

図25の９～20は，わずかに頸部でくびれ，外反する口縁をもつ深鉢と無頸甕（９・20），鉢・浅鉢（18・21）があり，口縁に隆帯をつけるか，口縁を折り返して肥厚させるものである。文様は地文に縄文を施すだけのものが多く，条線文（19・20）や無文（20）のものもみられる。これらも東海地方との関連をもつ土器群とみられる。

図26の１～８は当地方の加曽利Ｅ期にみられるタイプで，沈線または隆帯で渦巻文，円形文，唐草文または懸垂文を施し，その間を縄文・条線文・刺突文で埋めており，１・２には把手が付く。

図26の９～12は無文の深鉢形土器で頸部は僅かにくびれて口縁部は外反するが９は，口辺で内湾し，口唇が内側に折れて肥厚する。図26の13は台付甕の脚部であり，土製品に図26の14・15の土偶の尻部と脚部がみられる。

石器　１号住居址の石器の出土量は特に多く，注目される。打石斧の完形品134こ，磨石斧４こ，横刃形石器54こ，石錘26こ，石匙１こ，石鏃４こ，スクレパーとみるもの１こ，石皿２こ，敲打器２この

出土をみている。

打石斧・横刃形石器の図は(注2)費用の関係で略さざるを得なかったが，打石斧は刃部，基部を欠くもの50こを数え，その計184こと出土量も多く，いずれも小形で，最長で13.5cm。大部分が長さ８～９cm，幅４cm前後。最も小さなもので７cm前後。ずんぐりした形のものも比較的多くみられる。石材は硬砂岩と緑泥岩がほぼ同数であるが，横刃形石器は硬砂岩が大部分を占める。

その他の石器（図44），打石斧，横刃形石器以外を図44にまとめた。この中で特に注目すべきは石錘である。１～26の26この出土量と，この内10こは床面に接して同一方向にそろって出土をみたことである。磨石斧に27～30の４こがあり，27は完形，28は頂部のみに，29は基部全面に，30は側面に敲打成形が施されている。37は硬砂岩製の粗製の縦形の石匕，石鏃には33～36の４こが出土しており，今次調査の出土量２に対して倍数である。38は黒曜石製の剝片石器で側縁を利用したスクレパーとみられる。敲打器に31・32があり，石皿に39・40の中形のものが出土しており，40の裏側は砥石として使用されている。

（飯田高校考古学班）

２号住居址

遺構（図５）　１号住居址の北東3.5ｍにあり，14号住居址の東端部を僅かに切っている。径 南北5.3ｍ，東西5.5ｍの円形，ローム層に30～40cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴は８こ発見されているが，その規模，配置からみて主柱穴は５ことみられる。炉址は，中央より僅かに北に寄ってあり，1.4ｍ×1.7ｍの楕円形，床面より深さ30cm掘り凹めたもので，炉石は崩された状態で中央部に１列に並べられていた。南東テラス上に柱穴を間におく位置に深さ20cm，径1.4ｍの半円状の掘りこみがあり，出入口ともみる形状のものである。南側の一部を除き壁に沿って巾20～30cm，深さ10cm前後の周溝がめぐらされている。

遺物　土器と石器があり，**土器**（図27）は頸部が僅かにくびれて口縁部が外反する深鉢形が大部分を占め，鉢形とみるものに２がある。主体をなす土器の文様は口縁部を円の区画文，その中を沈線で埋める１・４・６・８，刺突文で埋める５・11があり，胴部は綾杉文が施されている。３は縦の浅い沈線と懸垂文を，７・９は口辺部を肥厚させ，縦の条線文を施す。２の鉢形土器は口辺部を肥厚させ，その下に太い沈線を引く以外は無文となり，内外面とも暗黒色を呈す。渦巻文をもつものに13・14があり，14は千鳥形圧痕列が施され，やや古い様式とみられるが，２号住居址の土器は諏訪地方の編年では曽利III式の新しいタイプに比定されるものである。

石器（図48・49）　打石斧には図48の１～18があり，18は長さ18.8cmと大きく，長さ10cm前後が大部分を占め，最小の17は6.8cmのずんぐりしたものである。１～５は硬砂岩，他は緑泥片岩である。横刃形石器に図48の19～24の５こがあり24が緑泥岩，他は硬砂岩である。図48の28は硬砂岩製の縦形の石匕，磨石斧に図49の１・２があり，１は刃部，基部を欠く。緑泥片岩製。２は輝緑岩製で刃部を欠く。ともに側面は敲打成形が施される。

図48の25・26は変輝緑岩製の楕円形をなす磨製石器で側面は敲打成形，両頂部に土ずれ状の使用痕がみられ，26には１か所円い凹みをもつ。ともに火にあたったものであり，何に使用されたか不明である。図48の26は砂岩製の砥石，中央に円い凹みがみられる。敲打器に図48の29の小形のものがあり，大形には図49の３・４がある。図49の５は磨石，６は礫器，７・８の石皿があり，８は巾９cmと極めて小形の輝緑岩製の特異なものである。

（片桐）

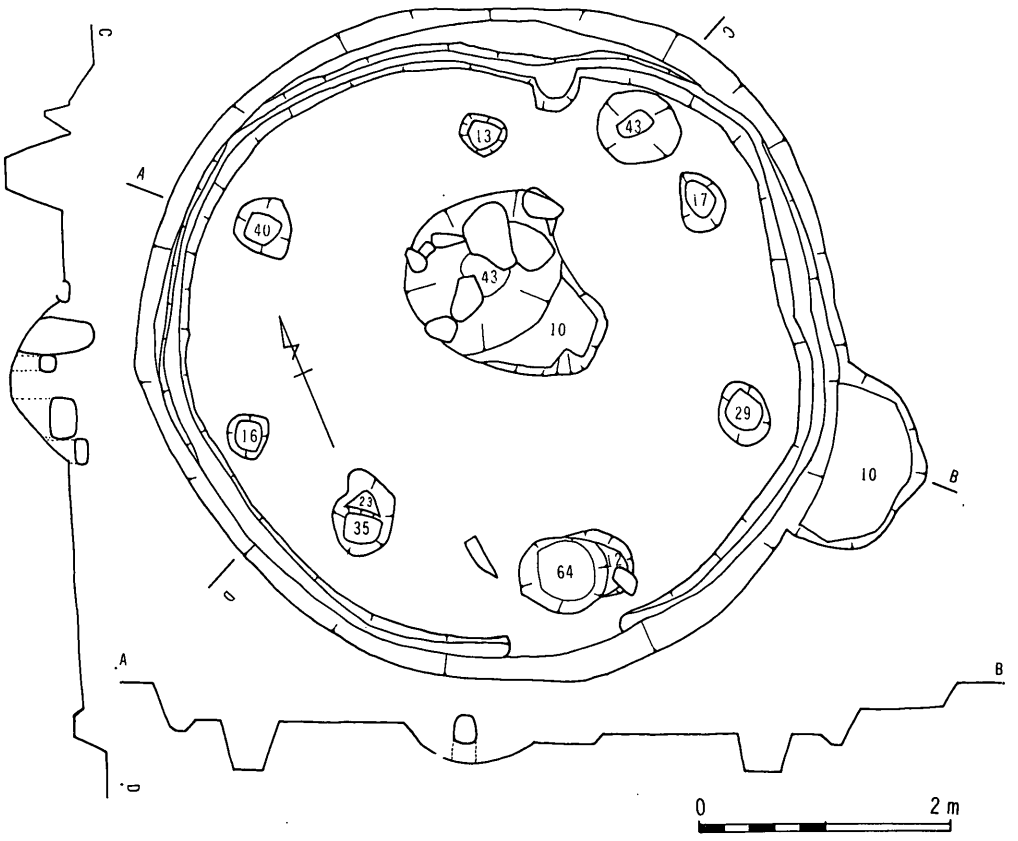


図５　　前の原２号住居址

３号住居址

遺構（図６）　２号住居址の東60㎝，南は10号住居址によって一部は切られている。東西径6.3ｍの円形，ローム層へ30㎝掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，１回建て替えの行なわれた住居址で，11この柱穴，この中に重なり合うもの３こがあり，炉址２こが発見されている。主柱穴は６ことみられる。炉址は古い方は中央より北に寄ってあり，新しいのは前者の南に接して中央よりやや西よりに造られ，炉石をほぼ完全に残している。床面より古いのは35㎝，新しいのは30㎝掘りこまれている。

遺物　土器と石器があり，**土器**（図28）には深鉢，無頸甕，台付土器，吊手土器がある。深鉢形土器は頸部のしまりの小さいキアリバー形をなすものが主体をなし，文様は口縁部は沈線または隆帯による円，楕円の区画文をもち，その内部を沈線で埋める２，縄文と細い懸垂文で１・４，縄文だけで埋める３・７があり，胴部は綾杉文と縦の沈線を施す２，縄文を地文に沈線と懸垂文を施す１・３・４・10・11がある。波状口縁をなす１・３は４この頂部をもち，そこを渦巻文で飾り，４は太い縦の沈線を引き，その中に爪形状の刻みを施すもので，一時期古いものとみられる。５・６は無文の口縁部で，５は口唇部を内側に折り返して肥厚させている。９は無頸甕とみられ，太い隆帯による不規則な区画文とその内部を細い沈線で埋めている。

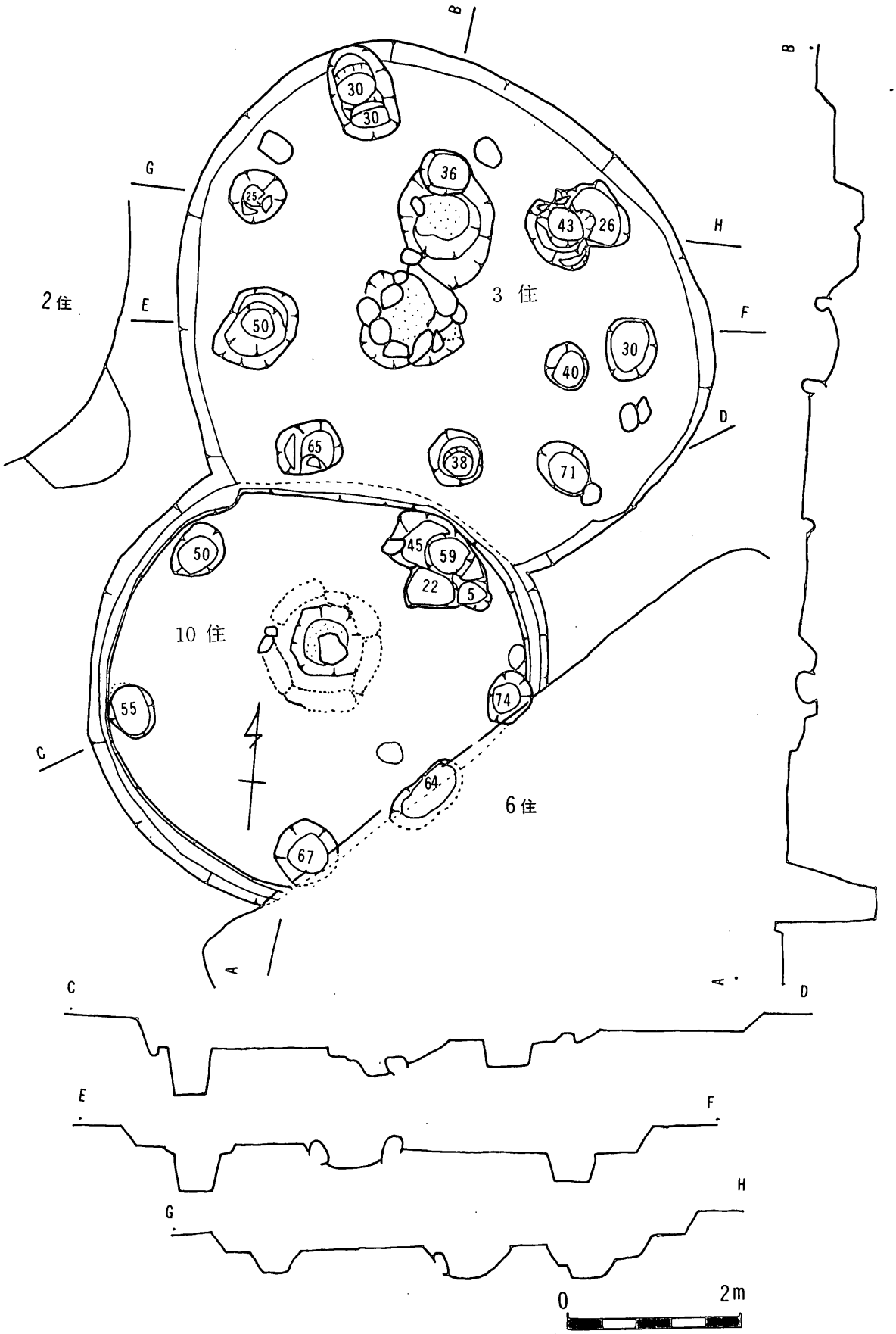


図6　前の原3号・6号住居址

台付土器の台部に12～14があり，14は５角形をなす特異なものである。15は吊手土器の吊手部で，連続刺突文で飾っている。３号住居址の主体をなす土器は加曽利ＥⅡ式，諏訪地方の曽利Ⅲ式に比定されるものであるが，曽利Ⅱ式の要素をもつものがみられる。

石器　大部分の石器は費用の関係で記載を略さざるを得なかったが，打石斧の完形31こ（硬砂岩18，緑泥片岩13）があり，最大長12㎝，最小７㎝，10㎝前後が大部分を占め，平均重量65ｇである。横刃形石器７，敲打器３があり，磨製石斧には刃部を欠くもの２こ，完形品に図52の５・６があり，５は緑泥片岩製，側面は自然面を利用している。６は輝緑岩製，側面は敲打成形が施され，重さ1241ｇを量る大形のものである。図43の11は小形の磨石斧で両刃のノミである。図52の７は凹石で，乳棒状磨石斧の折れを利用したとみられ，緑泥岩製で表裏両面に１こずつの凹みをもつ。　（今村）

４号住居址

遺構（図７）　３号住居址の北11ｍにあり，北側は井水のため３分の１は調査不能であった。東西径6.2ｍの円形，ローム層に深さ40㎝掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴は５こ検出されているが，配置からみて主柱穴は６ことみられる。炉址は中央より北に寄ってあり，炉石ははずされているが東西2.1ｍ，深さ50㎝の掘りこみをもつ大形のものである。壁に沿って巾15㎝，深さ10㎝前後の周溝がめぐるが，南側と西側の一部は切れている。南東側のテラス上に，柱穴を中間の位置におく所に径1.6ｍ，深さ20㎝の半円状をなす凹み４こがあり，出入口ともみられる形状をなす。

南側の周溝に接して埋甕が（図13．図29の１）１こ検出されている。住居址の60㎝西に土坑２号があり，南側には３この柱穴が発見されたが，盛土のために調査は断念した。

遺物　覆土下層から床面にかけ全面的に遺物の出土はみられ，その量も多い。特に炉址周辺の床面よりの出土が多くみられた。遺物には，土器，土製品，石器がある。

土器（図29・30・31）には，深鉢，鉢形土器，台付土器，吊手土器がある。深鉢形土器には頸部が僅

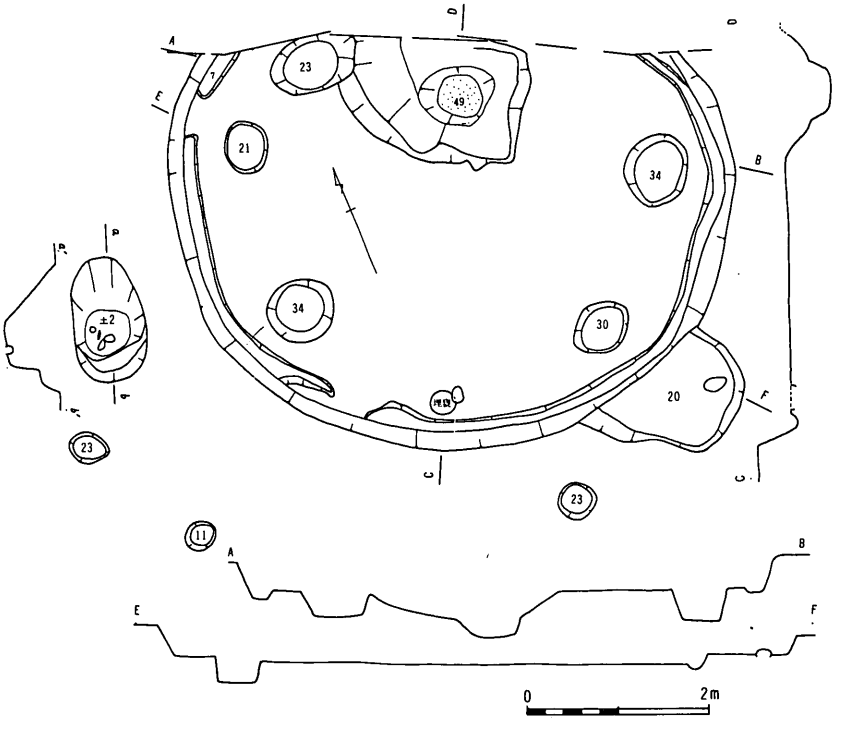


図７　前の原４号住居址

かにくびれて口縁部が外反して口唇部で僅かに内湾するキャリバ形をなすものが主体をなす。文様は口縁部は隆帯，沈線による渦巻文，ワラビ手文，区画文が施され区画内部は沈線，条線で埋め，胴部は縦の沈線と蛇行する懸垂文で区切り，この間を稜杉文で埋めるものが大部分を占めるが，縄文を地文にするものに図30の７・９があり，連続刺突文を並用するものに図30の11がある。区画文内を縄文で埋めるものに図30の10がある。

図29の１の埋甕と図30の12は胴部がふくれ，口縁部が直立するものと，図30の５の口縁部が内湾する樽形土器もみられる。これらは口縁帯部は無文，図29の１，図30の５は無文帯の下に粘土紐を編んだ縦の隆帯をはりつけ，この間に長方形の区画文が付く。区画内を羽状文，または千鳥状圧痕文が施され，胴部は大きな孤を描く懸垂文で，この中を沈線で埋めている。図30の12は無文帯の下に２本の太い隆帯がめぐりこの間に２条の波状文が施され，さらにその下に縦の条線で埋める区画文が付くとみられる。以上は飯田地方の加曽利Ｅ式の時期にみる一般的な土器群である。

図29の３・４は胴部はふくらんで頸部でしまり，短かい口縁部は強く外反してさらに内湾する。口縁をブリッヂ状の把手をめぐらして飾り，胴部には懸垂文と羽状文が施されている。これら２つの土器はつぎの鉢形土器と関連の深い土器である。

鉢形土器は，口縁部の縦位の隆帯をブリッヂ状の把手にして飾るもので，図31の23～27がある。25は縄文，他はキザミ目または櫛描線が施される。26の口縁部は八角形，23は六角形を呈し，23の口辺部内側には縄文が施されている。27は飾られた土器で，胎土，焼成の良いていねいな仕上げのものである。図31の14は器形は不明であるが，同一分類にはいるとみられる。図31の22は口縁部はくの字状に外反して無文，頸部のくびれ部の下に両耳の把手が付き，胴部は縦の条線が付く。これら一連の土器は東海地方との関連をもつ土器群とみられる。

図31の29は台付土器の台部と考えられ，底部は方形をなすとみられる。28は吊手土器の吊手部である。

土製品（図43の２・６・７）　２は土偶の胴部，ワラビ手状の渦巻文と沈線，円の凹文が施されている。６・７は耳栓，土器片を円形に削って作られており，６は縄文，７は２条の孤文が施される。

石器　主体をなす打石斧，横刃形石器等は費用の関係で図の記載を略さざるを得なかったが，打石斧の完形36こ（硬砂岩18，緑泥岩12，輝緑岩２，ホルンヘルス２，片麻岩１）その材質の多種であることが注目され，最大は長さ17cm，重量490ｇ，最小は長さ８cm，重量18ｇと差は大きいが，大部分は10cm以上で本遺跡の打石器では大形である。平均長さ10.5cm，巾3.8cm，重量110ｇを量る。磨石斧は刃部を欠くもの２こがあり，輝緑岩製，横刃形石器は11こ（硬砂岩８，緑泥片岩３），敲打器に小形の63ｇの重量のものがあり，また，扁平の円い川原石の側面に敲打痕をもつものがある。

図43の12は石匕，緑泥岩製，重量７ｇの小形の精巧なものである。図52の１は花崗岩製の石棒，２は砥石で，砂岩製，２面が使用されている。

５号住居址

遺構（図18）　調査区Ⅰの東端部で用地外に接するところにあり，北と西は前の原３号古墳の周溝と８号住居址に切られ，南は盛土のため調査不能，このため東壁の一部と床面を検出し，円形プランとなることを確かめたものである。

遺物（図41の５）　床面に東壁に立てられた状態で出土をみたものである。４この頂部をもつ波状口縁をなす深鉢形土器で，胴部はふくらみ頸部はややしまって口縁は外反し，口唇部で内湾する。文様は粘土紐による隆帯が口縁をめぐり，これより下る隆帯は胴下部で孤をかき２本の隆帯に分かれ口縁部にいたって対称的な円を描く。これが１組となる粘土紐隆帯で飾られる。高さ26.5cm，口径15cm，1.2cmと

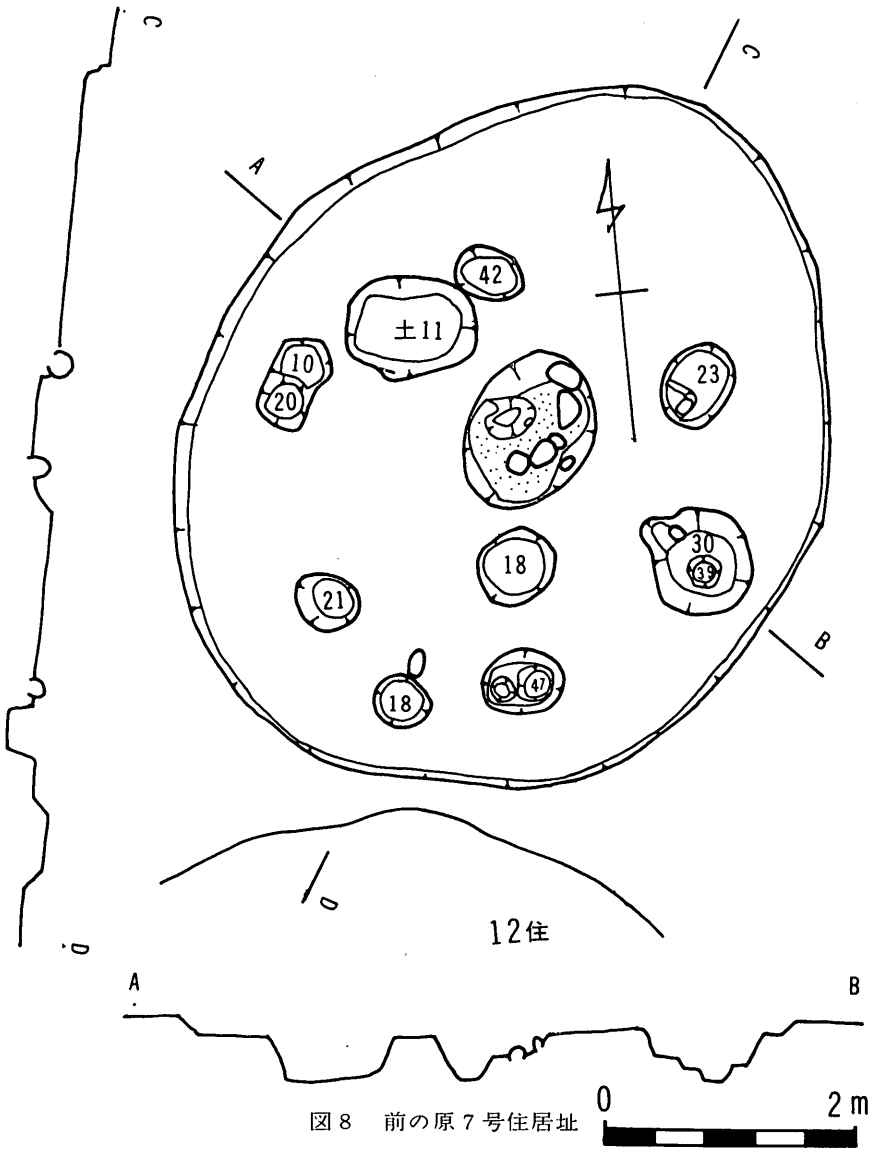


図８　前の原７号住居址

厚い器壁をもつ。飯田地方では特異なもので，中期終末期か，後期初頭とみられる土器である。

７号住居址

遺構（図８）　南から北に13号・12号・７号住居址と接しあいながら並び，７号住居址の北２ｍに11号住居址がある。径南北5.4ｍ，東西4.9ｍの楕円形をなし，ローム層に西側で20㎝，東側で10㎝ローム層に掘りこまれる竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく，柱穴は８こ検出され，その内４こは２回の掘りこみがみられ，建て替えの行なわれたものと考えられ，主柱穴はその配置からみて６ことみられる。炉址はほぼ中央部にあって南北1.3ｍ，東西1ｍ，深さ20㎝の楕円形をなし，炉石ははずされている。炉の掘りこみの西寄りに後に掘りこまれたピットがある。炉址の西30㎝に土坑11号が掘りこまれておりこれとの関連のものとみられる。

遺物　土器と石器があり，**土器**（図32）は，口縁部が大きく弧を描くキャリバー形をなす深鉢が主体となる。細い単節縄文を地文にしており，１・４・５は４この頂部をもつ波状口縁をなし，波状をなす

部分に文様の中心がおかれ，S字状文，ワラビ手文が施され，その両側に連弧文による半円区画文をもつ。4・5の区画文上部は千鳥状圧痕列で飾り，胴部に波状文と連弧文がめぐる。2は胴部の大きくふくらむ土器で，口縁部に大きな楕円区画文を，この間をS字状文で飾り，区画文内部は篦状具による押引文が施される。6は口縁部は末端が流水文風になる連弧文が，胴部は飾られた懸垂文が底部近くに達している。8～10は外反する口縁部は一旦内湾して，さらに外反する。8・9は粘土紐による9は長方区画文で篦描きの斜線，8は半円区画文，内部を太い斜線で埋めている。10はS字状文をはさんで連弧文による楕円区画文を，その内部に太い縄文が区画文上部を2条の押引文で飾るもので4・5との関連をもつものとみられる。7は口唇部を肥厚させ直立に近い口縁部をもち，縦の条線が施されている。本址の土器は東海地方との関連の深い要素をもつもので，諏訪地方の編年では曽利II式に比定される。

石器　図を略すが，本遺跡で，この期の全面調査した住居址中最も出土量が少なく，打石斧8こ（硬砂岩3，輝緑岩2，緑泥片岩3）で長さ8.5～12.5cm，平均重量67gである。横刃形石器（硬砂岩）2こがある。（今村）

10号住居址

遺構（図6）　3号住居址の南側の1部を切り，また南東側の1部は6号住居址によって切られている。径5.3mの円形をなし，ローム層に30cmの深さに掘りこまれた竪穴住居址である。床面は堅く，壁に沿って周溝がめぐる。周溝に接して主柱穴6こがあり，50～74cmといずれも深い。炉址は中央より北寄りにあり，径1.4mの円形，深さ床面より40cmの掘りこみで，炉石のはずされた痕跡を明らかに残している。

遺物　土器・石器・土製品がある。**土器**（図33）は，キャリバー形をなす深鉢が主体をなし，文様は縄文を地文にしており，口縁部に渦巻文（5・6），S字状文（10・12）を間にして連弧文による区画文をもち，頸部に横位の胴部に縦の沈線を引き，これをつなぐ連弧文をもつ5・7があり，頸部から外反する口縁部はさらに強く内湾する（5～11）東海地方との関連の深いものと，内湾は小さく，隆帯による渦巻文と区画文をもち，胴部は蛇行する懸垂文をもつだけの4の当地方に多くみられるタイプがある。

頸部のくびれは少なく，口縁部の外反する1～3があり，1・2は口縁上部に1条の太い沈線をめぐらしこの下に斜行する縄文が付く。3は6この頂部をもつ波状口縁をなし，文様は沈線による渦巻文とこれをはさむ区画文を口縁部に，胴部は縄文を地文に懸垂文が施される。口縁部が一旦内湾してさらに外反する12～14・17があり，9は肥厚する口唇部に太い沈線が施されるものがある。16は無頸の深鉢（樽形？），15は口縁部を貼布するブリッヂ状の把手で飾る土器とみられる。

3号住居址を切る10号住居址の土器の二者の間に時間差は認められなく，諏訪地方編年の曽利III式を中心に，曽利II式の要素を含むものである。

土製品（図43の4）に土偶の手の部分がある。

石器　大部分の図は費用の関係で略さざるを得ないが，打石斧の完形17こ（硬砂岩6，緑泥片岩10，輝緑岩1）があり，最大長さ12cm，巾6cm，重量165g，最小は長さ7.5cm，巾3cm，50g，平均重量80g，長さ10cm以内のものが多い。横刃形石器3こ（硬砂岩2，緑泥片岩1），敲打器1，乳棒状石斧の全面敲打成形の刃部を欠く1こ，図52の4は側面敲打，緑泥片岩の自然面を利用した磨石斧とみるもので重量1390gの大形である。図43の10は黒曜石製の石鏃，13は縦形の石匕で43gの硬砂岩製の粗製のものである。

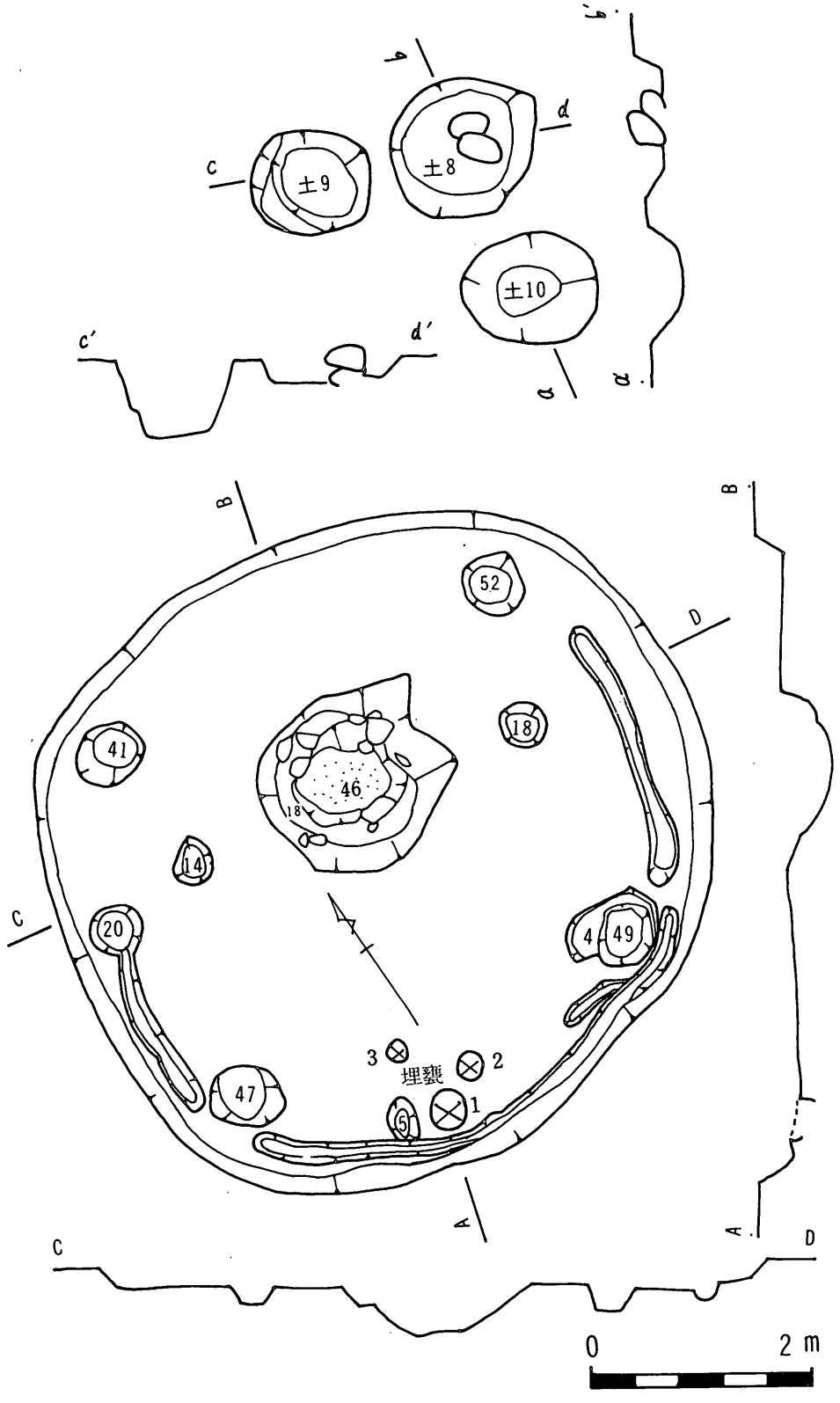


図９　前の原11号住居址，土坑8・9・10号

11号住居址

遺構（図９）　１号住居址の南東2.5ｍにあり，南には4.7ｍ距てて７号住居址，ついで12号，13号住居址が並んでいる。北1.5～２ｍに土坑８号・９号・10号がある。南北径5.8ｍ，東西径6.1ｍの円形プラン，ローム層に20～30㎝掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴６ことみる。炉址は中央より北によってあり，径1.6ｍの円形，床面より40㎝の掘りこみで炉石のはずされた痕跡をみる。南半分に柱穴を間にした周溝があり，南周溝に沿ってNo.１，これより東15㎝にNo.２，No.１より北30㎝にNo.３の埋甕が検出された。（図13・34）No.１は底抜き，No.２は胴下部の底有，No.３は胴部のみの底無である。

遺物　土器・石器があり，石器の出土量は多い。

土器（図34・35）　図34はNo.１～３の埋甕，１は口縁部を欠くが現存高さ52㎝，最大径43㎝を測る大形の深鉢で，全面に唐草文と楕円の区画文が施され，その内部を斜行沈線文，羽状文，交互刺突文で飾る。２は胴下部のみで縦の条線が全面に付く。３は内部は縦の沈線で埋める円の区画文をはさんで上下に羽状文で飾る長楕円区画文が施されている。

床面と覆土下層の土器（図35）には，頸部のくびれの少なく，口縁部の湾曲の小さなキャリバー形をなす深鉢を主体とし，無頸深鉢・浅鉢・台付土器・吊手土器がある。

キャリバー形をなす深鉢の文様は口縁部に隆帯，または沈線による渦巻文，ワラビ状文をはさんで区画文をもち，胴部を綾杉文で埋めるのが一般的とみられる。９は太い隆帯を施し，葉脈状の沈線で飾る本遺跡では類例のない土器である。６は１この頂部をもち，この部分のみは波状口縁となっている。無文に４・５があり，８は口縁部は無文，頸部に隆帯をめぐらし，それに円形の刺突文がならぶ。１の無頸深鉢は粘土紐の縄状に組んだものを縦にはりつけ。これをはさんで長方区画文がつき，内部を圧痕列で飾り，胴部に懸垂文を施し，細い条線で埋めている。２の浅鉢は無文，台付土器14は，隆帯を１条めぐらす台部である。15は吊手土器の吊手部で，Ｓ字文，千鳥状圧痕列で飾るものである。

本址の土器には諏訪地方の曽利IIの新しいスタイルを含むものもみられるが，曽利III式に比定されるものである。

石器（図45・46・47）　打石斧，磨石斧，横刃形石器，敲打器，石錘，磨石，石皿がある。打石斧（図45・46の１～３）は完形品48こあり，図45の１～19は硬砂岩，20～45は緑泥片岩，図46の１は黒雲母ホルンフェルス，２は薫青ホルンフェルス，３は粘板岩質で，１・２の石材を使用した例は稀である硬砂岩製は最大長さ13.2㎝，重量125ｇ，最小の長さ8.1㎝で42ｇ，平均重量83ｇを量る。緑泥片岩製の最大は12.4㎝，226ｇ，最小は6.9㎝の30ｇ，平均重量69ｇを量り，平均重量以下は27こ中18こを占め小形のものが多い。

磨石斧には図46の４～12があり，小形に４・５があり，４は緑泥片岩の完形品，５は刃部を欠く粘板岩製。他は大形で，６は緑泥片岩製の完形品で重量1322ｇと大きい。７・８・12は基部を欠き，９～11は刃部を欠く。12は緑泥片岩製で他は輝緑岩，いずれも側面は敲打成形が施され，９は乳棒状石斧である。横刃形石器は図46の14～24の11こがあり，14～19は硬砂岩製，20～24は緑泥片岩である。敲打器には図46の12，図47の１～５の６こがあり，５は扁平の三角形の川原石の頂部になる面を使用している特殊な形状をなすものがある。磨石に図47の６～８があり，花崗岩の川原石を利用している。石皿には図47の11・12がある。　（片桐）

12号住居址

遺構（図10）　調査区Ｉの南端に13号住居址があり，その北20㎝に本址があって，さらに北26㎝に７号住居址が並ぶ。径南北5.56ｍ，東西5.3ｍの円形プラン，ローム層に20㎝掘りこむ竪穴住居址である。

床面は堅く，主柱穴６こが整った配置にある。炉址は中央より北に寄ってあり，径1.5cmの円形，深さ床面より40cm掘りこまれ，炉石のはずされた痕跡を明らかに残している。

遺物　土器，石器がある。**土器**（図36）深鉢形で把手の付くものが多く，また大形土器もある。把手をもつ土器に１・３・４・９・10があり，１・４は４この，３は２この把手がつく。１・９・10は獣面状に渦巻文，ワラビ手文によって構成され，１は把手との間に２この刺突文で飾られる区画文が付き，胴部は縄文を地文に懸垂文が施されている。４は把手を押引の列点文で飾り，把手間を２本の沈線が口縁部をめぐる。頸部を隆帯がめぐり，その中を円の押圧文がならび，ついで胴上部に波状文がめぐらされている。３の両耳の把手はＳ字状文が，口唇部には渦巻文が付き，把手から発する大きな渦文は懸垂文となって胴部を下がる。２の大形土器は口径33.5cm，最大径38cmを測り，口縁上部は爪形文，渦巻文，区画文と連弧文で飾り，頸部に２条の波状文がめぐり，地紋に縦の条線文が施されている。５・７・８は同系列の土器で東海地方との関連の深い土器である。６も大形土器で頸部に横位のワラビ手文が，これより粘土紐の貼布による懸垂文が胴部に下がり，地文に条線文が施される。11・12もこの系統の土器とみたい。本址の土器は諏訪地方の曽利Ⅱ式に比定されるものとみたい。

ミニチュア土器（図43の１）　台付土器のミニチュアが１こ検出されている。

石器　図は費用の関係で石匕を除いて略さざるを得なかった。打石斧，磨石斧，横刃形石器，石匕，石錘がある。打石斧完形品26こ（硬砂岩12，緑泥片岩13，変成岩１）があり，最大は長さ12.7cm，125g最小長さ6.5cm，34g。長さ10cm前後が大部分で平均重量69g，磨石斧は変輝緑岩製の刃部を欠くが１こ，横刃形石器（硬砂岩５，閃緑岩１）６こがある。石匕（図43の14）１こがあり，硬砂岩製，40gの縦形である。石錘２こが検出され，重量55gの小形のものである。　（今村）

13号住居址

遺構（図10）　調査区Ⅰの両端に発見され，北20cmに12号住居址，その北に７号住居址が直線上に並ぶ。南北5.4m，東西5.7mの円形プラン。ローム層に西側で20cm，東で37cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴６こが整った配置にあり，炉址は中央より北に寄ってあり，105×125cmの長方形，深さ床面より40cmの掘りこみで，北と東側に炉石を残す。東側テラス上に150×60cmの長方形，深さ12cmの掘りこみが柱穴を間におく位置に掘りこまれており，出入口ともみる形状のものである。

遺物　土器，石器，土製品がある。

土器（図37）　キャリバー形の深鉢を主体にし，無頸甕，台付土器があり，諏訪地方の曽利Ⅲ式に比定される土器である。深鉢形の文様構成は大部分が口縁部に楕円区画文，頸部から胴下部にかけて，沈線または懸垂文を下げ（１～３・６～９・11）この間を１以外は２が縄文，他は綾杉文で埋め，区画文内を２が刺突文で他は沈線で埋めている。４は波状口縁をなし，口縁部はワラビ手文と区画文，頸部を１条の篦器具による刺突文がめぐり，胴部に太い沈線と細い懸垂文が地文の縄文を切って下がる。10・11は無頸甕とみられ，10は大きなワラビ状の区画文を内部を羽状文，刺突文で飾り，11は篦器具による刺突文によるワラビ手文とそれより下がる太い沈線が縄文の地文を切るものである。

５の台付土器は高さ16.1cm，脚部の短かい坏形ともみられる土器である。内部を縄文で埋める渦巻状と楕円の区画文が器の全面を飾り，脚部は３孔を有し，無文である。

土器製品には図43の８の耳栓がある。

石器　大部分の石器の図は略さざるを得なかった。打石斧，磨石斧，横刃形石器，磨石，敲打器，石鏃がある。打石斧の完形25こ（硬砂岩９，緑泥片岩16）があり，最大は長さ12.5cm，重量128g，最小長さ7.5cm，40g。8～９cmの長さをもつものが15こあり，平均重量70gで，ずんぐりした形のものが多い。

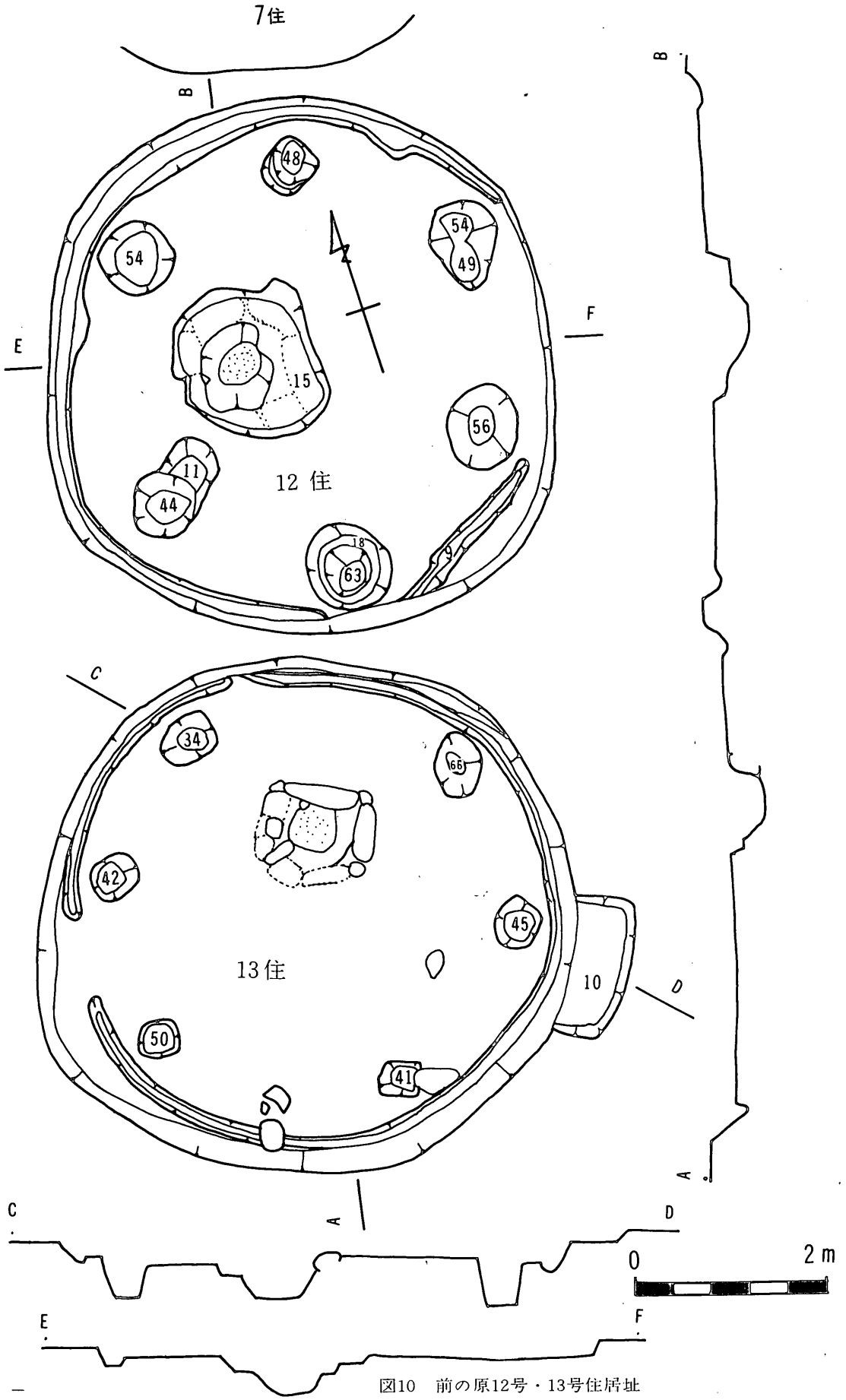


図10　前の原12号・13号住居址

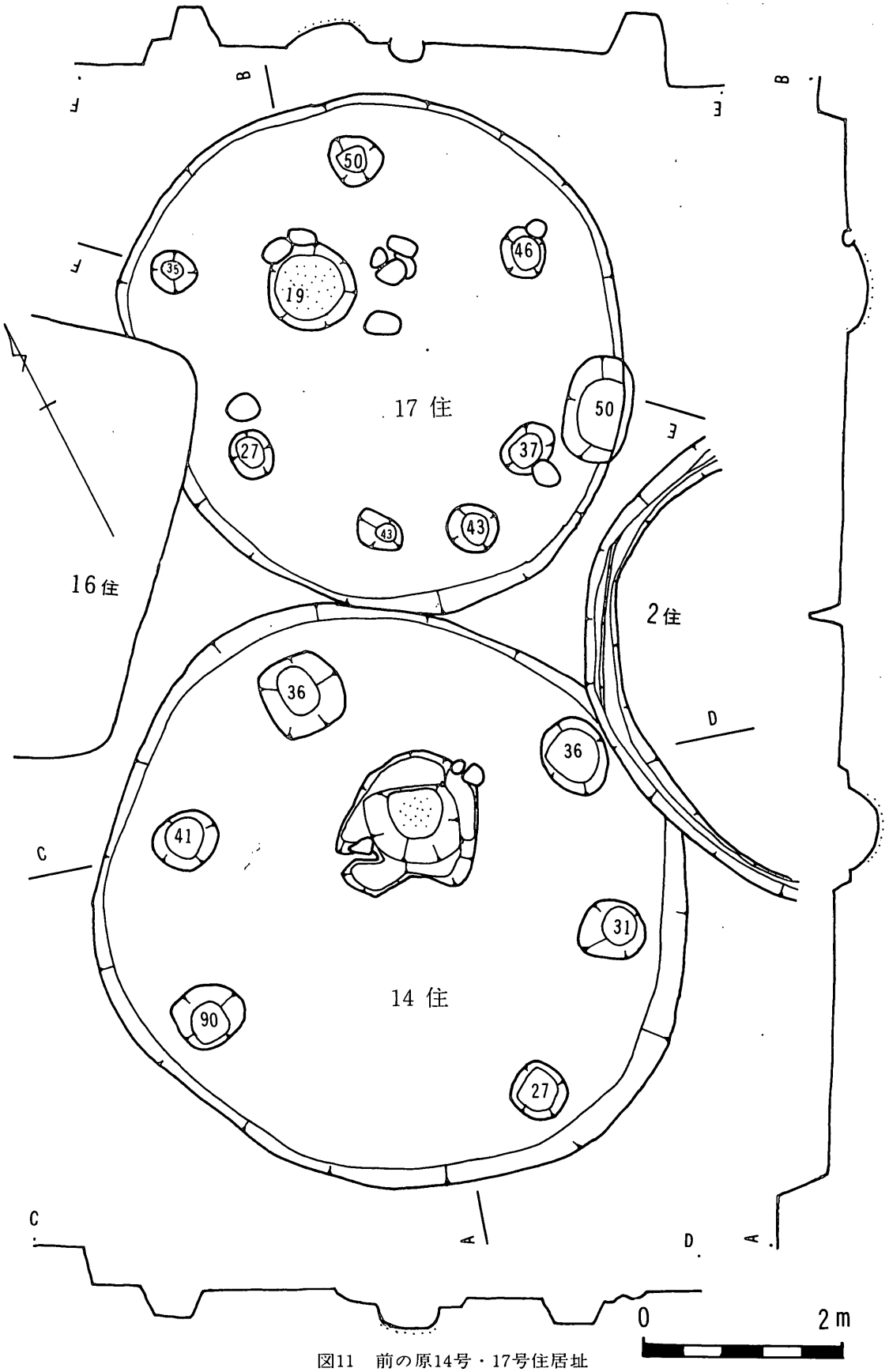


図11　前の原14号・17号住居址

磨石斧に刃部を欠く大形が２こと，図43の15の小形の完形品がある。いずれも変輝緑岩製である。横刃形石器に硬砂岩製の５こ，磨石１と小形敲打器が各１こあり，図43の10の黒曜石製の石鏃が１こ検出されている。

14号住居址

遺構（図11）　南40cmに１号住居址，北には17号住居址が接しあい，東側は２号住居址によって僅かに壁が切られている。径６ｍの円形プラン，40cmの深さにローム層に掘りこまれる竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴６こが整った配置にある．炉址は中央より北東に寄ってあり，径1.30cmの円形をなし，床面より40cmの掘りこみで，炉石がはずされた痕跡を残す。

遺物　土器，石器がある。

土器（図38）　諏訪地方の曽利II式の新しい要素を含み，曽利III式に比定されるものを主体とする。キャリバー形をなす深鉢（１～６）が主で，無頸の深鉢（７・10），台付土器（８・９）がある。文様構成は頸部に篦状具による押引刺突文をめぐらし結節縄文を施すが共通的にみられ，口縁部が無文，胴部を長楕円区画文で飾る１・２。口縁部をワラビ手状文による楕円区画文で飾る３・４の深鉢と，８・９の台付土器があり，３・４は胴部を地文の縄文を縦の太い沈線が切り，８・９は胴部に長楕円・方形の区画文を施し，台には３この飾窓が付く。８は完形で高さ25cm，口径22.5cm，波状口縁をなしている。５には把手が付き，口唇部に渦巻文が施され，これから太い隆帯が下がり，これをはさんで内部を沈線で埋める区画文が，７は口縁部に楕円区画文が，10は深鉢か，浅鉢か不明であるが区画文がめぐっている。

石器（図50）　打石斧・横刃形石器・敲打器・石錘・凹石がある。打石斧に完形の１～20があり，材質は３～14が硬砂岩，１・２・15～17が緑泥片岩，19・20がチャート。最大は長さ13.7cm，重量177ｇ，最短は7.6cm，最軽量は14ｇがあり，平均重量66ｇ。長さ8～10cm前後が大部分で，また巾の最大５cm，最小2.5cmがあるが，大部分は4cm内外が占めている。横刃形石器に21～25があり，21が緑泥片岩，他は硬砂岩製である。敲打器に29～29の３こ，石錘は30の１こで緑泥片岩製，凹石26は花崗岩製，１面のみに２この凹をもつものである。

（松村全二）

17号住居址

遺構（図11）　14号住居址の北に隣接し、南東30cmに２号住居址があり，西側の１部は16号住居址によって切られている。径5.1ｍの円形プラン，ローム層に深さ30cm掘りこまれる竪穴住居址である。床面は堅く，柱穴は７こ発見されているが，主柱穴は配置からみて５こ，または６ことみられる。東壁に沿って105×65cm，深さ50cmの土坑状の掘りこみがあり，貯蔵穴ともみられる。炉址は中央より北にかた寄ってあり，径90cm深さ19cmの整った円形をなし，北側に２この石が置かれ，炉石のはずされた痕跡は認められない。

遺物　土器・土製品・石器がある。

土器（図39・40）　深鉢，浅鉢，吊手土器があり，深鉢は口縁部が大きく弧を描くキャリバー形が主体をなし，文様構成は縄文または条線を地文に，口縁部は圧痕列，ワラビ手状文，連弧文による区画文で飾り，頸部，胴部に波状文，平行連弧文を施す。１は細かい縄文を地文に４この頂部をもつ波状口縁をなし，８等分する位置に円文と，これから下がる列点文をはさんで櫛状の区画文が，この下を大きな波状文がめぐる。頸部に３条の波状文，胴上部に１条の波線，胴中部を２条の山形をなす沈線文がめぐる。２は口縁部を押引刺突文によるワラビ手文と連弧文による櫛状の区画文がつき間隙を放射状の条線

で飾り，頸部を７条の大きな波状文がめぐり，胴部は条線で埋めている。６は区画文内を刺突文で，頸部を連弧文がめぐり，胴部を細い蛇行沈線で埋める。７・10には貼布する隆帯文が付き，18は葉脈状の沈線と懸垂文で口縁部を飾り，15は胴部の縄文の地文に細い懸垂文が施される。口縁帯をもち，縄文のみの施文に４・５がある。

把手の付く土器に３・８があり，３は口径34cmの大形深鉢で，４この頂部をもつ波状口縁をなし，この頂部をもつところに渦巻文と押引刺突文で飾る把手が，８は甕形土器とみられ，両耳をなす把手は渦巻文と刺突文で獣面状をなし，３・８ともに頸部を末端が流水文風をなす連弧文が付き，胴部に縦の条線が施されている。底部に木葉文がつくのに16がある。

吊手土器14は，口径12.7cmの小型，口縁部に隆帯による渦巻文と押引刺突文が施され，把手は沈線文で飾られる。23は浅鉢，口縁部の一部は波状をなし，吊手土器の把手のとれたのを浅鉢としたともみられる。２列に乳房状の凸起がめぐる類例の少ない土器である。17号址の土器は，東海地方との関連の深いもので，咲畑式の土器があり，諏訪地方の曽利II式に比定される。

土製品に図43の５の土偶の手の部分がある。

石器（図51）　打石斧・磨石斧・横刃形石器・石匕がある。打石斧の完形17こがあり，１～９・17は硬砂岩，10～16は緑泥片岩，17は覆土出土で一見弥生時代の石鏃ともみられ，基部の一部を欠くが重量360ｇの大形のものである。これを除くと最大長さ13cm，145ｇ。最小長さ９cm，36ｇであるが，長さは10cm前後が大部分を占め，平均重量78ｇである。磨石斧25・26があり，側面を敲打成形による乳棒状石斧で刃部を欠く。25は輝緑岩，26は緑泥片岩製で，表面に砥石に使用されたとみる磨痕がある。24は大形の粗製石匕で重量175ｇ，硬砂岩製である。

18号住居址

遺構（図12）　１号住居址の西9.5ｍにあり，北に接して柱列址Ｉがある。径南北5.2ｍ，東西5.5ｍの円形プランをなし，北と西では20cm，南と東側で30cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく，主柱穴６こが整った配置にある。炉址は中央より西に寄ってあり，西側には炉石２こが残り，他ははずされた痕跡がみられる。150×120cmの楕円形，床面より30cmの掘りこみである。炉址の南80cm，南壁より北90cmに埋甕があり，底無し，逆位に（図13）埋められていた。

遺物　土器，土製品，石器があり，その量は比較的少なかった。

土器（図41の１～４）　１は埋甕で，口径31cm，胴最大径39cmの大形の甕である。口縁部より一つは凸起をもち，他は平縁となるブリッヂ状の把手が対に付き，ワラビ手文と渦巻文で飾られる。胴部を把手からのびる隆帯による大きな渦巻文を４こ配し，これより１条の隆帯が底部へと下がり，この間隙を沈線文で埋めている。２は口径14.5cm，高さ17.9cmの小形深鉢で，くの字状に外反する口縁部は無文，頸部に押圧文がめぐり，胴部は対となる大きな渦文が２対よりなる懸垂文で飾られ，その間隙を沈線文で埋める。１と近似の文様構成をなす。３・４はキャリバー形の深鉢で，隆帯による渦巻文と区画文が口縁部に付き，地文の縄文を３は，縦の沈線が区切っている。諏訪地方の曽利II式に比定される土器群とみられる。

土製品に図43の３の土偶脚部がある。

石器　図は費用の関係で略さざるを得なかったが，打石斧，磨石斧，横刃形石器，石錘がある。打石斧11こ（硬砂岩４，緑泥片岩７）の完形品があり，最大は長さ12cm，125ｇ，最小は長さ8.5cm，最軽量50ｇで10cm以下が８こ，平均重量78ｇである。磨石斧は１こ，刃部を欠く。側面敲打で，断面は扁平となり，巾7.3cmの大形の輝緑岩製。横刃形石器３こ，硬砂岩，緑泥片岩，花崗岩の各１で花崗岩製は類例

が少ない。石錘は１こ，重量75ｇ硬砂岩製である。

21号住居址（図３）

18号住居址の西15ｍにあり，東1.5ｍに23号住居址，南4ｍに22号住居址が発見されている。第１号道路（図２参照）の側溝をブルトーザーで掘り割った際に発見され，盛土のため調査は一部に終ったもので，東壁の一部と床面・円形プランとなるを確かめたにすぎない。

遺物には，図41の６・７の土器と図50の３の石皿があり，床面よりの出土である。土器は小破片で，縄文を地文にし，６は口辺部を１条の沈線がめぐり，押引きの刻みが付き，強く内湾するキャリバー形の深鉢とみられ，諏訪地方の曽利II式に比定されるものともみられる。

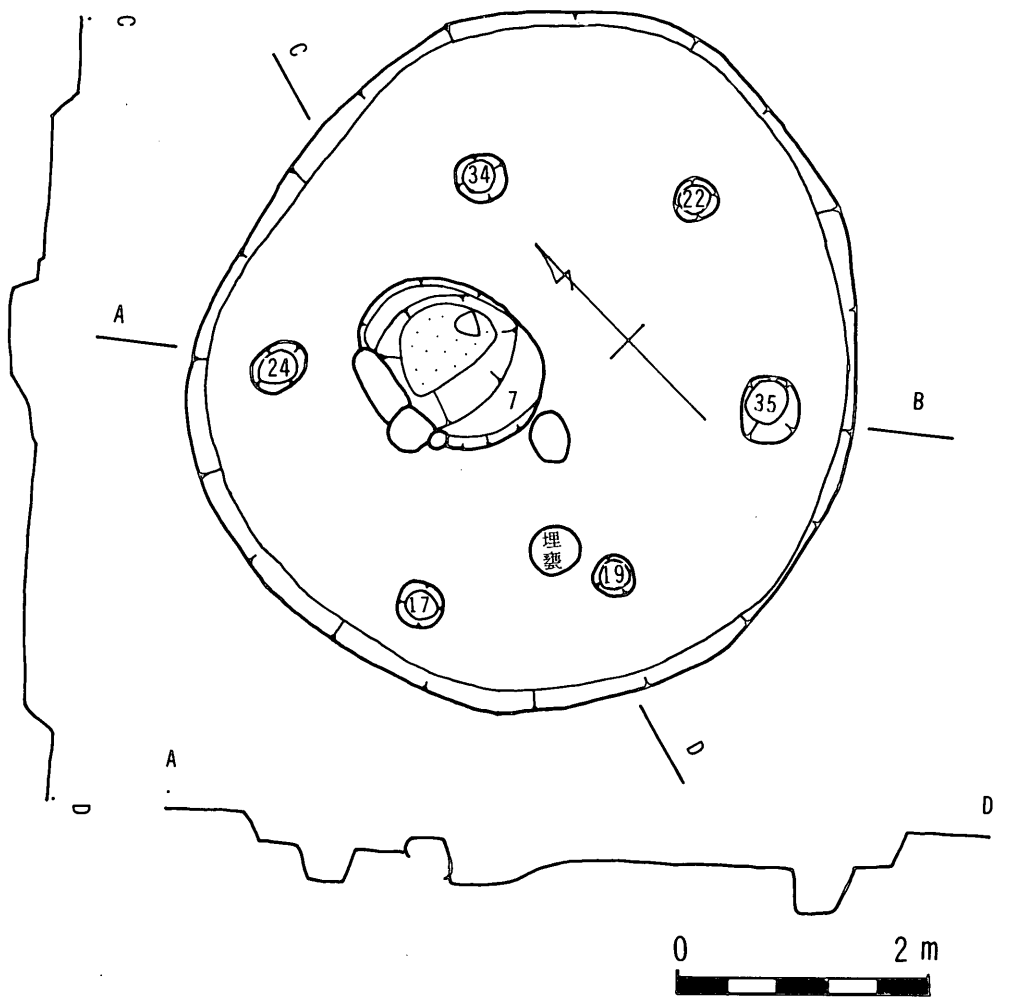


図12　前の原18号住居址

24号住居址

4号住居址の東12mにあり，現場調査終了後工事中に土器出土の通知で調査したものである。埋甕2こがあり，南側壁と，床面を検出し，円形プランとなる住居址の存在を確認したもので（図3），埋甕2はすでに掘り出されていた。正位の底無で，1と並んでいた。1は正位で底穿孔（図13），口縁部の1部が内部にはいりこんでいた。1は口径41.7cm，高さ56.2cm，2は口径43.7cmと，ともに大形の深鉢である。1・2ともに肥厚する口辺帯をもち，胴部はふくれて，頸部で僅かにくびれ，外反する口縁部は一旦内湾して，さらに外反する2段の口縁部をなしている。口縁上部は無文，1は口縁下部を1条の波線波状文がめぐり，その下に太い隆帯によるワラビ状文による楕形の区画文が，胴部は末端が渦文となる連弧文による楕形区画文が付き，縦の条線を地文にし，蛇行沈線文が下がり，底部は穿口されている。2は口縁下部に沈線のワラビ状文と連弧文による楕形区画文が付き，頸部に2条の波状文，胴部に4条の山形をなす連弧文がめぐり，地文に縦の条線が施される。これらは東海系との関連の深い土器とみられ，当地方での類例は稀であり，諏訪地方の曽利II式に比定されるものである。

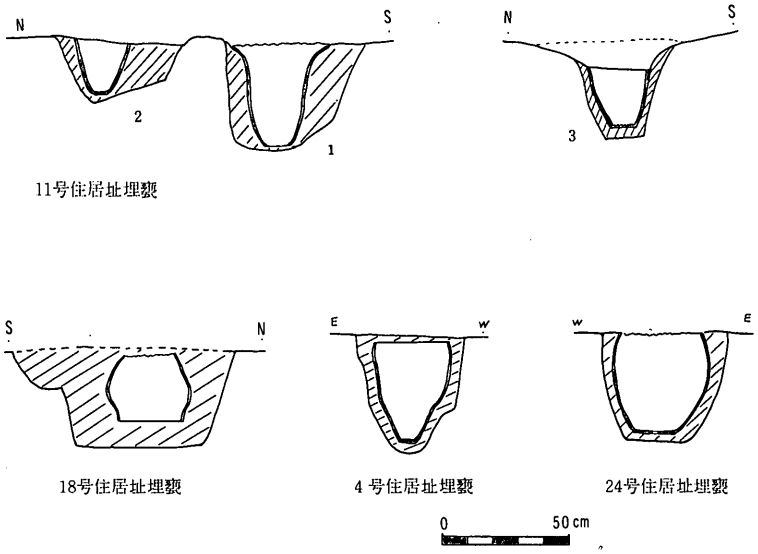


図13　前の原遺跡・埋甕出土断面図

イ．古墳時代住居址

6号住居址

遺構（図14）　1号住居址の東6.5m，西は10号住居址の東4分の1を切り，北5.5mに9号住居址がある。7.1m×8.2mの隅丸長方形をなし，ローム層に40cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴4こが整った配置にある。カマドは北西壁の中央につき，大きな平らな川原石を立てて並べる石組粘土カマドである。火床に細長い石を立て支脚としており，内部には焼土が多い。天井部は崩れ，天井石はカマドの前に落されており，石からみて縄文期の炉石を利用したものとみられる。煙道は残存し，煙抜穴は30cmの径をもち，内部は暗褐色土がつまる。カマドの両側に浅い掘りこみがあり，貯蔵穴とみられ，その西側より特に多く遺物の出土をみている。カマドを中心に壁に沿って巾20cm，深さ15cm前後の整った形状の周溝がめぐっている。南壁に沿った中央よりやや西に寄って120cm×95cmの長方形深さ68cmの貯蔵穴があり，，その内部よりの遺物は皆無であった。この貯蔵穴の北側に茅とみる植物の炭化物

が１㎡位の範囲に床面に密着して発見された。南東の覆土，住居址の約４分の１の範囲に焼土が20㎝余の厚さに堆積しており，その下層は浅い黒土層となって床面となる。焼土の性格は把握できなかったが下層の黒土から床面の土の水ぶるいによって石製模造品の臼玉10こを検出した。

遺物　土師器が大部分を占め，須恵器１片と石製模造品の臼玉がある。

土師器（図53，54の18～25）　壺，甕，甑，鉢，椀，坏，高坏がある。

壺形土器（図53の４）は口径11.6㎝，高さ22.9㎝，最大径は胴中部にあって20.3㎝，胴部は球状をなし，口縁部はやや外反する立ちあがりをみせ，さらにくの字状に内湾する袋状口縁をなす。器面は刷毛

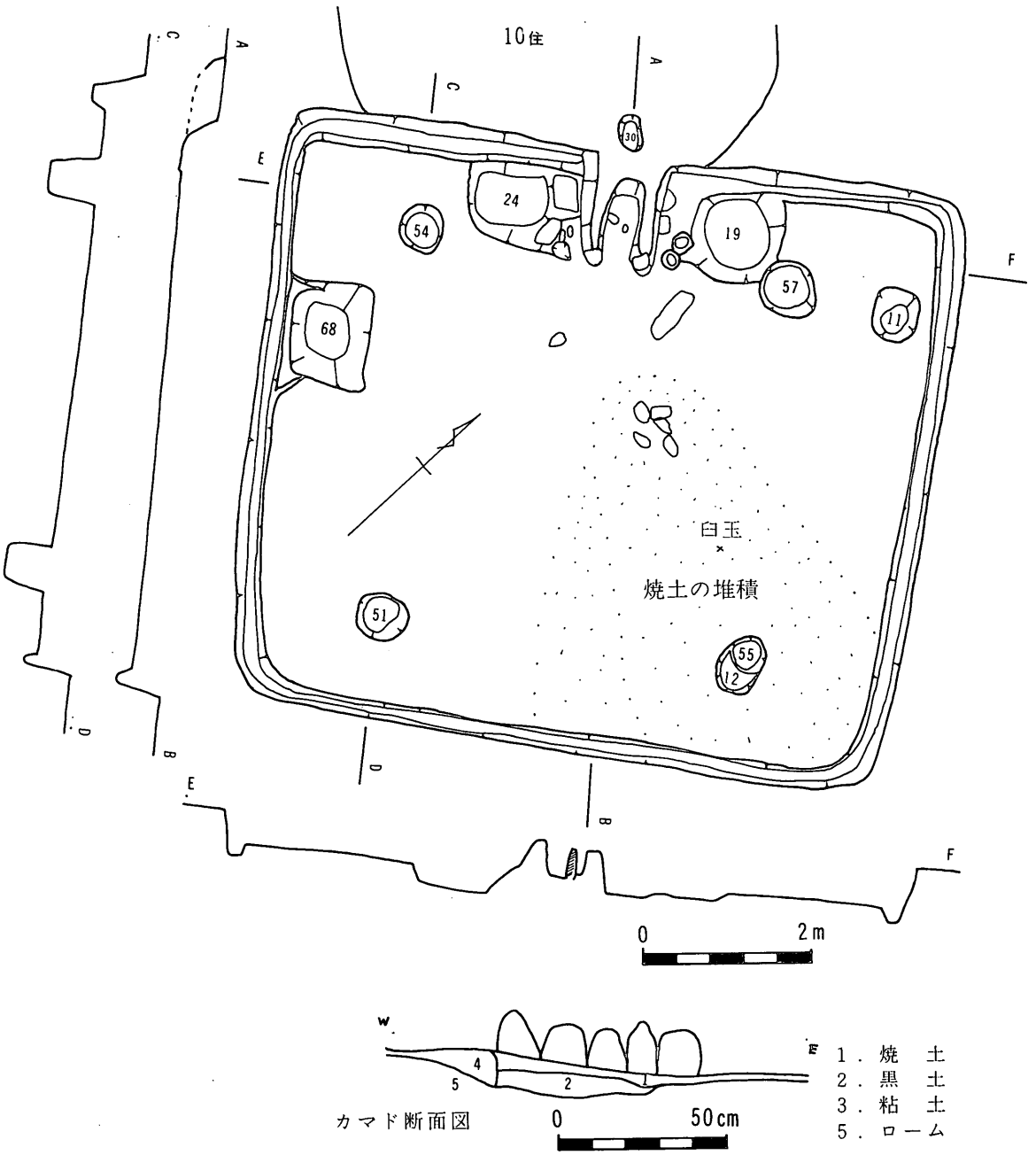


図14　前の原６号住居址

と篦によってていねいに整形され，胎土，焼成良好で赤褐色を呈する。器内面は胴部の口縁部の接合部に一稜を画するが，滑らかに整形されている。広口小形壺８は，高さ7.4cm，最大径は口径にあって10cm，手づくね土器で，器面に指圧痕を残し，口縁部は刷毛整形，丸底で胴中央部がふくらみ，頸部はしまって口縁部は強く外反する。胴部と頸部の接合部は器面には篦の圧痕があり，器内面では一稜を画し，口縁部は横なで胴部は篦整形が施される。胎土は良好で暗褐色を呈す。

甕形土器，図53の１・２・５～７・９・10があり，１・２・５・７は中形から大形で頸部は強くくの字状に折れ，口縁部は大きく外反する。最大径は胴中央部にあり，２はやや胴長となる大形甕で口径16.5cm，最大径24.5cm，１・５は胴部は球形となる。器面は１は櫛状具をあてて引き，５は口辺部のみにそれがみられ，２は刷毛整形，５・７は横なで，いずれも平滑に仕上げられ，器内面は口縁部は刷毛胴部を篦整形，７は刷毛整形である。６・９・10は小形甕で，６は口径13.7cm，底径6.1cm，高さ12cm胴最大径14cm，櫛篦整形で底部は荒い篦削りとなり，中央に凹みをもつ。10は口径11.8cm，高さ10cm，胴最大径12cm，手つくねによるもので指圧痕を残し，刷毛整形が施される。９は口径10.4cm，胴最大径10.1cmと胴が小さくなり，内面黒色である。小形甕は口径に比し器高が小さくなる。

甑形土器12は大形単孔，底部から胴部は丸味をもち砲弾形をなす。口径24.7cm，高さ26.3cm，最大径は胴上部にあって26.7cm，把手は口縁上端より7.1cmに付いていたが欠損している。鉢形土器に３があり，口径18cm，頸部が僅かにくびれ，口縁部は外反する。胴最大径は肩部にあって16.5cm，器面は篦磨き，内面は平滑，淡褐色を呈す。椀形土器13は口径17.5cm，やや内傾する素縁口縁をなし，内外面とも篦磨きのていねいな仕上げで胎土，焼成ともに良好。暗褐色を呈す。11の底部は鉢形ともみられるが，器形不明，内底部に花弁状の篦削り痕がみられる。

坏形土器（図54の18～25）　いずれも扁平な丸底をなし，18～22は内斜口辺をなし，口径14.2cm～15.5cm，高さ3.2cm～4.5cm，内傾した立上り口辺の23・24は口径12.7cm，13cm，高さ3.7cm，4.2cm，前者に比し小形となる。25は外反する口辺をなし，口径15.3cm，高さ5.5cmと大形になる。底部は篦削り整形であるが，他の部分は篦磨き，横なでによるていねいな仕上がりをなし，胎土，焼成は精良であり，器内面には暗文が施され，20，22，25は内面黒色である。

高坏形土器（図53の14～17）　坏部は脚部の接着部から大きく外反し，坏下部に僅かな稜をもち，坏胴部は直線的に外開し，体部がそのまま口辺部を作る。脚部は上半部は下半部に向かって漸次開き，裾部で大きく開く。16・17はその開きは大きく，16は脚端でゆるく弧を描いて外向し，17は内面に稜をもって直線的に開き，14は脚端部が内湾する。14は高さ12.8cm，口径16cm，坏部は内面に暗文が付され，器面は櫛状具による整形が，脚部は篦磨きでていねいに仕上げられ，内面は篦削り，裾部は刷毛整形が施され，坏部と脚部の接合痕は篦で削られ痕跡をとどめない。15の坏部は口辺部が刷毛整形が施され，内外面に暗文が付く。14・15ともに胎土，焼成精良で黄赤色を呈す。17の脚部器面はよく研磨され裾部に暗文が付く。16は胎土，焼成の良くないやや粗雑なものである。

須恵器（図54の26）　瑞片とみる口縁部の１点の出土である。細かい波状文をもち，胎土，焼成精良なもので第２様式とみられる。

石製模造品（図61の１～10）　臼玉10こが焼土堆積の下層にある黒土層から床面への土の水ぶるいによって検出されたもので，その出土状態は不明である。臼玉の形状には中央部にふくらみをもつ精巧な作りの１・２と，管玉を切断したように円筒状の３～10があり，これらにはやや粗雑な作りで斜めに切断された７～10がある。２は赤味をもち，１はやや黒味をもち，硬い石質であるが他は軟質の石材である。

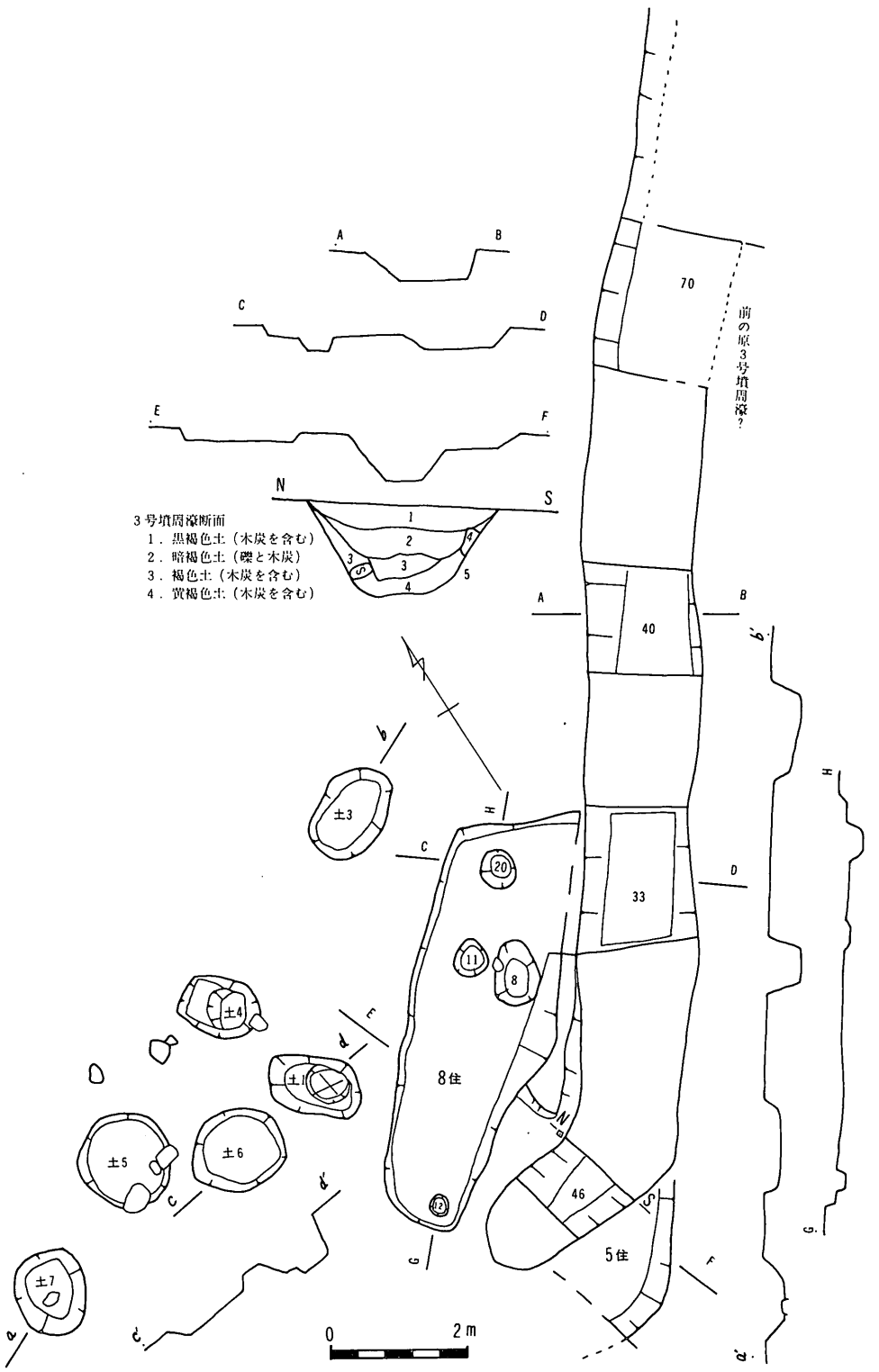


図18　前の原５号・８号住居址，土坑1･3･4～7号，前の原３号墳周濠

8号住居址

遺構（図18）　9号住居址の東3.5mにあり，東側3分の2以上は前の原3号墳の周溝によって切られている。南北6mの隅丸方形をなすとみられ，ローム層に15～20cm掘りこむ竪穴住居址である。柱穴が西側に3こと，土坑状の浅いピットが検出されている以外は不明である。

遺物（図55）　土師器のみで，前の原3号墳周溝トレンチ調査の際に発見された住居址で，周溝の外側にローム層の盛土があり，最初は住居址の存在が確認できなかったもので，このため周溝内の遺物も混入されていると思われる。図55の12～15はその調査時のものと本址のものと断定できないものもある。器形には，甕，鉢，坏，高坏がある。

甕形土器に1～4と小形甕12・13がある。頸部は強くくの字状に折れ，口縁部は大きく外反する。1～4は最大径が胴中央部にあり，2は口径20.5cm，胴最大径23.5cm，器高の低い，やや扁円状の胴部をなす器形である。1・2は胎土，焼成は精良で黄赤色を呈し，3は胎土に小粒の石英粒を含むが焼成は堅く，灰褐色を呈する。4は口辺部は中膨らみで僅かな稜をもち，外反する。口縁部は刷毛，他は内外面とも横なで整形，内面に輪積痕を残す。小形甕12・13は最大径が口縁部にあり，胴最大径は口縁部より小さくなる。ともに器肌は荒れ，焼成は良くない。

鉢形土器　5は大形，口径32cm，高さ17.2cm，最大径は口縁にあり，短かく強く外反する口辺部をもち，張りをもつ肩部から緩い弧を描いて底部に至る。底径6.6cmの小さな底部をなし，上げ底となる。器面は平滑，内面は櫛篦整形が施され，黄赤色を呈す。6は口径20.1cm，高さ10cm，底径8.2cmで上げ底となる。底部からやや内側に弧を描きながら開き，胴下部からは直線的に外開して口辺部に至って僅かに外反する。器面内外面とも刷毛整形が施され，胎土は石英粒を含み焼成は堅く，赤褐色をなすが，器面は部分的に黒色を呈する。

坏形土器　7～11・14があり，いずれも扁平な丸底をなし，7・8は椀形ともいえる。素縁口辺の口辺部が内湾するものに8・11，胴部から口縁部が直線的に外開する7・10，短かい口辺部がくの字状に外反する9・14があり，いずれも内斜する口辺をなす。口径13.7cm～14.7cm，器高最も浅い10は3.4cm最も深い7が4.9cm，器面の大部分は口縁部が刷毛整形，他は横なでのていねいな仕上がりをみせ，内面に暗文が付く8～10，内面黒色に10・14があり，8は底部に指圧痕がみられ，胎土は石英粒の混入がみられるが他は胎土，焼成の良いものである。

高坏形土器15は脚と坏の一部で，坏部は脚の接合部から大きく外反をなし，脚上半部は下半部に向って漸次開き，裾部は大きく開くものとみられる。器面は接合部を櫛状器具で押した痕をもち，刷毛整形が施され，坏内面には暗文が付く。脚内部は櫛篦による整形がなされ，接合部の挿入のホゾは粘土を貼布してその痕跡を埋めている。

9号住居址

遺構（図15）　6号住居址の北5.5m，8号住居址の西3.5mにあり，5.2m×5.3mの隅丸方形，ローム層に60cmと深く掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴4こが整った配置にあり，東壁に沿った南寄りに95cm×60cm，深さ75cmの貯蔵穴が掘りこまれ，西壁中央にカマドがつく。これを中心にして巾15cm，深さ10cm前後の周溝が壁に沿ってめぐる。カマドは大きな扁平の川原石を入れてはあるが粘土カマドで，火床に石を立てて支脚としている。内部には焼土が多く，天井部は崩れ天井石はない。煙道は残存し，灰を含む暗褐色土がつまる。カマドの両側に径60cmの円形，63cm，81cmの深さをもつ貯蔵穴が壁を掘りこんで作られている。遺物はカマドの両側と前面にみられ，石製模造石の勾玉が東隅床面より発見されている。

遺物　土師器と石製造品がある。土師器（図56）には，広口小形壺，甕，甑，椀，坏，高坏がある。広口小形壺１は，小形甕ともいえよう。口径12.2cm，高さ9.5cm，胴最大径は中位にあって12.4cm，胴部は扁円状をなし，底部は丸底となる。頸部より内屈して強く外反する口辺部がつく。器面は暗黒色，内面は黄褐色を呈し，胎土には長石粒を僅かに含む。

甕形土器２は口径13.4cm，頸部はくの字状に内屈し，外開する口辺部は中膨みで僅かに稜をもって外反する。胎土は石英粒を含み，焼成は堅く褐色を呈す。刷毛整形，内面は横なで，輪積痕を残す。

甑形土器３は口径21.7cm，瘤耳把手付大形，口辺部はほぼ垂直に立ち上がり，砲弾形をなす器形とみられる。口辺部より８cmさがって上向きの把手がつけられる。最大径は口辺部にあって22cm，器内外面とも刷毛目整形が施される。

椀形土器に４・５がある。４は高さ5.8cm口径11.1cmの小形椀，最大径は肩部にあり，内傾する素縁口辺をなし，上げ底である。器内外面とも刷毛目整形，胎土は砂質粘土で，淡黄褐色を呈す。５は口径16.4cm，高さ7.7cm，肩部に最大径をもち，丸底，口辺部は強く外反し，内斜口辺をなし，内面に稜をもつ。内外面とも平滑，胎土に石英粒を僅か含み，焼成は良く黄赤色を呈す。

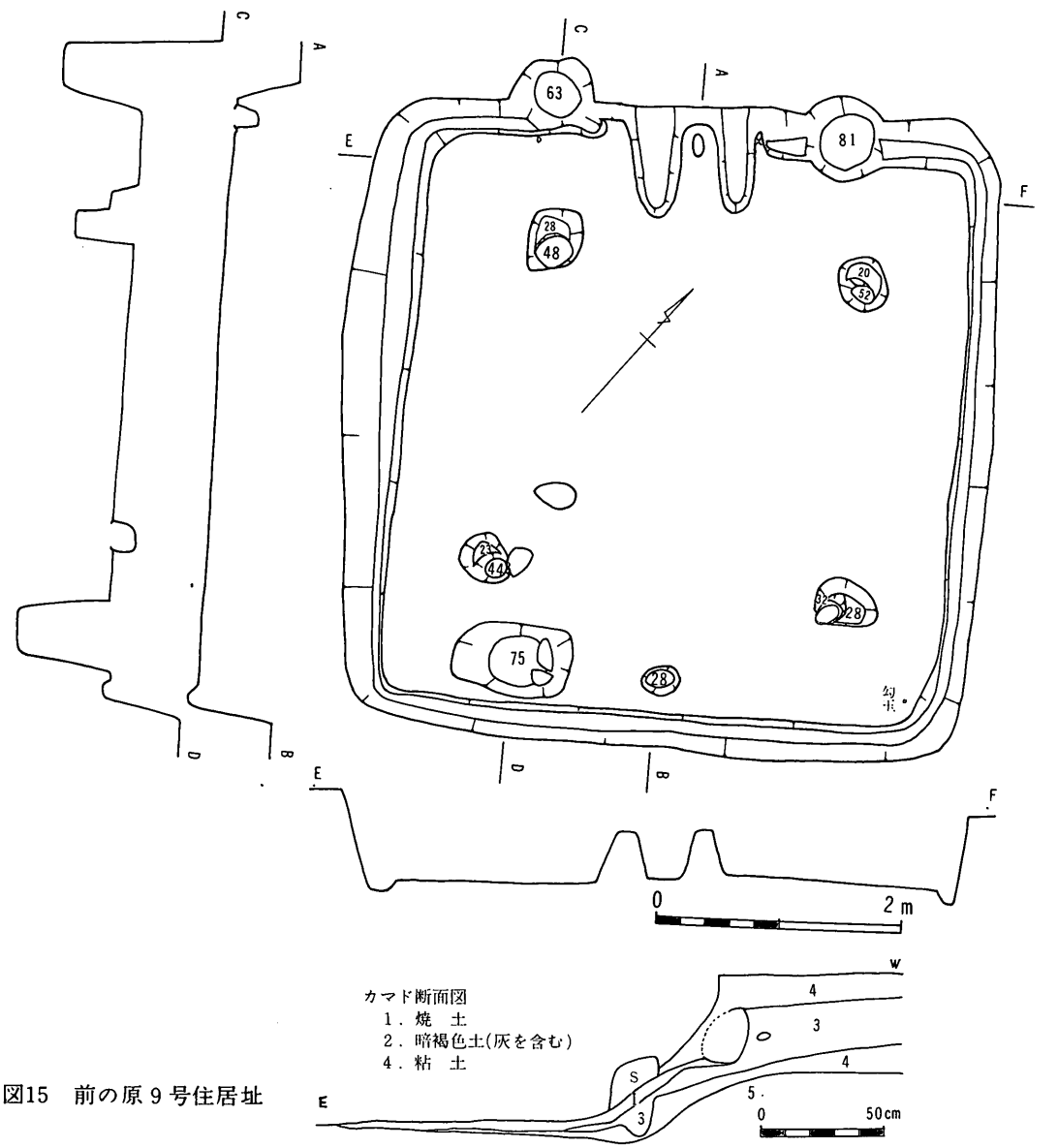


図15　前の原９号住居址

坏形土器に６～10があり，いずれも底部は丸底。内斜口辺をなし，口辺部が内傾する７・８，内湾する口縁部は端部で僅か外反する６，大きく外反する９，直立に近い10がある。器面は刷毛，または横なで整形，内面に暗文が付く６・７があり，７は丹彩ともみられる赤色を，６は淡赤褐色を呈し，ともにていねいな仕上がりである。９・10は胎土に大粒の石英粒を含み焼成は堅く，暗黒色を呈す。８は胎土は良いが仕上がりはやや粗雑，黄褐色を呈する。

高坏形土器　11・12の脚部がある。脚下半部に明瞭な段が付き内面に稜をもつ。底径11は17.1㎝，12は14.8㎝で，11は大形高坏とみられる。ともに器面に下半部の段を作る部分に櫛篦による押えがみられ上半部を縦の櫛篦，下半部は横なでのていねいな整形が施され，内面は，11は櫛篦による整形が上半部から下半部にみられ，裾部は横なでとなる。12は上半部は篦削り，下半部は横なでとなるが器肌はやや荒い。ともに坏部と脚部の接合部は整形のため接合痕を残さない。胎土には石英粒を含み，焼成は堅く赤褐色を呈している。

石製模造品（図61の11）　勾玉の模造品１こが住居址の東隅の床面より検出され，床面に接する土を水ぶるいしたが，他に検出されたものはなかった。

完形品で扁平板状を呈し，両側面，背腹とも擦痕が残り，砥石により研磨され，精巧な作りである。孔は一方穿孔とみられる。

16号住居址

遺構（図16）　14号住居址が東30㎝にあり，17号住居址の西側の１部を切り，西３ｍに柱列址Ⅰが並び，15号住居址が本址の南西側の４分の１の上層にかかって構築されていた。4.4ｍ×4.25ｍの隅丸方形，南壁高さ25㎝，北壁45㎝ローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く，主柱穴は配置からみて４ことみるが南東隅のは灰溜と一緒になっており不明。カマドは南壁の南東隅近くに付き，この東側壁に接して灰溜が掘りこまれ，この内部より完形の壺の出土をみている。カマドは粘土カマドで火床に礫の支脚が立たり，焼土を全面にもつ。天井部は崩れ，天井石はない。カマドを中心にして壁に沿って整った形状の周溝がめぐる。南北の中心線よりやや東によった中央部に径50㎝，深さ11㎝の円形の掘り凹みがあり，その北に平らな台石が床面に密着して置かれ，その前後よりフイゴの破片，小鉄片，鉄滓が検出され鍛工に関連する住居址と考えられた。遺物はカマド内部，灰溜，南西隅より多く出土をみている。

遺物（図57）　土師器，須恵器，フイゴ片，砥石があり，その他小鉄片，鉄滓が検出されている。

土師器には壺，甕，椀，坏，高坏がある。

壺形土器に１・２があり，頸部は強く内屈し，口縁部はくの字状に大きく外反する。１は灰溜よりの出土で口径14.7㎝，高さ26㎝の完形品胴最大径は中位にあって23.3㎝，胴部は球状をなし，底部は上げ底となる。器内外面とも平滑で胎土，焼成は良く，淡黄褐色を呈するが，二次的な火力によって器肌がはぜている。２は口径12.5㎝，高さは15.2㎝，15.7㎝といびつである。胴部最大径は中位にあって14.3㎝であるが，一方は下部にふくらみをもち，胴下部に僅かな稜をつくる。底径4.5㎝の小さな底部をなし上げ底となる。胴中央に１孔の穿孔がなされ，祭器的なものとみられる完形品である。胎土，焼成精良で朱彩ともみられる赤色を呈し，縦の篦磨きが施されている。

甕形土器３は，口径12.9㎝，頸部は強く内屈し，口辺部は大きく外反する。頸部には篦で強く押圧した痕跡をもち，内面には指圧痕を残し，鋭い稜をつくる。口辺部，胴部は篦磨きで口縁端部に篦の擦痕を残す。胎土焼成は良く，褐色を呈す。

椀形土器４は底部は丸く，全体に半球状をなし，口辺部はうすく引き出され外反し，内面に明瞭な稜

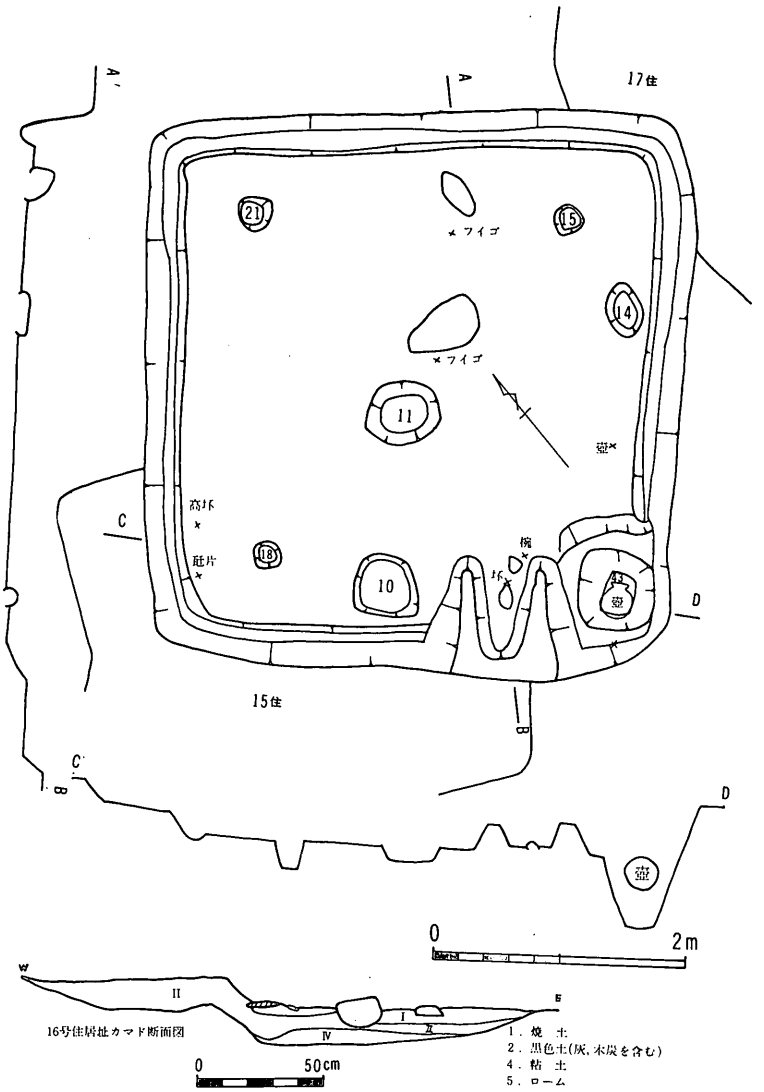


図16　前の原16号住居址

をもつ。口径15.5cm，高さ8.7cm，内外面とも篦磨きのていねいな仕上がりで，胎土は精選され，器面は光沢ある淡褐色を呈す。坏形土器に５～７があり，５・６は内斜口辺をなし，口縁部が外反する。内面は６は暗文が付き，５は暗黒色を呈す。ともに高さ4.5cm，口径5は14.4cm，６は16cm，胎土焼成良く黄褐色をなす。７は内稜の広がり口辺をもつ坏とみられるが，底部の精巧な作りからみて蓋ともみられるが不明である。

高坏８は口径17.7cm，高さ11cm，坏部は浅く，脚部接着部から弧を描いて外反し，明瞭な稜をもって口辺部は大きく外開する。脚部上半部は下方に向かって僅かに開き，裾部は平らに大きく外開する。内外面とも平滑で，坏部と脚部の接合部は器面では篦で押え，さらに篦磨きが施され，内面は横なで整形が施され，ていねいな仕上がりである。胎土は小粒の石英粒を僅かに含み，黄赤色を呈す。

須恵器　９・10の２片があり，９は瑕の口縁部で細かい波状文が施され，10は器形は不明，器面にタタキ目の上にカギ目がつき，内面にタタキ目が施され，ともに胎土焼成精良なもので第２様式とみられる。

フイゴ　11はフイゴの１部の原形をとどめるものであり，この他破片数点があり，小鉄片，鉄滓の同時出土をみている。

砥石（図61の１）　灰溜の上層よりの出土で，後に砥石と判明したもとである。表面の一面と側面の１部が使用され，表面を主としており，巾1.5㎝の砥溝がその中央に付けられている。軟質の砂岩製である。

20号住居址

遺構（図23・17）　調査区IIの高見塚古墳調査の第４トレンチで発見され（図23），９号住居址より北45ｍ，４号住居址より北33ｍにあって，この間は未調査におわっている。南北７ｍの辺をもつ隅丸方形，ローム層に55㎝と深い掘りこみをもつ竪穴住居址で，東側３分の２は土盛と調査期日，費用の制約のため調査を断念した。床面は堅く，柱穴２こが検出されているが，その配置からみて主柱穴は４ことみる。カマドは西壁に中央よりやや北に寄って付けられ，粘土カマドである。火床は焼土が全面にあり天井部は崩れ，天井石はない。カマドの西側に円形の浅い貯蔵穴があり，カマドを中心にして壁に沿って周溝がめぐらされているとみる。遺物はカマドを中心に多く検出されている。

遺物（図58）　土師器のみで，甕，鉢，椀，坏，高坏がある。甕形土器２～４は頸部は内屈し，口辺部はくの字状に外反する。胴部は球状をなすとみられる。いずれも頸部の接合部は篦で押え，その後を横なで整形が施され，４は内面にも押圧痕を残す。器内外面には刷毛，または横なで整形が施され，胎土は長石粒を多く含み，２には雲母が多くみられる。焼成は堅く褐色を呈している。

鉢形土器に２・５があり，２は口径31.5㎝，高さ23.5㎝と大形であり，底径は7.1㎝と底部は小さく立ち上がりをもって胴部となり，弧を描いて大きく外開する。胴最大径30.5㎝で，やや胴上部にあるが半球状をなす。頸部は内屈し，内面に鋭い稜をつくり，口辺部はくの字状に外反する。頸部には部分的に篦による圧痕が残り，器内外面とも縦または横の刷毛目整形が施され，胎土には長石粒を多く含み焼成は堅く赤褐色を呈す。５は口径16.6㎝，口辺部はくの字状に外反し，頸部から胴部へと次第に径は縮じまる。口辺部は横の刷毛目整形，胴部は内外面に暗文がつく。ていねいな仕上げで，胎土には小粒の長石粒を僅かに含み，焼成は堅く朱彩ともみられる赤色を呈する。

椀形土器　坏形との区別ははなはだ難しく，６を椀とみた。丸底素縁口辺をなし内湾する。口径13.9㎝，高さ5.9㎝，器面は刷毛，底部は篦削り，内面に暗文がつく。坏形土器に10～13があり，素縁口縁

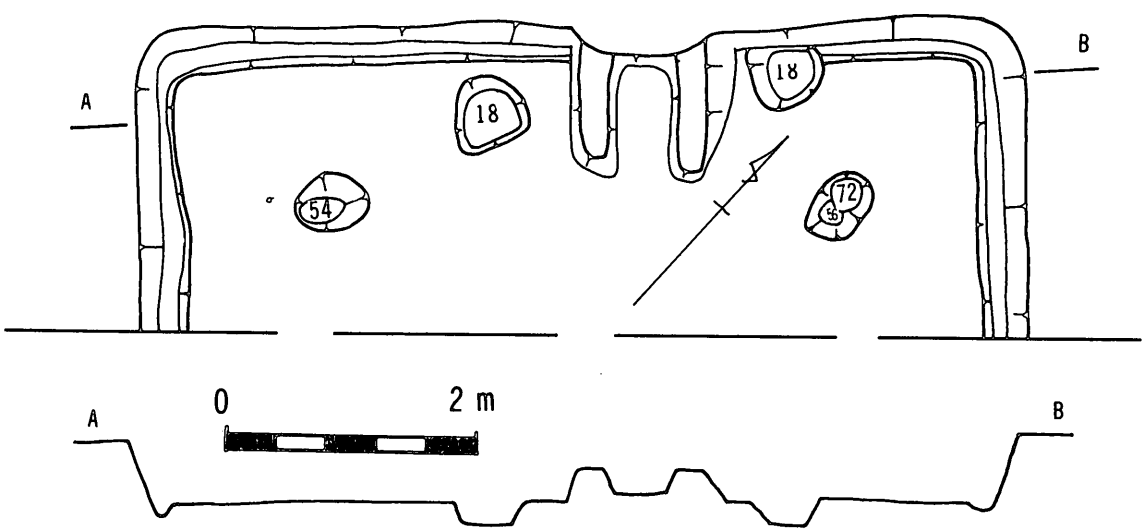


図17　前の原20号住居址

の10，内斜口辺の11～13。12は頸部は明瞭でなく，11，13は短かい口縁部が外反する。いずれも底部は扁平の丸底をなし，器面は箆磨き内面に暗文がつく。胎土は長石粒を僅かに含み，12は焼成不良，灰黒色をなし，他は焼成良く，赤褐色を呈す。

高坏形土器　7～9があり，9は口径23.2cmの大形，坏下半部に稜をもち胴部は僅かな弧をもって大きく外開し，口辺部に1条の沈線をめぐらす。脚部は上半部を残すのみであるが，直線的に下部へと開き，おそらす裾は大きく外開するものとみられる。坏部内外面とも櫛状器具による斜行の，脚部は縦の整形痕がみられ，脚内部は横なで，接合痕は整形によって消されている。8は浅い坏部をなし，坏下半部に鋭い稜を画し，胴部は大きく外開して口縁部で僅かに内湾を示す。器面は平滑で下半部は箆磨き，内面は櫛箆による縦横の整形が施され，器肌は荒れている。9は坏下半部に僅かな稜を残し，坏胴部は直線的に外開し，体部がそのまま口辺部をつくる。器面は櫛状器具による斜行の整形がみられ，内面には暗文がつく。いずれも胎土に長石粒を含み焼成は良く，7・8は黄褐色．9は赤褐色を呈す。

6号・8号・16号・20号住居址出土の土師器はいずれも**後期初頭**に位置づくとみられるが，20号住居址には古い要素が含まれ，時期的にはさかのぼるとみられる。

22号住居址（図3）

第1号道路（図2）の側溝をブルトーザーによって掘り上げた際発見され，南西コーナーと，北壁の1部を確かめ，床面は堅く，隅丸方形となる竪穴住居址である。壁高51cmと深くローム層に掘りこまれている。高い盛土と，期日，費用の制約のため調査を断念したもので，遺物は土師器の小破片を検出したのみで，その時期を知るに不十分な資料であるが古墳時代の土師器であることに間違いはない。

23号住居址（図3）

16号住居址の西約17mにあり，南8.5mに22号住居址がある。22号住居址と同様，第1号道路の側溝をブルトーザーで掘り上げた際発見され，南と北の壁と床面を認め，方形となる竪穴住居址となることを確かめたもので，調査は断念せざるを得なかった。

遺物には土師器の小破片と須恵器（図60の3～6）を僅かに検出したのみで，土師器は器形，時期を知るには不十分なものであった。須恵器3は3条の細い沈線がめぐり，4～6にはタタキ目がつく。いずれも胎土，焼成は良く，古墳時代後期後半とみられるものである。

ウ，平安時代住居址

15号住居址

遺構（図19）　16号住居址の南西4分の1の覆土に住居址の2分の1近くかかって構築されている。南北3.25m×東西3.5mの不整形な隅丸方形をなし，20cm～25cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である南側の床面は堅く，北側は張床となる。主柱穴は4こで，矩形の配置をなす。カマドは西壁の中央よりやや南によって着き，天井部は崩れ，また耕作によってカマド壁も削られ低くなっている。粘土カマドで火床には焼土をもつ。南壁の中央部より僅かはいって砥石が1こ置かれていた。

遺物　土師器，須恵器，砥石があり，土師器には図59の1～4があり，甕形土器である。1・2は口辺部より大きくくの字状に外反し，最大径は口縁部にあって長胴となる。頸部から下は箆削り，内面は刷毛と横なでの整形が施され，4の底部は内外面とも荒い箆削り，木葉底をなす。ともに胎土，焼成は良く赤褐色を呈す。3は口辺部は僅かにくの字状に開き，口径11.5cm，最大径は胴中位にあって13.8cm

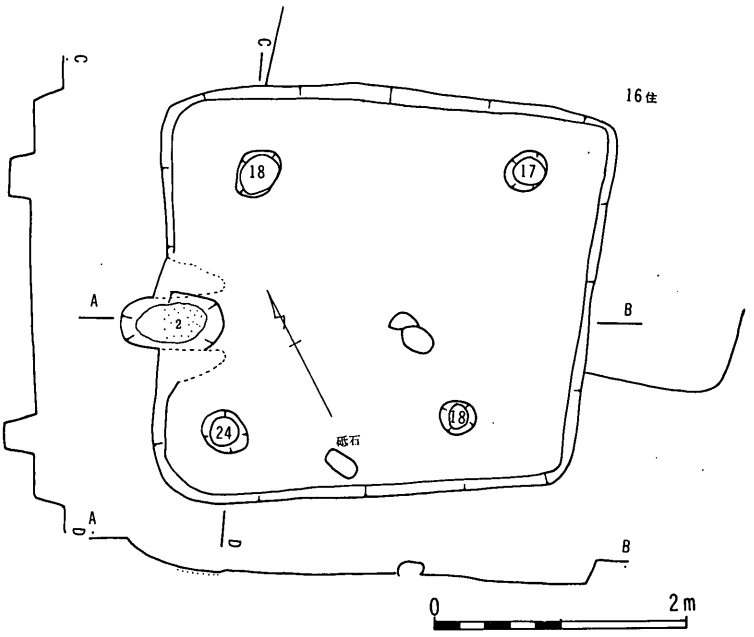


図19　前の原15号住居址

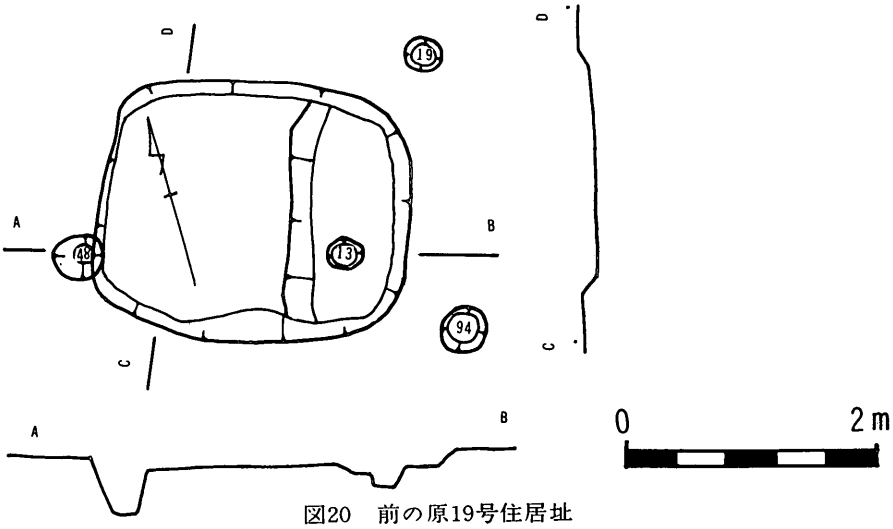


図20　前の原19号住居址

胴部は球状になるとみる。ロクロ仕上げとみられ，口辺部に横，胴部は斜めの刷毛整形が施され，胎土焼成精良で暗灰黒色を呈する。

須恵器（図59の５・６）　５は長頸瓶の頸部とみられ，６の坏は口径12㎝，高さ3.5㎝，糸切底である。ともに胎土に石英粒を多く含み，地方産のものである。

砥石（図62の２）　断面は台形をなし大形の砥石である。砂岩製で，３面が利用されている。

エ，中世の住居址

19号住居址

遺構（図20）　16号住居址の北3.7ｍにあり，盛土をはねて検出したものである。南北2.3ｍ×東西2.5ｍの隅丸方形，ローム層に西側で10㎝，東側３分の１には１段低い段がつき15㎝の掘りこみをもち，柱穴は東側に竪穴の外に２こが2.2ｍの間をおいて南北に並び，竪穴内に1こ，西側は壁について１こが

発見されている。北側は高い盛土のため調査は未了であったが柱穴が並ぶものと予想された。

遺物（図60の１・２）　１は山茶碗の底部で，篦削り高台をなし，穀粒，また籾殻の付着痕を残す。２は仏花瓶の底部とみられ，美しい緑色の灰釉が施され，糸切底をなす。この他，古瀬戸片，天目茶碗片等がある。

(2) 柱列址

遺構（図21）　南は18号住居址の１部にかかり，東西５ｍ，南北13.5ｍの範囲に南北方向に並ぶ。北側は盛土のため調査未了になったが，さらに北に続くかは不明，調査時点では，３区画をなすとみられるが，なお検討を要する。

南より①西南西方向4.7ｍ×3ｍの２間×２間　②南西方向3.3ｍ×3.3ｍの２間×１間　③南西方向3.6ｍ×3.3～3.6ｍの２間×２間よりなり，その柱列の配置はやや矩形をなす。②は径60～70㎝，深さ63～70ｍと大きな柱穴よりなる。①の中央にある柱穴の西より有孔円板が検出されている。

遺物（図60の７・８，図61の12）　土師器には図60の７の坏形土器があり，内斜口辺をなし，口縁部は外反し，扁平の丸底をなす。器肌は平滑，底部は篦削りの後，横なで整形が施される。胎土は小粒の石英粒を含み焼成は堅く赤褐色を呈す。後期前半とみられる。須恵器片図60の８はタタキ目の上にカキメをもつ。胎土焼成精良なものである。この他に土師器，須恵器の小片10数点がある。石製模造品（図61の12）に有孔円板１こが検出されている。有孔部を僅かに残して欠損しているが双孔，不整形をなすものである。

遺構と遺物の関連をみると，遺構①は高床造の倉庫とみられ，②と③は同じ高床建造物をなすものとみられるが，十分な把握はできない。柱列址のもつ生活層はどこにあったかも問題で，暗褐色土層に堅い面をみるが床面とみる堅さは認められない。（地層は……表土20㎝→黒色土25㎝→暗褐色土５㎝→ローム層となる。）また火を使用した痕跡も認められない。遺物の出土は暗褐色土層よりが大部を占め，黒土層よりは僅かに縄文中期の土器片，土師器の小片をみており，平安期，中世の資料はない。暗褐色土層より土師器，須恵器，有孔円板の出土をみ，これに縄文中期末の土器片の混入もみられたが他の時期の遺物はない。このため，古墳時代の遺構として把え，この期の住居址群との関連において本遺構を考えたいが十分な決め手はもてない。

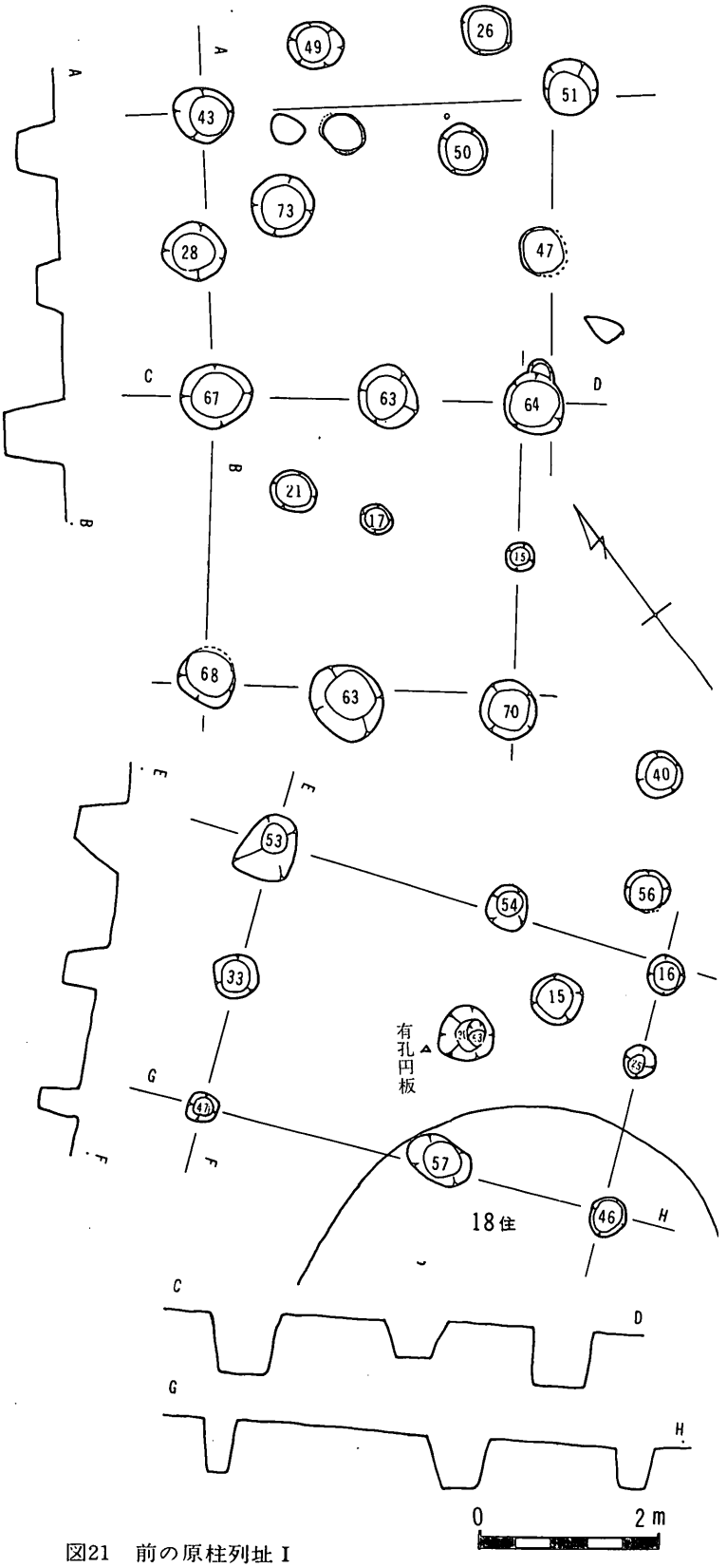

A
B
C
D
E
F
G
H
49
26
43
51
50
73
28
47
67
63
64
21
17
15
68
63
70
40
53
54
56
33
16
15
有孔円板
57
46
18住
0
2 m

図21　前の原柱列址 I

柱列址II

遺構図22）　東に３号住居址，南に２号住居址，西に17号住居址に接し，3.8ｍ×5ｍの範囲に２間×２間～３間とみる柱列をなすが，矩形をなし，その柱穴の配置は整っていない。南西端に175㎝×100㎝深さ34㎝と中央西寄りに182㎝×155㎝，深さ40㎝の楕円形をなす土坑状の掘りこみがある。高床式の建造物をなすものとみられるが，その性格は十分に把握できなかった。

遺物（図60の９）には，須恵器，土師器片が僅かにみられた以外にはなく，図60の９の須恵器が図示できるものであり，タタキ目をもつ。焼成，胎土の良いものである。しかし，遺物が遺構に結びつくものかは不明であり，遺構の時期を決める手掛りとするには不十分な資料である。

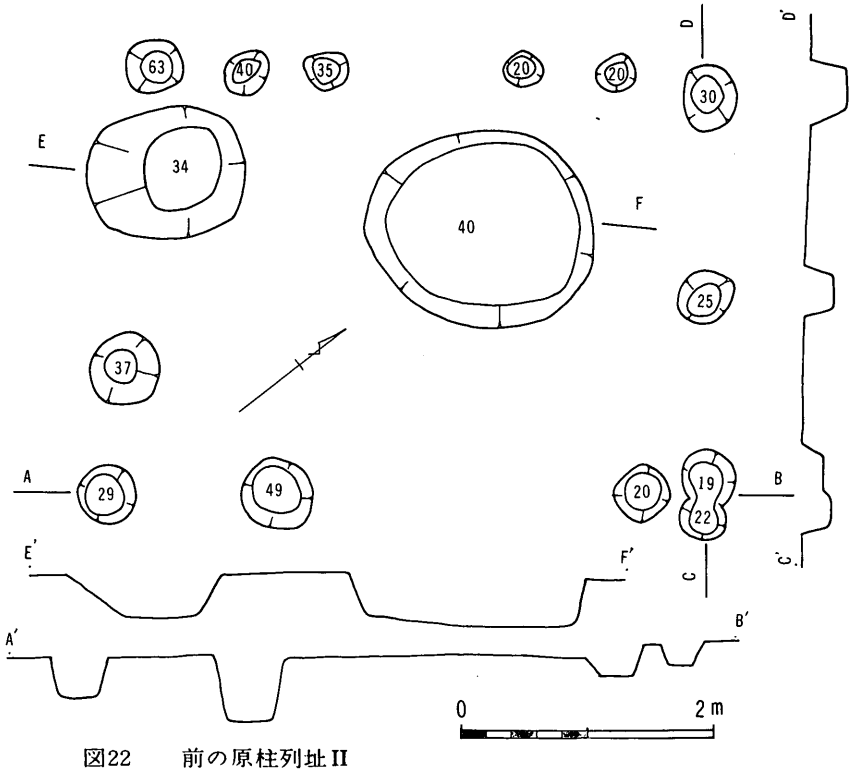


図22　　前の原柱列址II

(3)　土　　坑

１号から11号土坑が調査された。１・３～７号の１群と８～10号の１群をなすものと，単独に発見された２号・11号がある。これらを次の表にまとめたが，遺物については後に記することにした。

ア，前の原遺跡土坑一覧表

番号	大きさ(cm) 南北・東西	深さ(cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	図番号
1	82 ×132	60	隅丸長方形	N50°W	縄文後期深鉢1個体	甕棺とみられる	縄文後期	18
2	137× 80	60	楕円形	N18°E		4号住居址の西60cmにある	不明	7
3	142×100	40	楕円形	N69°E			〃	18
4	85×120	45	〃	N34°E		2段の落ちこみ	〃	18
5	136	23	円形	N12°E	縄文中期土器片数点 打石斧1	人頭大の石3こをおく	縄文中期末？	18
6	110×130	25	〃	N82°W			不明	18
7	120×100	29	楕円形	N20°E			〃	18
8	130×130	30	円形	N10°E		人頭大の石2個が入る	〃	9
9	90×110	72	楕円形	N64°W			〃	9
10	100×125	32	〃	N62°W			〃	9
11	80×105	40	〃	N36°E		7号住居址の中に掘りこまれる	〃	8

イ，土坑1号出土の土器（41の8）

土坑内に逆位に埋められていたが，底部のみは完全で，他は潰れた状態で，口縁部3分の2を欠く。口径42.5cm，高さ48.4cm，器壁は1.3～1.9cmを測る厚さをもつ大形の深鉢形土器である。最大径は口縁部にあり，底部から直線斜行して開き肩部に胴最大径をもち，頸部は内屈して，くの字状に口縁部は外反する。頸部から懸垂する沈線で器面を飾る。飯田地方では初見の土器であり，縄文後期初頭に位置づくものとみられる。

(4) 遺構外の遺物（図60の17・18）

縄文中期末の土器片は数多く出土しているが，図示したのは図60の17・18の2点である。18は6号住居址の東3mより出土した打製石包丁である。前の原は弥生時代の遺跡ともなっており，この期の遺構，遺物の出土を期待したが本次調査で弥生時代の遺物はこの1点のみである。硬砂岩製，20gの小形のものである。

17は，14号住居址の上層より出土した土師器の椀形土器である。内斜口辺をなし，口縁部は内屈してくの字状に外反する。丸底をなし，器面は篦磨き，内面には暗文がつく。胎土，焼成は良く，淡褐色を呈す。後期前半のものとみられる。

2．前の原古墳群の調査結果

桐林面の先端部の古墳群は北から久保尻１・２号，久保尻幸神，高見，中屋１・２号，前の原１～６号，尾畑，坊主新田１・２号，中屋畑，庵の塚１・２号の消滅古墳があり，西端部に丸山，大塚，兼清塚の代表的な前方後円墳が現存している。

今次の農業構造改善事業区域内には，前の原３号古墳の１部と，高見塚，中屋１号古墳が含まれ，この３消滅古墳の調査を行なったものである。

(1) 前の原３号古墳（図18）

林氏高墳の碑がたててあり，この北東は小高い墓地となっているのが古墳の跡を残すもので，大規模な円墳と伝えがあり，碑は石室の天井石とみられる。この残存部の西側の用地内に所在するとみられる周溝の調査を行なったものである。溝巾1.5ｍ，深さローム面より50～70㎝，溝は北東にのび巾と深さをさらに増すが，用地外となり調査不能，南はやや西にカーブをみせて切れ，これより南は墓地のブロック塀と６号住居址の間のトレンチでは塀ぎわに東に落ちこむ溝の存在を認めたが調査不能，碑の位置は墳丘の南端に建てられたとみられ，溝はほぼ直線的にのび，はたして周溝とみるかに疑問がもたれる。しかし，墳丘残存部の位置からすれば周溝とみられ，そののび方からみると前方後円墳であったとも考えられるが不明である。

遺物　周溝トレンチ調査の際８号住居址の確認が遅れ，このため出土遺物を混同したため，はっきりしないが，この際出土した遺物に図55の12～14があり，12・13は小形甕，14は内面黒色の坏である。14の坏は，８号出土の図55の７～11の５個の坏とは異なり，やや時期が下がるとみられ，後期土師式土器であり，３号墳に関連するものと考えられる。12・13の小形甕については，はっきり区別するには不十分な資料で何ともいえない。（今村）

(2) 高見塚（図23）

桐林848番地を中心とする小隆起のところが高見塚とされている。調査区城の北端にあり，北から東にかけては低地帯となり比高差1.5ｍ～2ｍ，西側で30㎝，南側で60㎝前後の高距をもち，南北約30ｍ，東西50ｍの残丘をなしている。黒土の厚い堆積があってローム層となっている。第１～第５トレンチ調査によると南の平坦面で50㎝余，20号住居址の地点で72㎝，地形が高まるほど黒土層は厚くなり，104㎝となる。自然状態で人工的な盛土とはみられない残丘状をなし，この地帯は旱魃期でも作物の被害を受けたことはないといわれている。第１トレンチでは縄文中期末土器片，土師器片を，第２・３トレンチでは土師器片と中世陶器片を検出し，第４トレンチでは20号住居址を発見しているが古墳とみる痕跡は認められなかった。

第５トレンチでは，調査区城の北端近くに溝１，その南２ｍに溝２が検出され，その幅はともに2.2ｍ，ローム層への掘りこみの深さは，１が40㎝，２は15㎝と浅いが高見塚周溝ともみられ，北にカーブをもつ。これよりみると高見塚は隆起地点ではなく，北に下がった現在宅地となっている位置にあったのではないかと考えられる。竜丘村誌編纂委員の中田美稔氏によれば「残丘上でなく，宅地の西側にあったと言い伝えられており，古墳所在地848番地も国土調査の際に変更され，現在地番とは異なっている。」とのことである。

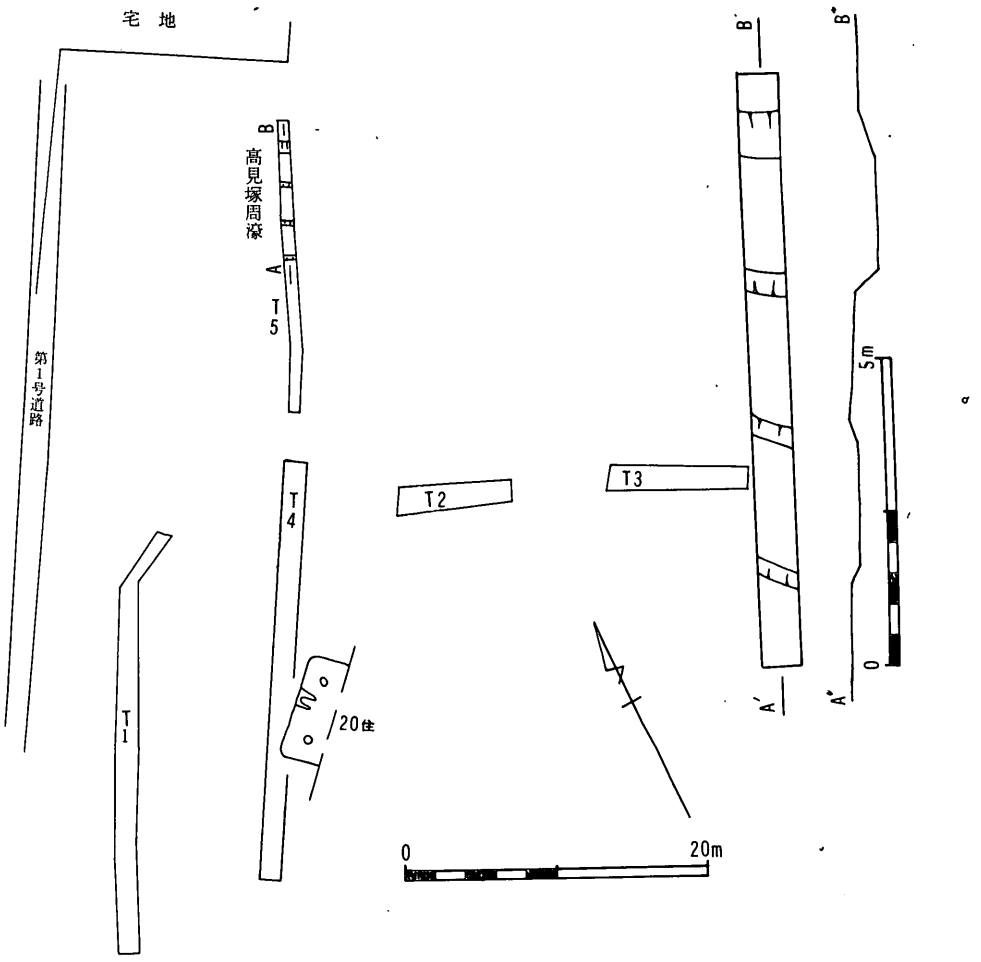


図23　高見塚調査トレンチ，周濠断面図

遺物は図60の10～13が溝内より出土している。10は土師器の高坏，11～13は須恵器，11は波状文を，12・13はタタキ目をもつ。これらは後期古墳末とみられるものであるが，高見塚に直接関係するかは不明である。（今村）

中屋1号古墳

桐林300番地・301番地の間にある土手に当るところにあった古墳といわれる。301番地は国土調査時に地番整理が行なわれ300番地となり，現在桑畑となっているが土手の部分は残っている。古墳のあったといわれる土手から2本のトレンチ（図24）を入れ調査するが，小さな溝2本が検出されたが周濠とはみられるものでなく，古墳の位置は把握できなかったし，周濠をもったかも不明である。

遺物（図60の14～16）はトレンチ内の出土でいずれも須恵器，14は坏，15は蓋坏の蓋部で，器面に水引の跡をもち，16は大形土器の底部でタタキ目をもつ。いずれも胎土に石英粒を含むが焼成，仕上がりは良い。時代的には下がるものとみられ，古墳に関連するものとはみられない。（今村）

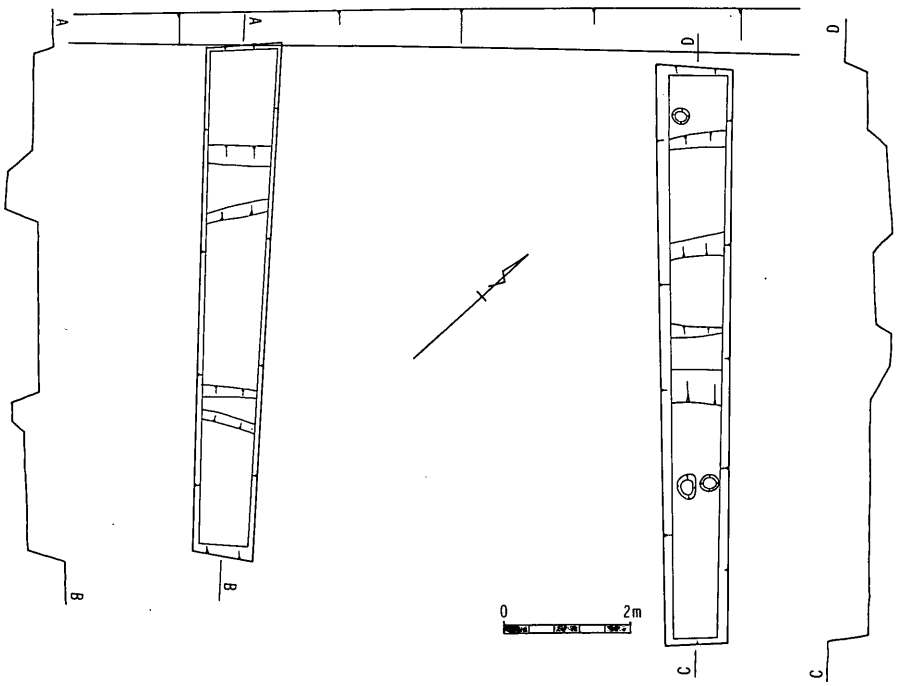


図24　中屋１号古墳調査トレンチ，周濠断面図

(II)　塚原古墳群と塚原遺跡

塚原は飯田下伊那地方における代表的な古墳群の所在地であって，飯田市指定の前方後円墳二子塚（塚原１号墳）をはじめ，鎧塚（５号），鏡塚（４号），黄金塚（10号），塚原３号墳と，塚原台地南端に金山６号墳が現存し，かつては16を数える古墳の存在したところである。また埋蔵文化財包蔵地としても縄文時代から弥生，古墳時代の遺物が表面採集されている。

今次農業構造改善事業計画は古墳所在地をさけ，現況を保存しながら農道を拡張または新設するもので，調査は農道用地内を行なったものである。工事前の調査では農道用地内に遺構は発見されず，しかも雨のため，この地帯は粘土層の堆積のため足も埋もる状態であり，調査は思うように進行しなかった

鏡塚の一部は，かつて国道151号付替工事の際切りとられ，この部分が農道拡張のため国道工事時点で築かれた石垣が僅かに後退をよぎなくされたため，墳丘実測と，農道拡張幅についての調査を行なったものである。

農道工事中に二子塚東側の段丘下段地域に遺跡が発見され，調査の結果１号～３号の住居址の存在を確かめた。

Ⅰ．鏡　　塚（図64）

飯田市桐林2883・2886－１番地に所在し，墳丘の西側の１部は国道151号改良工事の際に切りとられ，それに伴う発掘調査が昭和42年６月に行なわれ，その調査報告書(注１)によれば，墳丘45cm，高さ2.5ｍの円墳，調査は墳丘の西端部全面積の８分の１程度の範囲であったが，葺石の存在と，埴輪の破片多数を発見したが，内部構造については不明とある。

今次調査は，昭和42年度調査の南側の農道拡張部の巾50cm，長さ10ｍの限定された面積であったが，

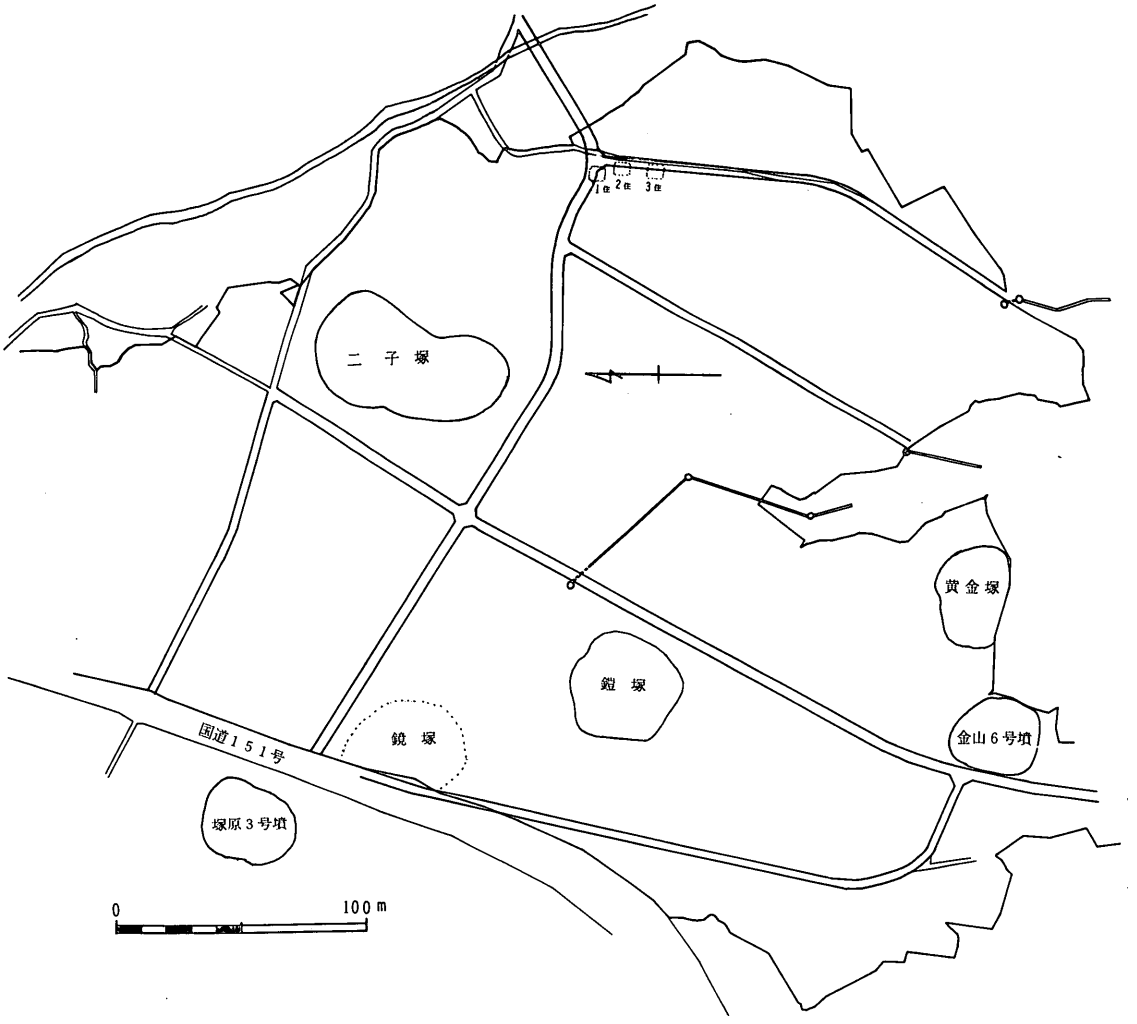


図63　第二次農業構造改善事業飯田市竜丘塚原地区平面図

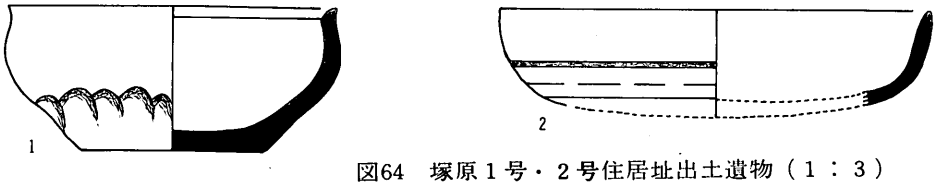


図64　塚原１号・２号住居址出土遺物（１：３）

幅6.35ｍ，深さ1.2ｍの周濠の存在が確かめられ，墳丘南側の境界が明らかになり，墳丘測量によって南北径は推定42ｍ余となり，現在高さは２ｍを測る。

周濠は粘土層からローム層に掘りこまれ，内部覆土は暗黄褐色土で埋まり，僅かに埴輪の小片が検出されている。葺石とみられるものに周濠内縁部に僅か10個の石が密着してみられたが，昭和42年調査では葺石が明らかに検出(注2)されており，今次調査では葺石は排除されており，その存在を確認できなかったしかし，墳丘裾の南から東にかけての石垣は明らかに葺石を利用したものとみられる。墳丘全面が桑園となっており，このため耕作によって次第に崩され現在の高さとなったもので，かつては雄大な円墳であったことが推定される。

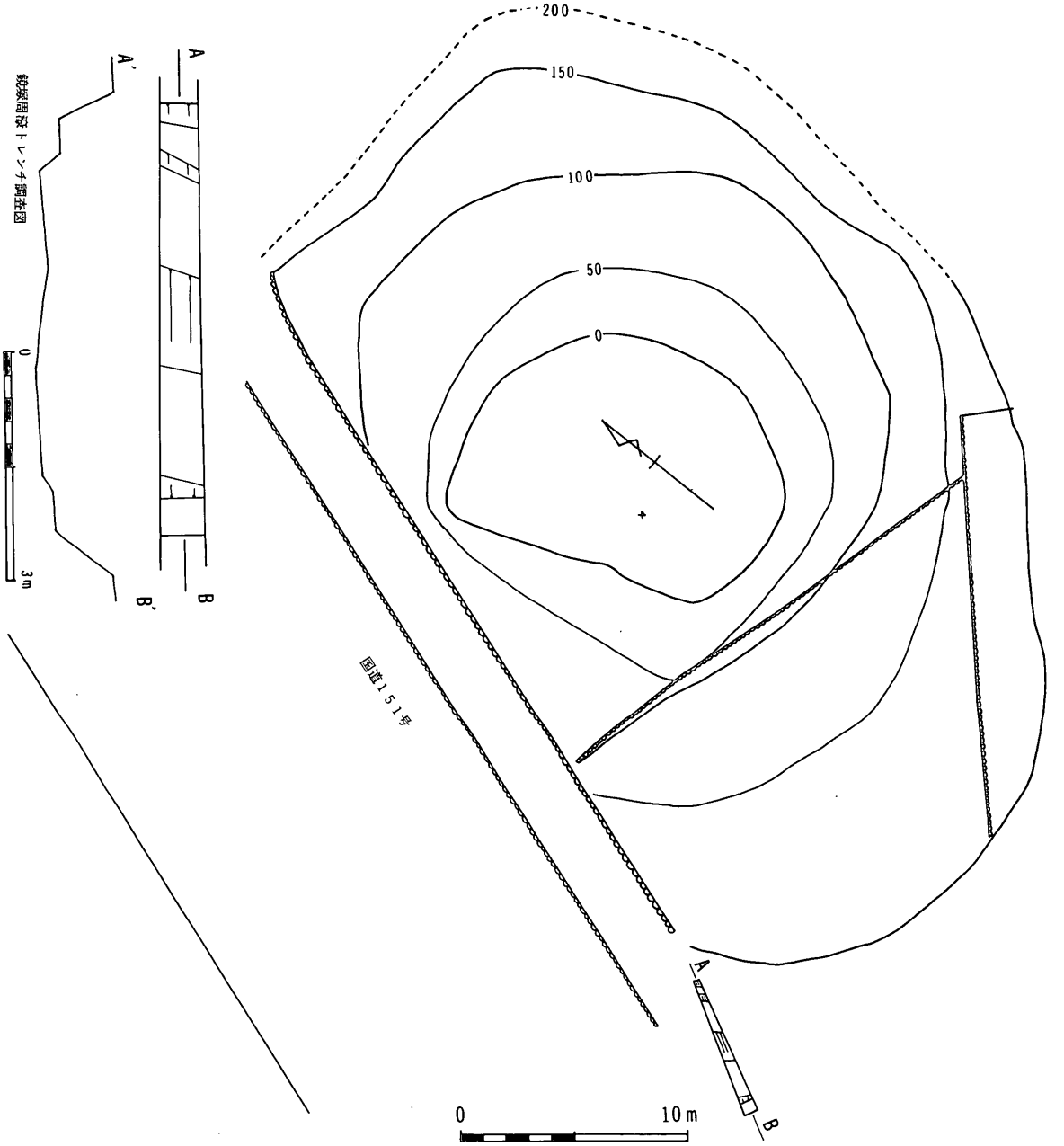


図65　鏡塚古墳実測図，周濠断面図

注1　大沢　和夫　「鎧塚発掘調査報告書」　昭和42年　飯田市教育委員会

注2　注1に同じ

2．塚原1号・2号・3号住居址（図62）

二子塚の東側の一段低くなる台地の農道拡張面に工事中遺物出土の報告を受け調査の結果道路切りとり面に1号・2号・3号の住居址の存在を確認した。東側は道路で削りとられ，西側は用地外のため発掘調査は不可能となり，切りとり面の黒土の落ちこみと床面の存在を確かめ，遺物の採集を行ったものである。一辺が5 m～5.5 mの方形プランとなり，ローム層に30cm前後掘りこむ竪穴住居址である。

遺物（図63）は1号・2号住居址出土の土師器と須恵器で，1は1号住居址出土の椀形の土師器，器面は粘土質のため荒れているが，胴下部に指圧痕を残す。器壁は比較的厚く，胴上部に最大径をもち，平底。頸部は内屈して口辺部は僅かに外反を示し，胎土は石英粒を多く含む。

2は3号住居址出土の須恵器，良好な仕上りで胴中央に横位の沈線がめぐらされている。浅い坏とみられ，胎土，焼成精良なものである。図示以外に3住居址ともに，土師器，須恵器の破片が検出され，いずれも古墳時代後期後半とみるものである。

ま　と　め

1. 前の原

前の原遺跡の調査は期日，費用の制約のため，農業構造改善事業面積の20分の1以下の調査に終わらざるを得なかったが，縄文中期末葉と古墳時代後期初頭とみる集落の存在が確かめられたが，集落形態を把握するにはいたらなかった。

縄末中期末葉の住居址出土土器は，埋甕を除き，大部分は住居廃絶時，または廃絶後の投入の状態の出土であった。4号・17号住居址は床面に接し，1号住居址では覆土中に多くがみられ，廃絶直後，また時間的経過をもって投入されたものとみられる。廃絶後の投入の全くみられない18号住居址例もある

この期の土器様相をみると，諏訪地方の編年では曽利II式に比定されるものに①東海地方との関連を強く示す7号・17号・24号住居址があり，②東海地方形と伊那地方に従来みられるタイプが両立する1号・12号住居址があり，③伊那地方を主体とする18号住居址がある。

曽利II式の要素を含み，III式に比定されるものに④東海地方系と伊那地方系の両立する4号・10号住居址があり，4号住居址の土器は他住居址とは異質な要素を多分にもち，木曽川下流域との強い関連を示すものである。⑤伊那地方の土器を主体とする3号・11号・14号住居址があり，⑥曽利III式に比定される伊那地方を主体とする2号・13号住居址がある。

⑦5号住居址の器壁の厚い隆帯による文様構成の小形深鉢は中期最終末か後期初頭とみられ，1号土坑の大形深鉢は後期初頭とみる土器で当地方初見のものである。

前の原出土土器は従来飯田地方にみられた中期末葉土器群とやや性格を異にするものがあり，今後当地方の縄文中期土器編年の手掛りとなる資料といえよう。

縄文中期末葉住居址出土の石器量は多く，打石斧，横刃形石器が主体となる。図示した打石斧は2号址・14号址・17号址が18～19こ，11号址は48こ，図示以外の1号址は完形134こを数える。横刃形石器は図示したものが平均8こ，1号址では20この完形品をみている。磨石斧は14号址を除き，2・3この出土をみるが大部分は刃部を欠く。完形品は図示する5この大形磨石斧と，4この小形磨石斧の出土をみたにすぎない。石皿は計7こ，この中2この出土をみた1号・11号址がある。凹石の計は3こにすぎず砥石に凹をもつ2号址出土があり，磨石斧の折れを利用した3号址のものがある。砥石には石皿の裏面を利用した1号址出土，凹石と併用した2号址出土と，砥石そのものの4号址出土の計3こがある。

狩猟漁撈具とみる石鏃，石錘については，1号址で石鏃4こをみるが，他遺構検出計3であり，石錘は1号址で26こを数える多量の出土をみ，注目されたが，今次調査出土計はその5分の1にすぎない。

打石斧は長さ7㎝～10㎝，重量50ｇ～80ｇの軽量，小形が70％を占め，中には6㎝前後重量40ｇ内外があり，ずんぐりしたものが前の原遺跡打石斧の特色ともみられる。これら多くの小形打石斧の用途は採集用具と考えられるが今後の究明課題である。

狩撈漁撈具の少ない点について，当地方の縄文中期末葉における生活基盤を考える上での問題点といえる。石器以外の用具として最も適したものといえば飯田地方における良質と種類の多い竹である。弓矢としても，竹槍，竹モリとしても適切な材料の豊富な地域であることを考えたいものである。

古墳時代の住居址出土の土器は後期前半，また中期後半とみるものもあり，飯田下伊那地方の最も密度の高い古墳群をもつ竜丘地区と，前方後円墳として飯田地方最古とみられる兼清塚をはじめ丸山・大塚等の前方後円墳を構築した背影となる基盤をこれら住居址群において考えたい。

古墳時代の住居址，柱列址より石製模造品の出土については，柱居内に祭祀の場が，この地方でこの期に設けられたものと受けとめたい。

前の原地域の消滅古墳についての調査は不十分なものであったが，高見塚の位置が確かめられ，前の原3号墳は規模の大きなものと推定され，中屋1号墳についてはその位置は把握できなかった。

2. 塚　　原

鏡塚の周濠の存在と，それにより墳丘径42m余の大規模の円墳であることが実測により確認された。

二子塚東側の一段下がった地域に古墳時代後期後半の住居址群の存在が予想された。しかし，調査時期の雨による粘土層の泥ねいのため十分な調査は不可能であった。

農業構造改善事業終了後の塚原古墳群調査によると，鎧塚は桑園改植のため墳丘東側の2分の1はブルトーザによる抜根のため，埴輪片，須恵器片が散らばり，墳丘も一段低くなっており，黄金塚はブルトーザによって一部は削られ苗甫となっていた。計画外の工事が構造改善事業に便乗して行なわれたことについては，今後文化財保護のため注意を喚起したい。

おわりに，今次調査にあたって大沢和夫先生，県教委文化課今村善興，伴信夫指導主事の御指導，調査員各位の御協力，下伊那教育会考古学委員会，飯田高校考古学研究クラブの応援をいただけたこと，作業にあたられた方々の熱心な作業態度が大きな力となったこと，前の原の工事を請負われた竜丘土建の方々のご理解と御協力を深謝したい。

調　査　組　織

1．竜丘地区埋蔵文化財発掘調査委員会

橋本　玄進	飯田市教育委員会委員長
矢亀　勝俊	飯田市教育長
山下　順蔵	飯田市教育委員
森本　信也	〃
平田　英夫	〃
田中　富雄	飯田市教育委員会事務局社会教育課長

2．調　査　団

団　　長	佐藤　甦信		
調　査　員	今村　正次	片桐　孝男	遮那藤麻呂

3．指　導　者

大沢　和夫	飯田女子短大教授
今村　善興	長野県教育委員会文化課指導主事
桐原　　健	〃

4．事　務　局

飯田市教育委員会社会教育課

田中　富雄	社会教育課長
山下　舜平	課長補佐係長
園原　春治	係　長
川手　周三	〃
長谷部三弘	主　事
太田　美佐	〃
林　　茂喜	〃

5．竜丘地区農業構造改善事業担当

農林課	課長	川井　　保	
〃	係長	小林　　衛	
〃	技師	牧田　裕隆	藤本　照之

飯田市農業協同組合

組合長	岡村　賢作
竜丘事業所長	高島　清志
竜丘担当事務局	春日　　博
竜丘担当理事	下平　才介

6．協　力　員

◎下伊那教育会考古学委員会

吉沢　輝人　　塩沢　仁治　　林　登美人　　松村　全二

梅村　金彦　　松沢　英男　　小林　昭治　　林　　光男

市瀬　洋吉

◎飯田高等学校考古学研究クラブ

7．作　業　員

寺沢　二郎　　吉沢　徳男　　北村　重美　　福島　明夫　　牧島　茂実　　沢柳　幸三

矢沢　俊男　　下平　貞雄　　中平　兼茂　　飯島　洋一　　宮下　喜作　　村沢　　守

塩沢　　基　　久保田尚子　　原　　一美　　小木曽道子　　宮崎　悦子　　塩沢しづ子

倉沢けい子　　下平美代子　　平沢きみゑ　　前沢　照子　　近藤たまえ　　下平せつ子

関島　千恵　　矢沢きよみ　　久保田きみえ　　中塚　悦子　　佐藤いなゑ　　中平　一夫

お　わ　り　に

昭和48年度の竜丘地区農業構造改善事業にひきつづき，49年度は前の原（久保尻），塚原両地区の事業が実施されることとなったので，事前に関係部課と事前協議及び現地調査を行って，昭和49年９月13日付文化庁に対し埋蔵文化財発掘届を提出し，10月15日より発掘着手をした。

前の原地区は，前の原遺跡，前の原２号古墳等の遺跡が，塚原地区は，飯田下伊那地区でも代表的な古墳群の所在遺跡でほ場整備事業が実施されれば古墳群の姿が失われると思われたが幸い関係者の理解によって農道整備事業のみ実施されることになったので古墳群を破壊することなく事業が進められることとなった。

今回の事業費は2,350,000円で農業構造改善事業費の中から負担金として飯田市教育委員会が受け直轄事業として行い，埋蔵文化財発掘調査記録保存事業が大きな成果を残してここに完了しました。

この発掘調査は耕地であるため収穫期の後より開始しなければならない状況の中で期間的にも多少問題はあったが，幸い土地所有者をはじめ各方面の格別なご援助とご指導によって当初計画していたように貴重な資料の発掘等の結果をみることができ感謝にたえない。

調査体制は，団長に佐藤甦信先生を先頭に調査員の今村正次先生をはじめ，各先生方の経験豊かな知識を以って終始献身的な協力と指導者の飯田女子短大　大沢和夫先生，県教育委員会文化課指導主事今村善興先生の適切な助言をいただき，また報告書執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもって当られここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和 50 年 3 月

飯田市教育委員会社会教育課

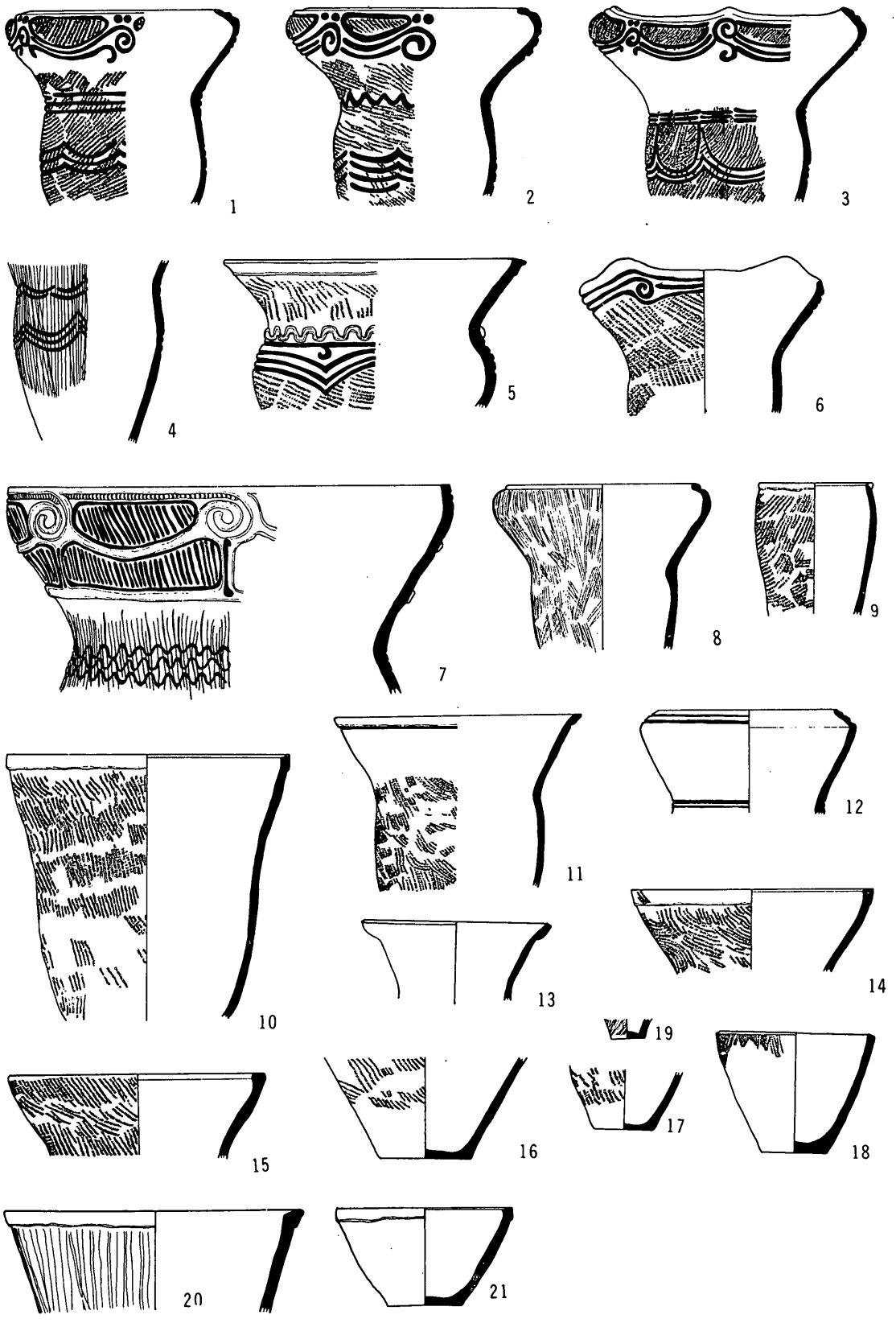


図25　前の原１号住居址出土土器Ⅰ（１：６）

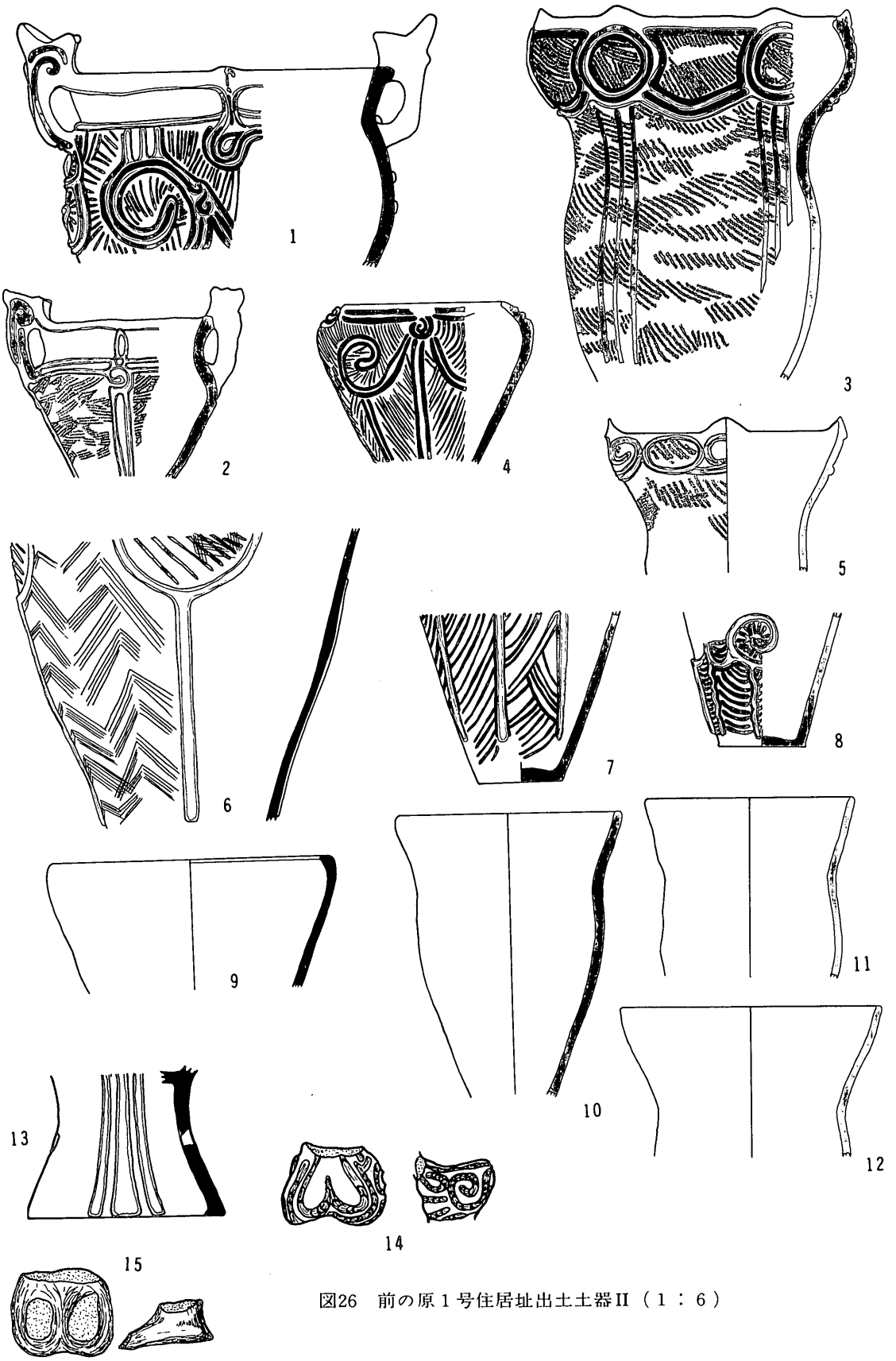


図26　前の原１号住居址出土土器II（１：６）

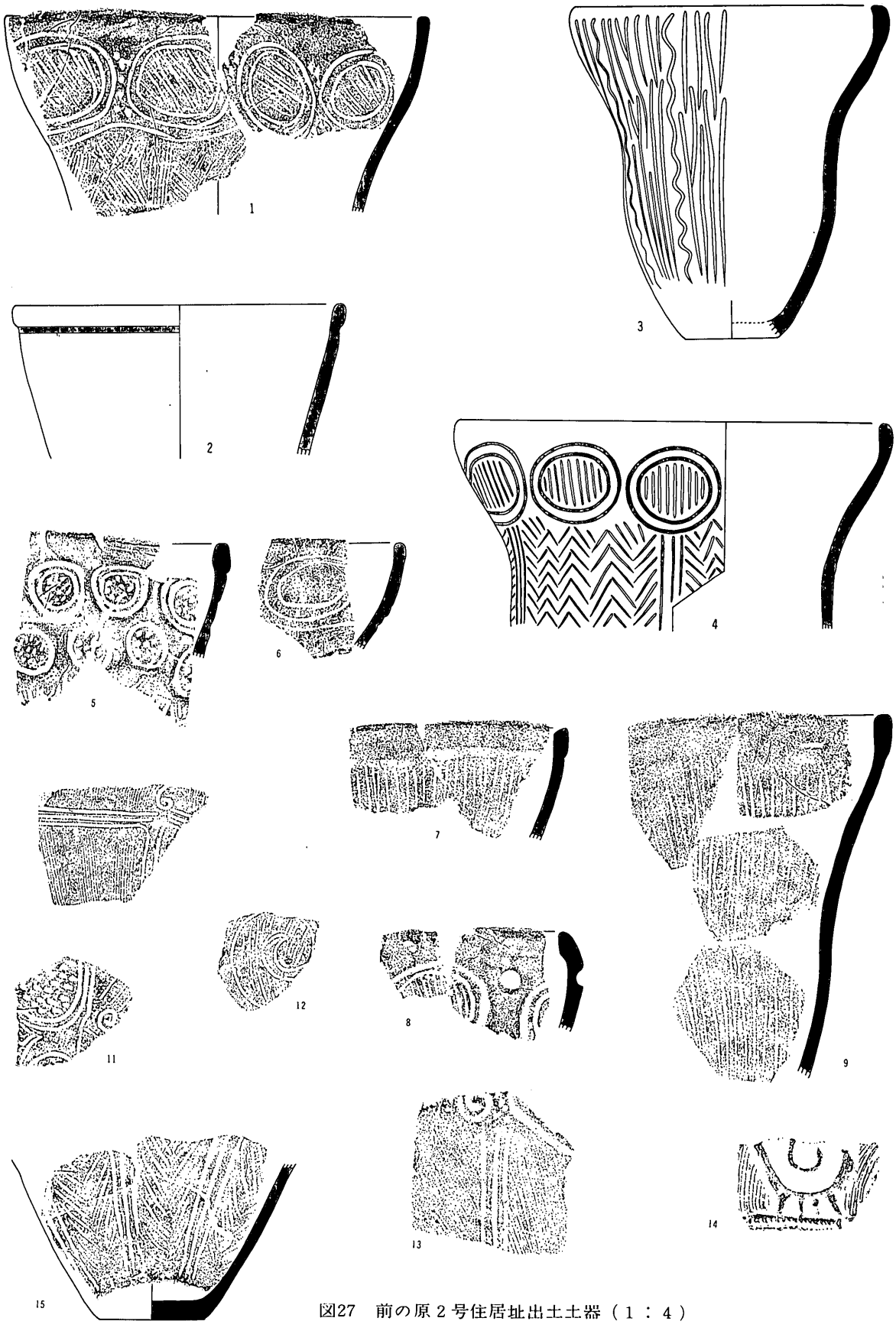


図27　前の原２号住居址出土土器（１：４）

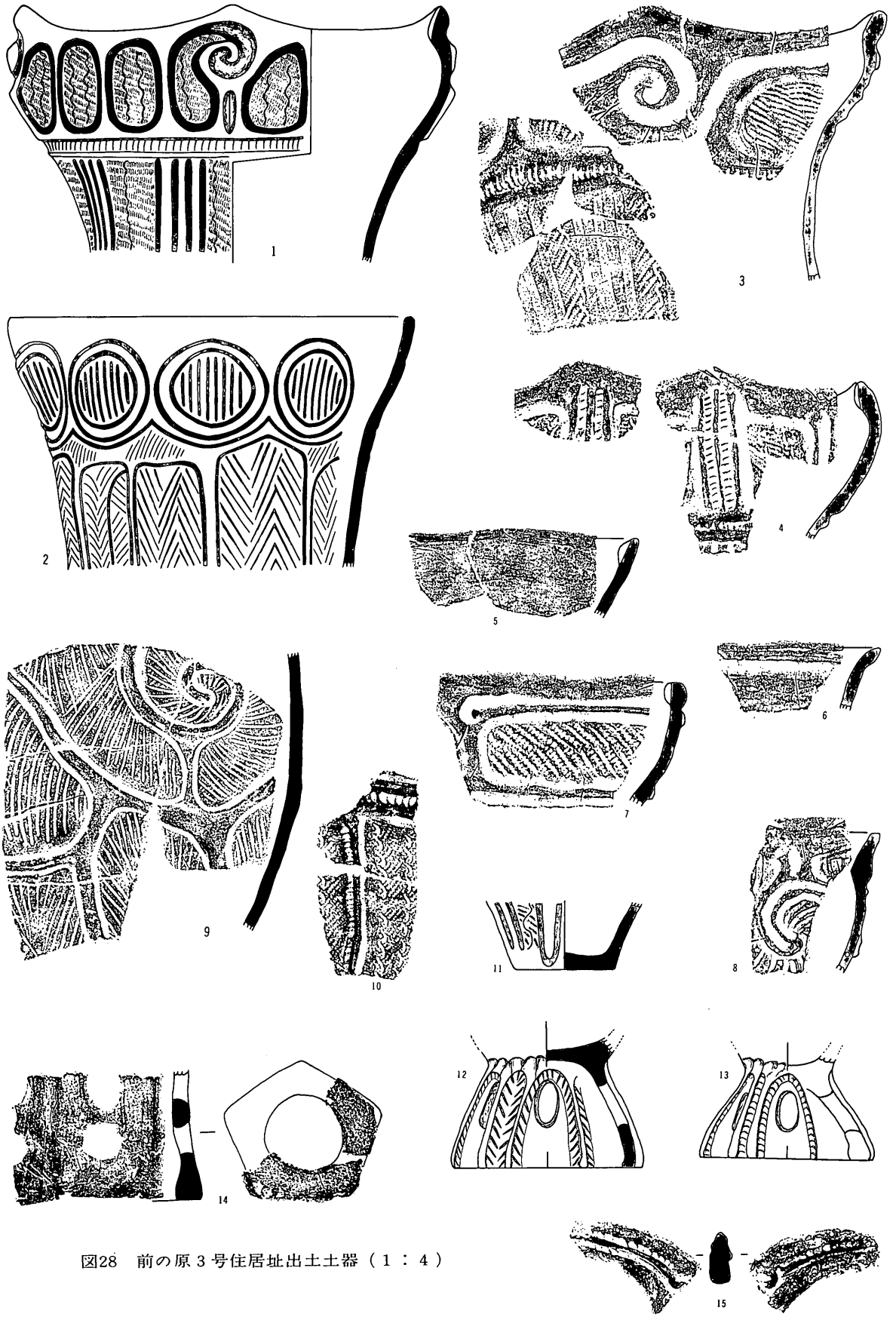


図28　前の原３号住居址出土土器（１：４）

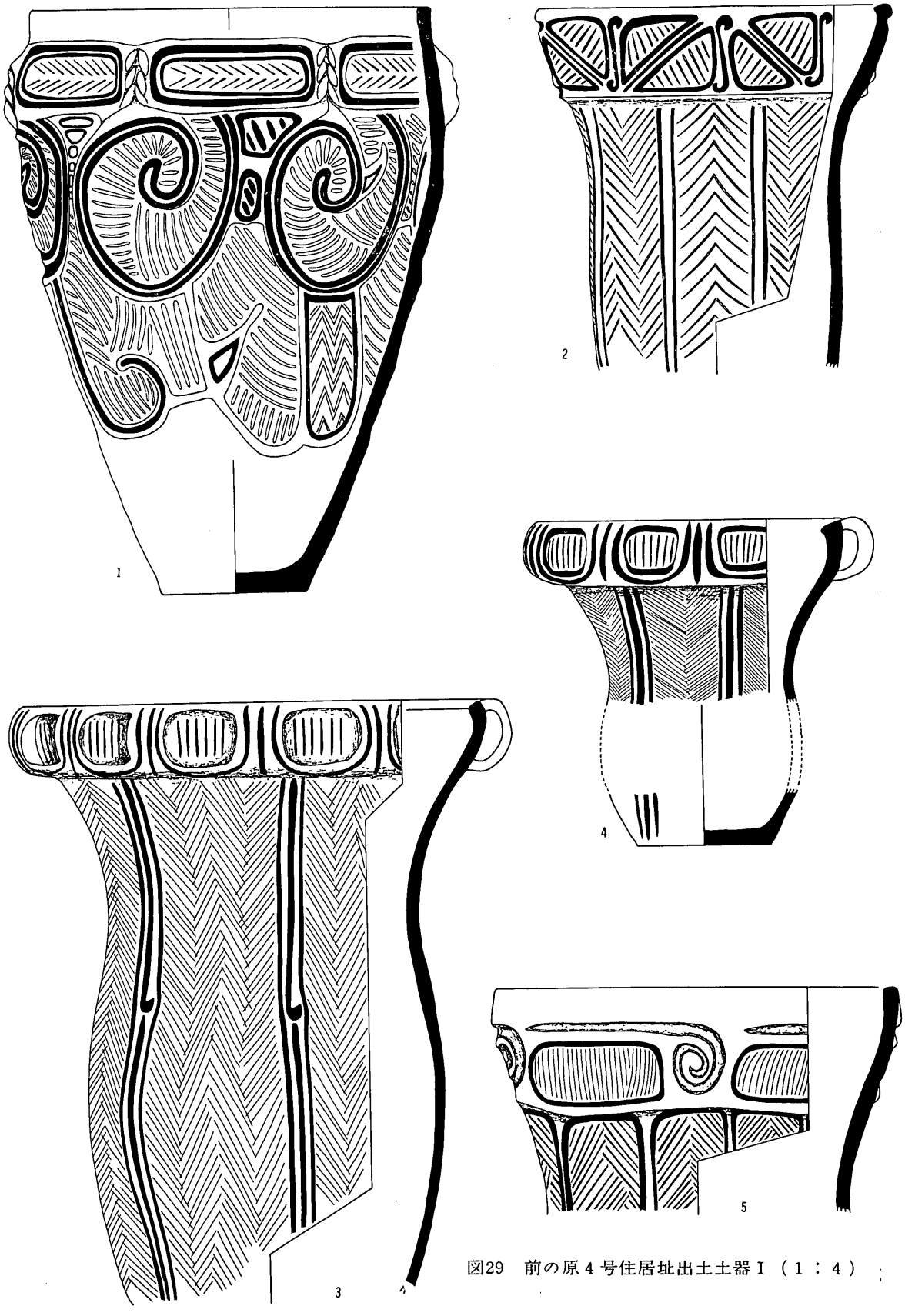


図29　前の原４号住居址出土土器Ⅰ（１：４）

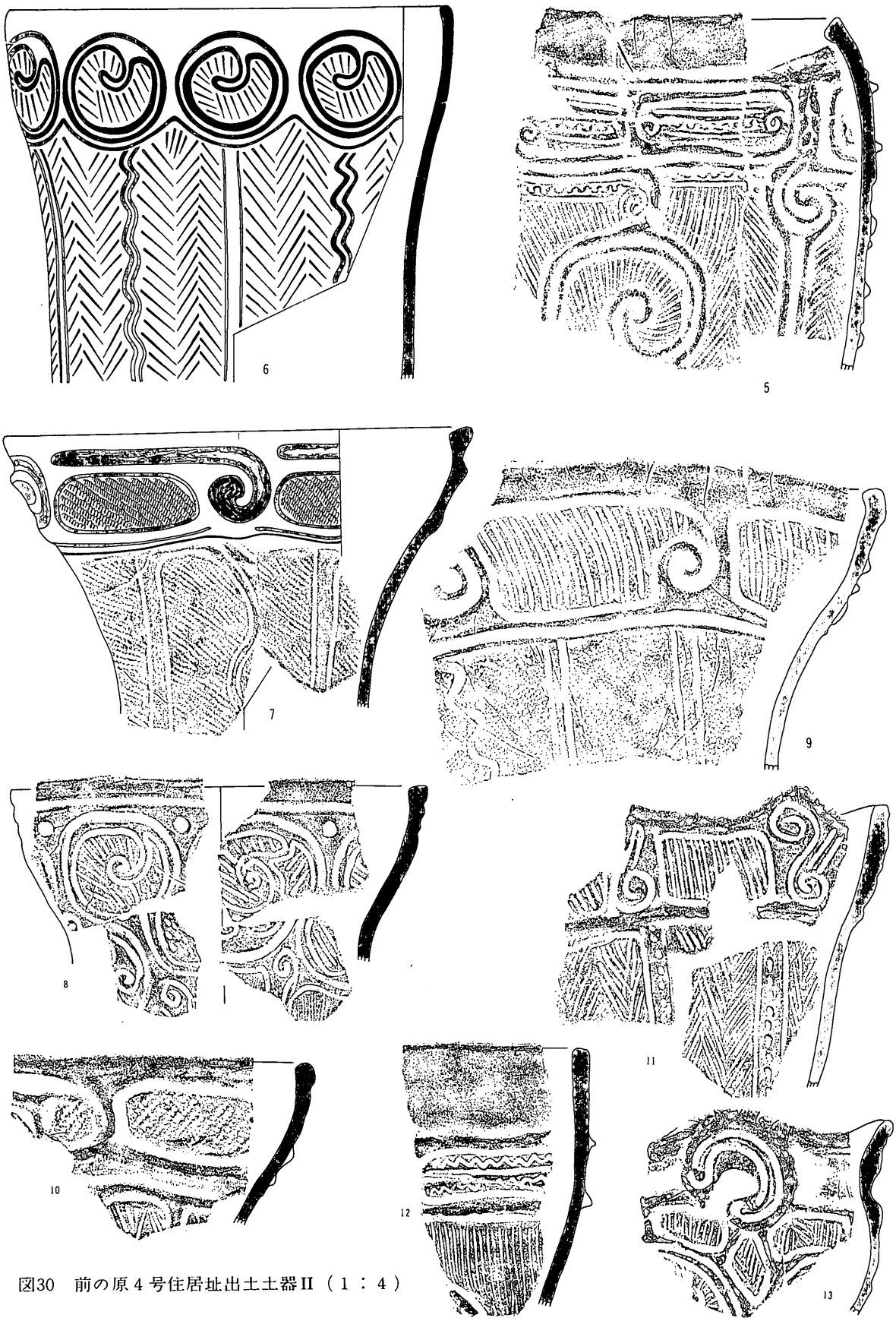


図30　前の原４号住居址出土土器II（１：４）

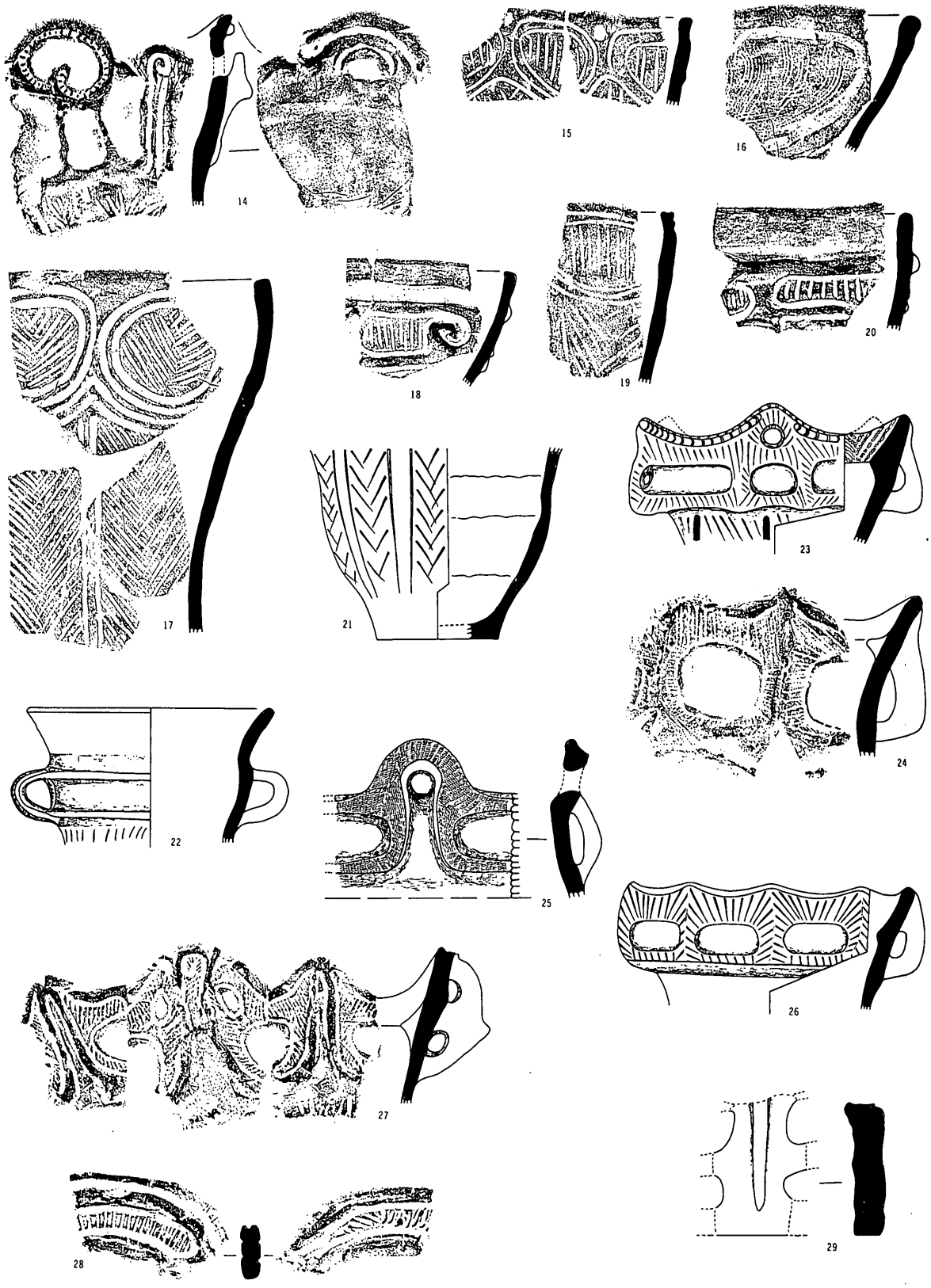


図31　前の原４号住居址出土土器III（１：４）

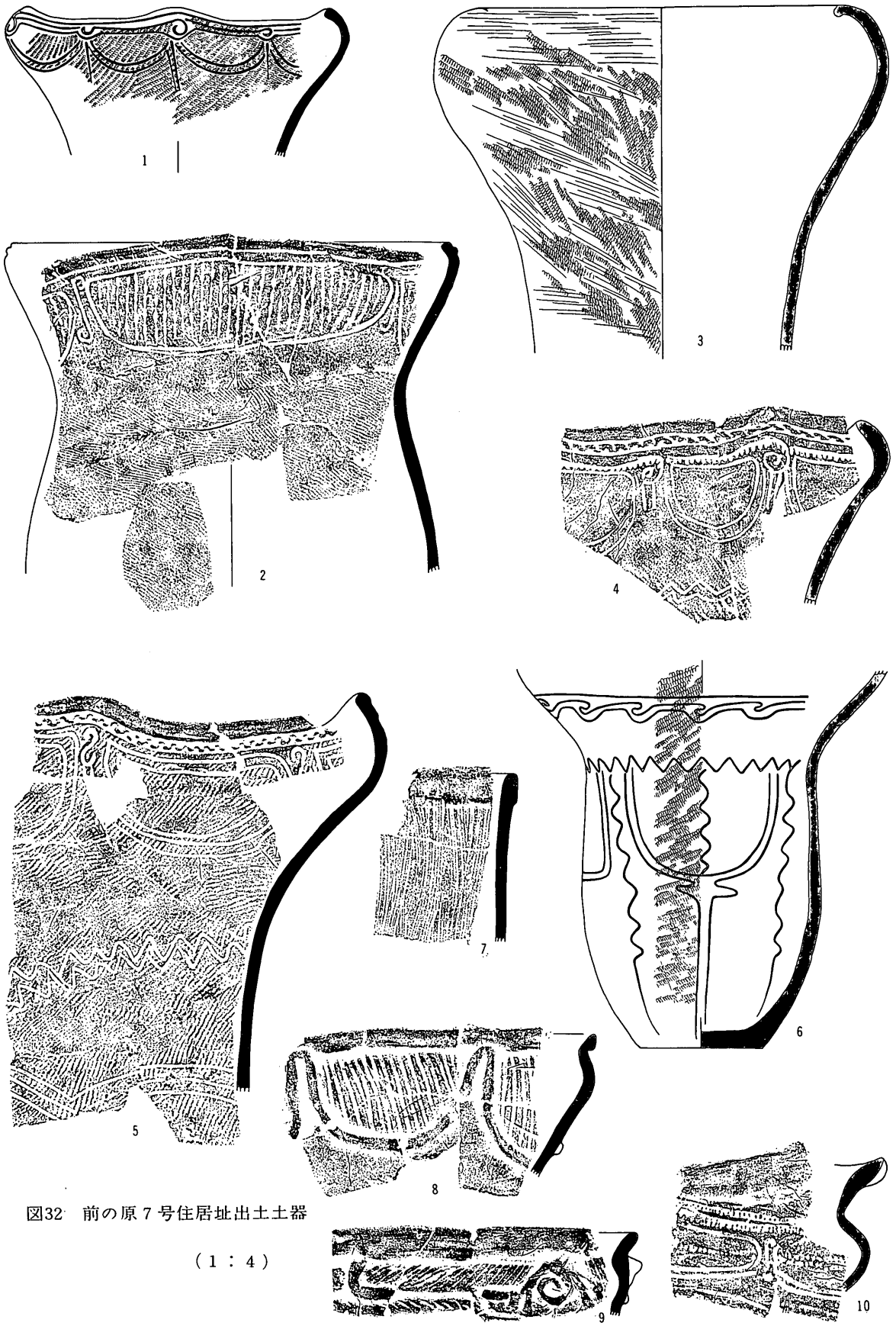


図32　前の原７号住居址出土土器

（１：４）

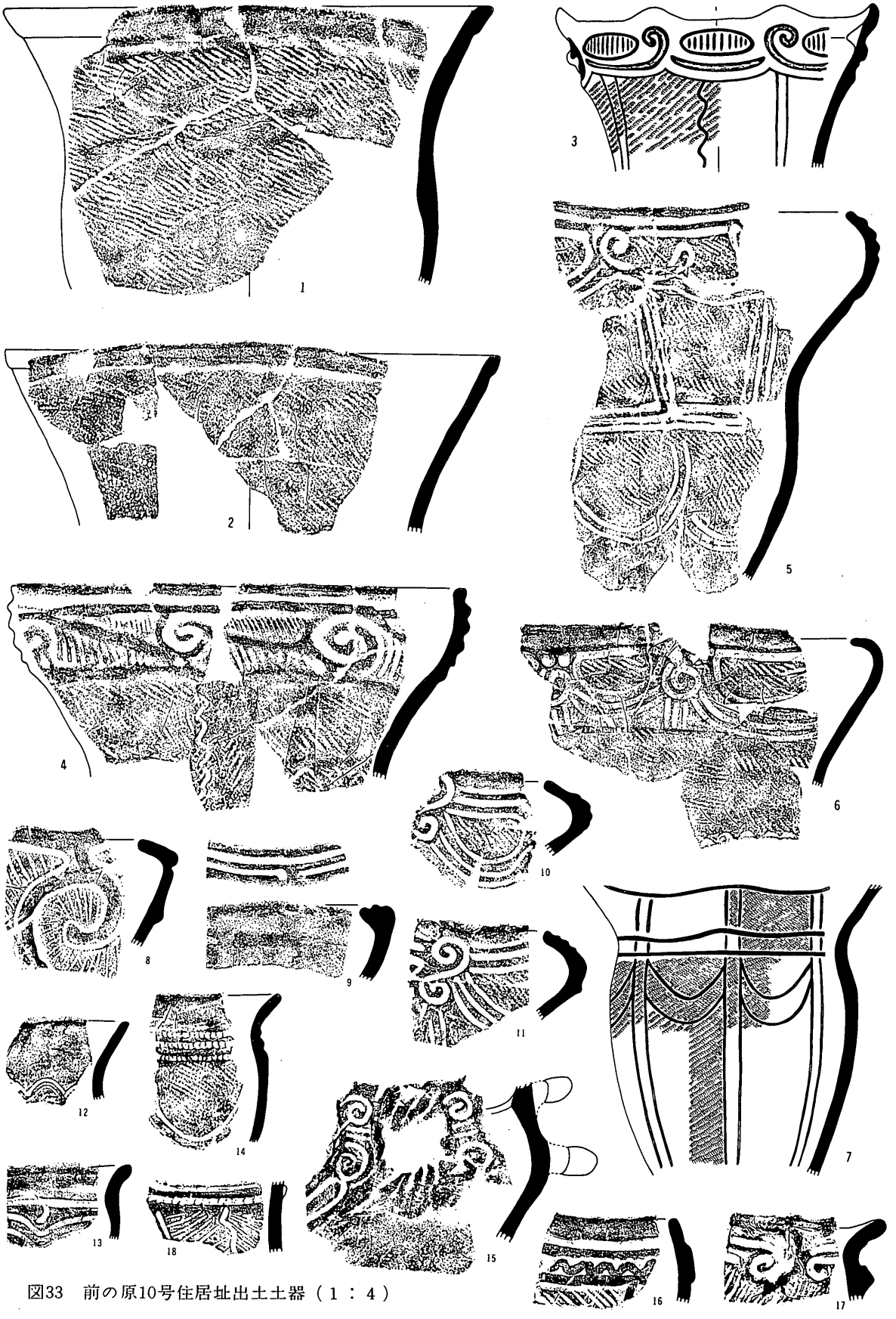


図33　前の原10号住居址出土土器（１：４）

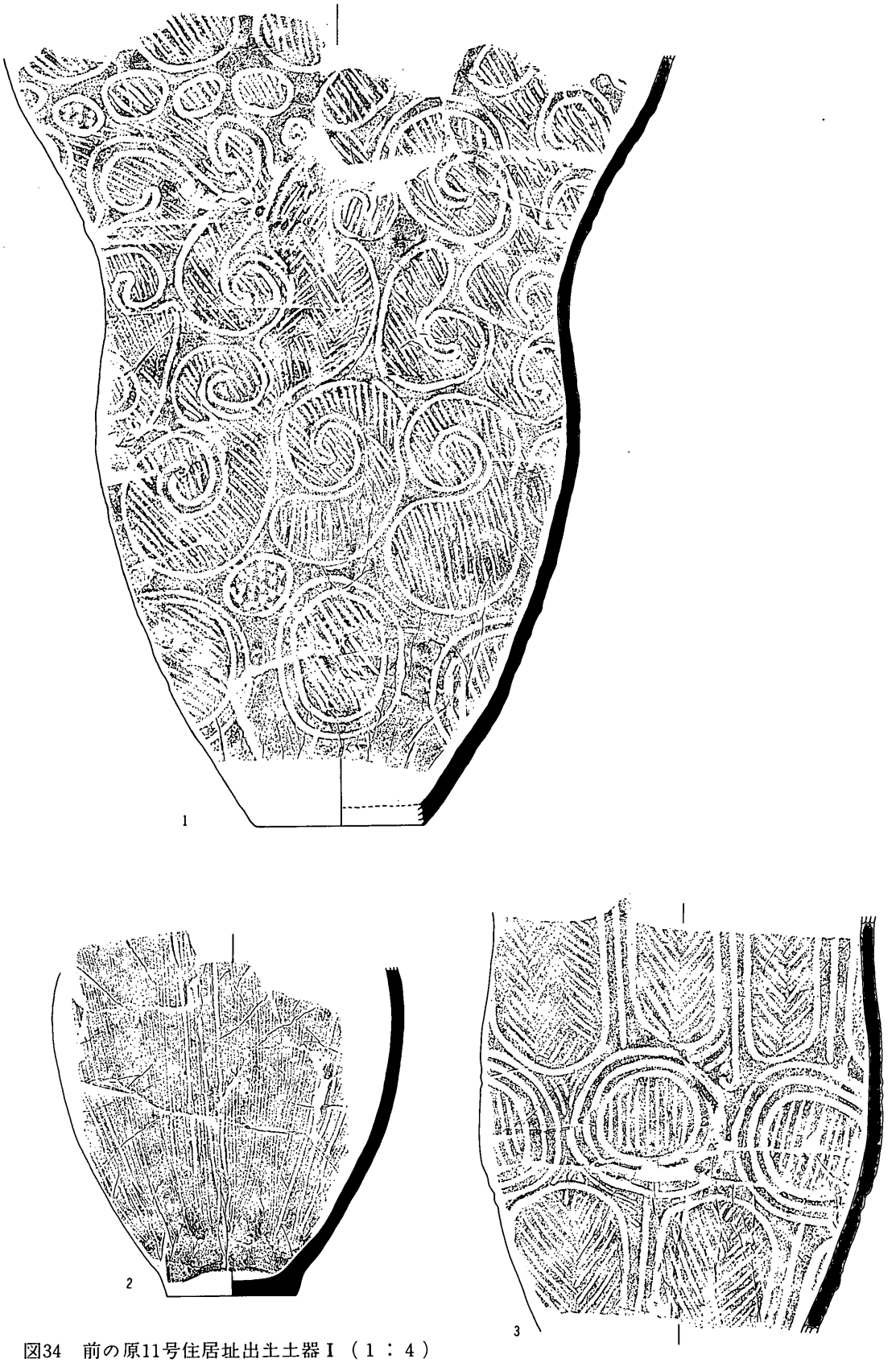


図34　前の原11号住居址出土土器Ⅰ（１：４）

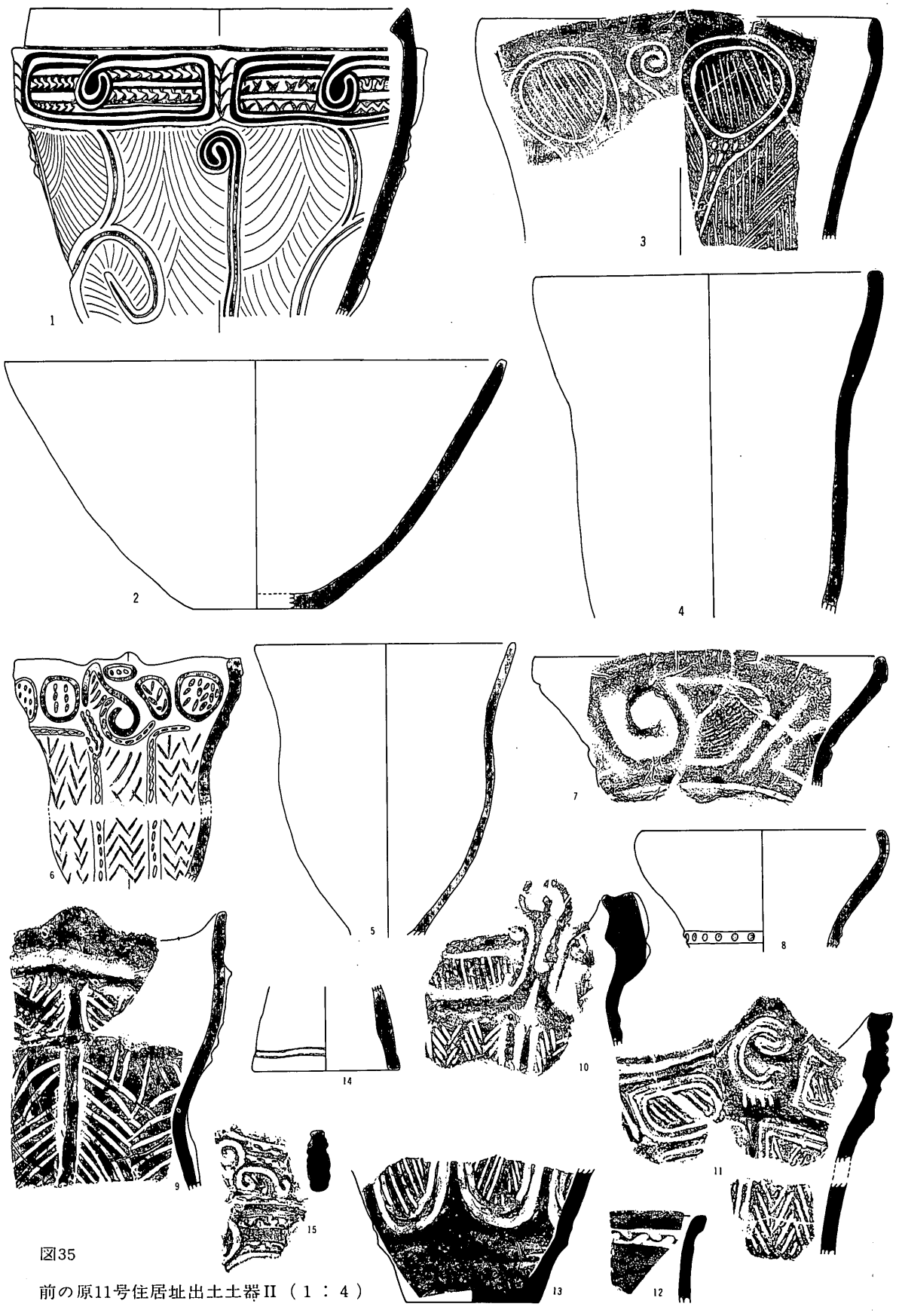


図35

前の原11号住居址出土土器II（１：４）

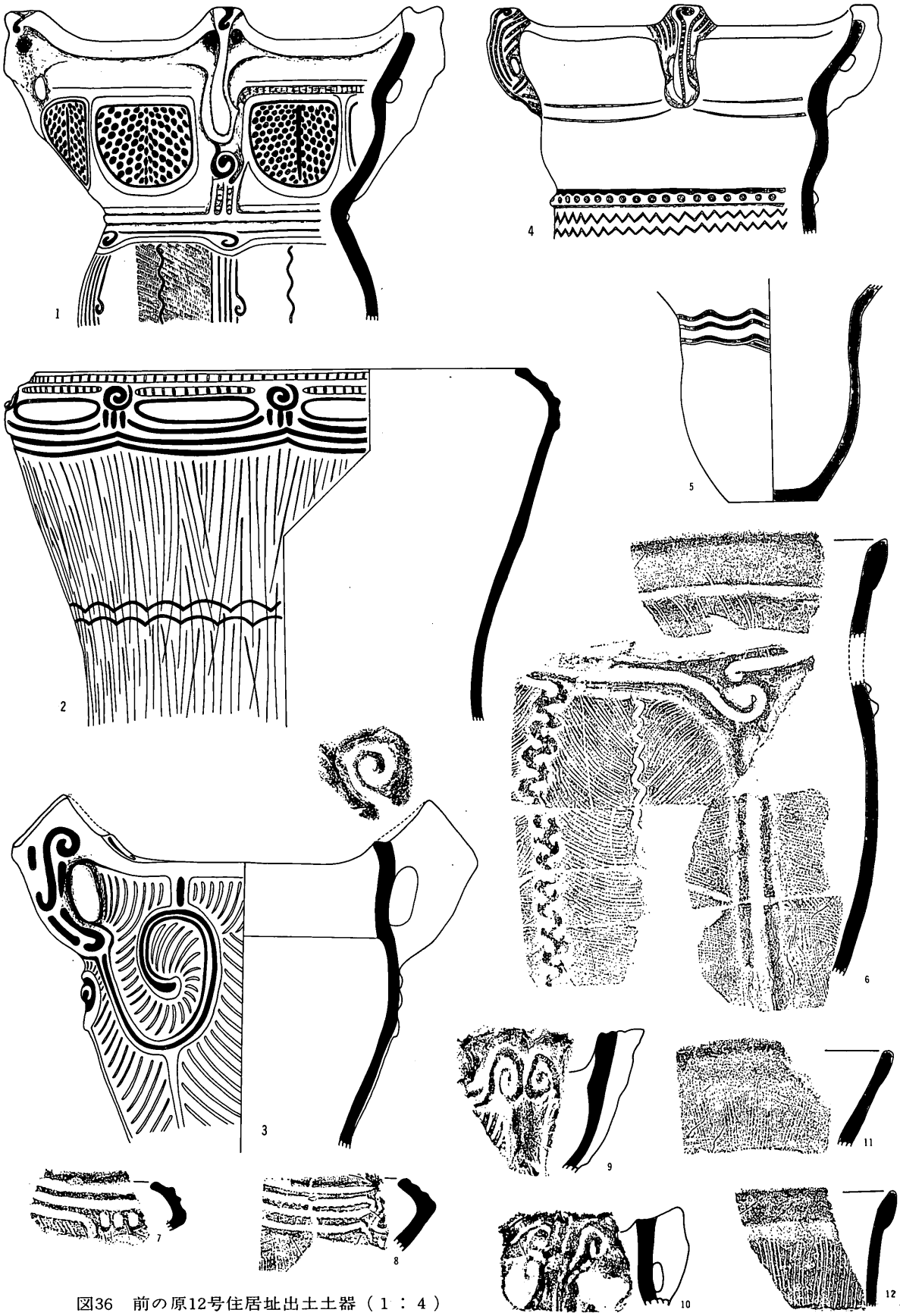


図36　前の原12号住居址出土土器（１：４）

図37　前の原13号住居址出土土器（１：４）

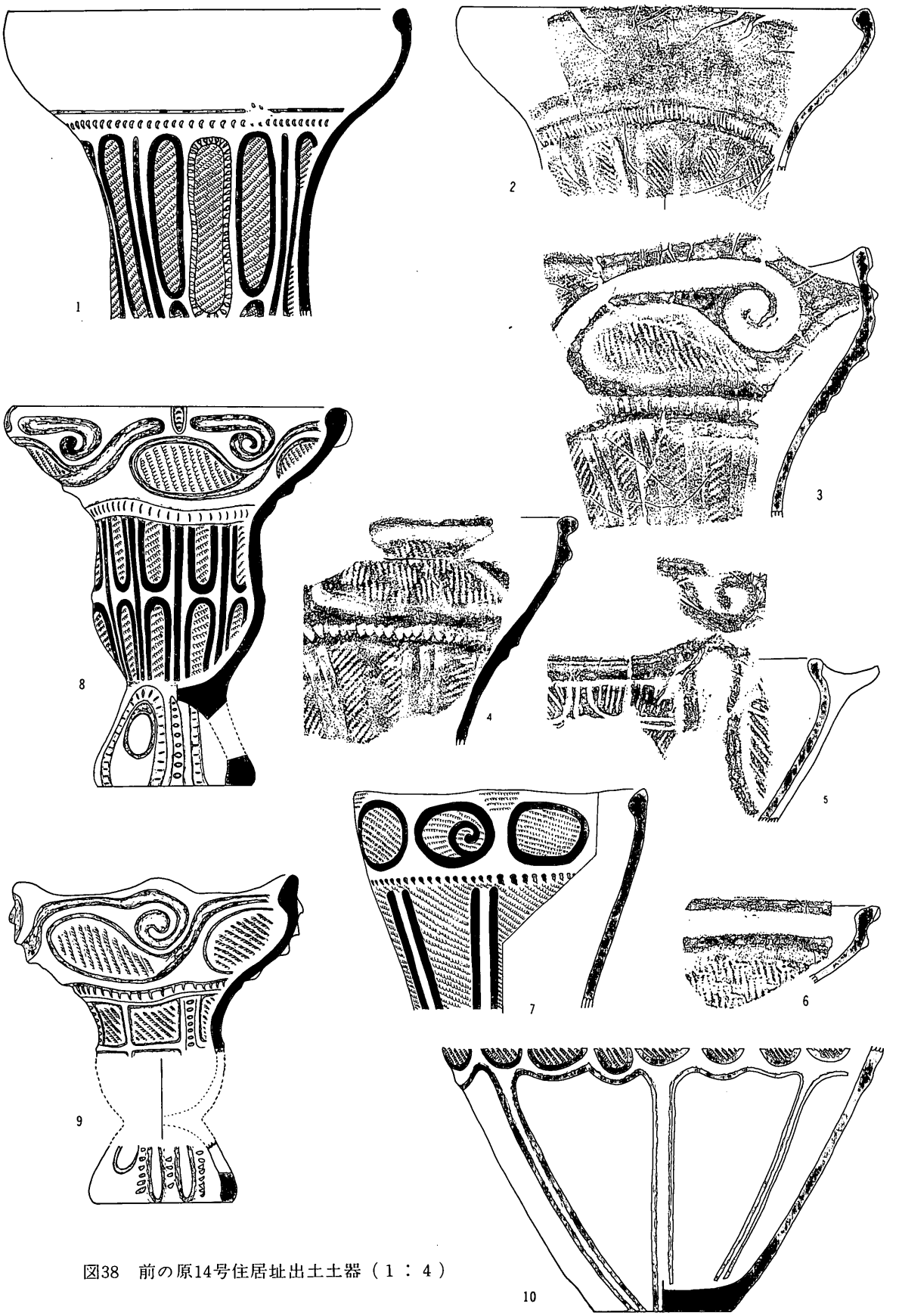


図38　前の原14号住居址出土土器（１：４）

図39　前の原17号住居址出土土器Ⅰ（１：４）

図40　前の原17号住居址出土土器II（１：４）

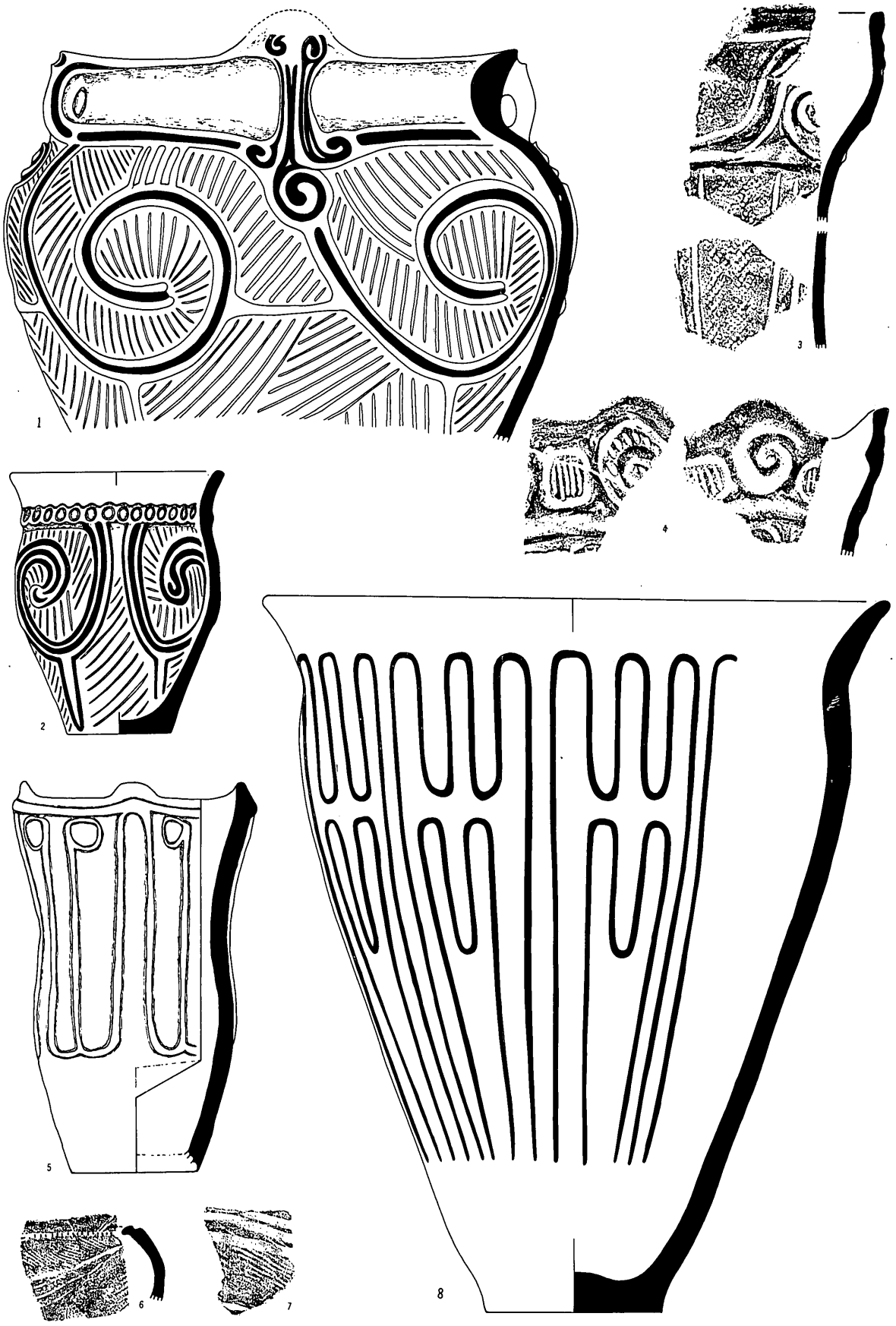
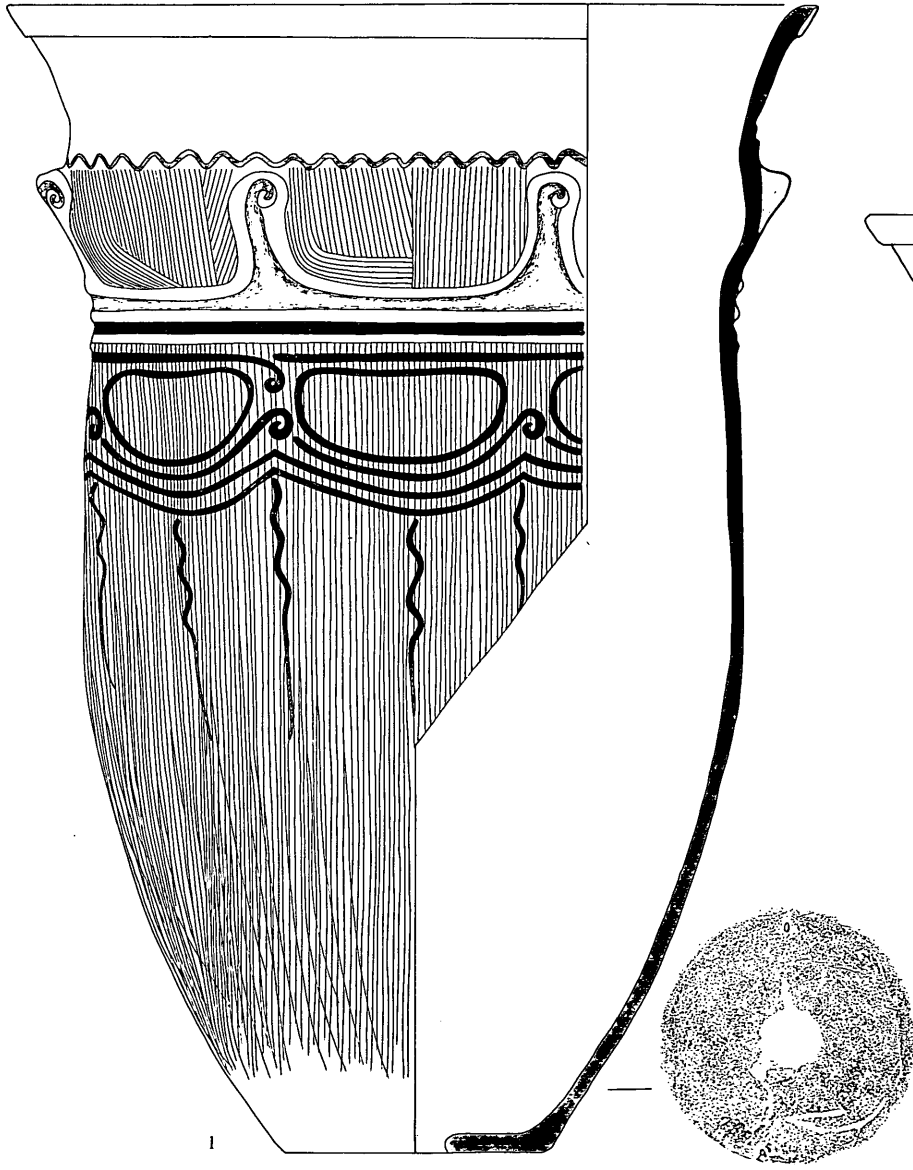


図41　前の原５号・18号・21号住居址，土坑１号出土土器（１：４）



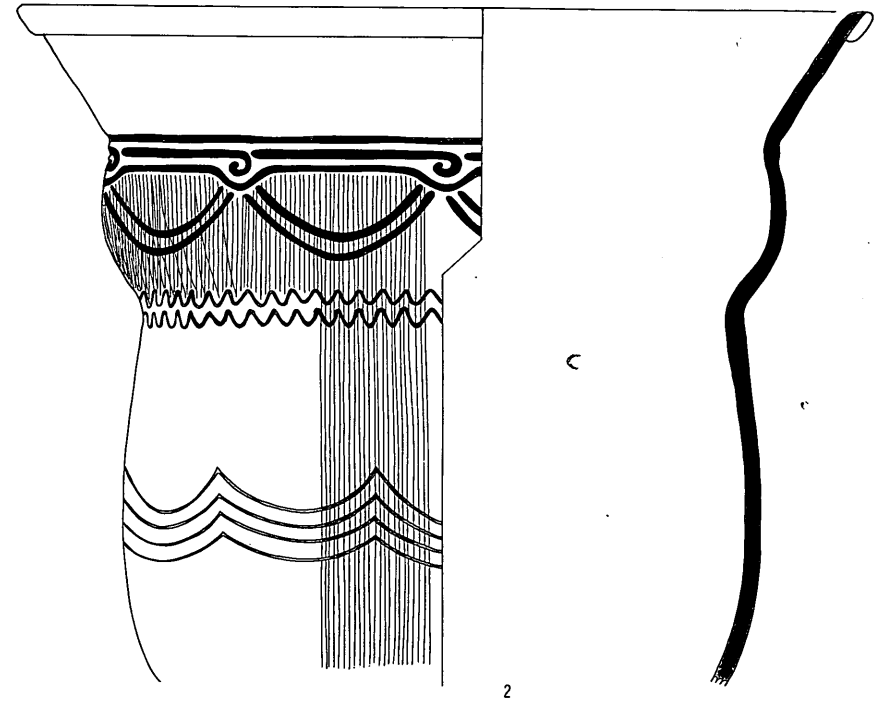


図42　前の原24号住居址出土埋甕（１：４）

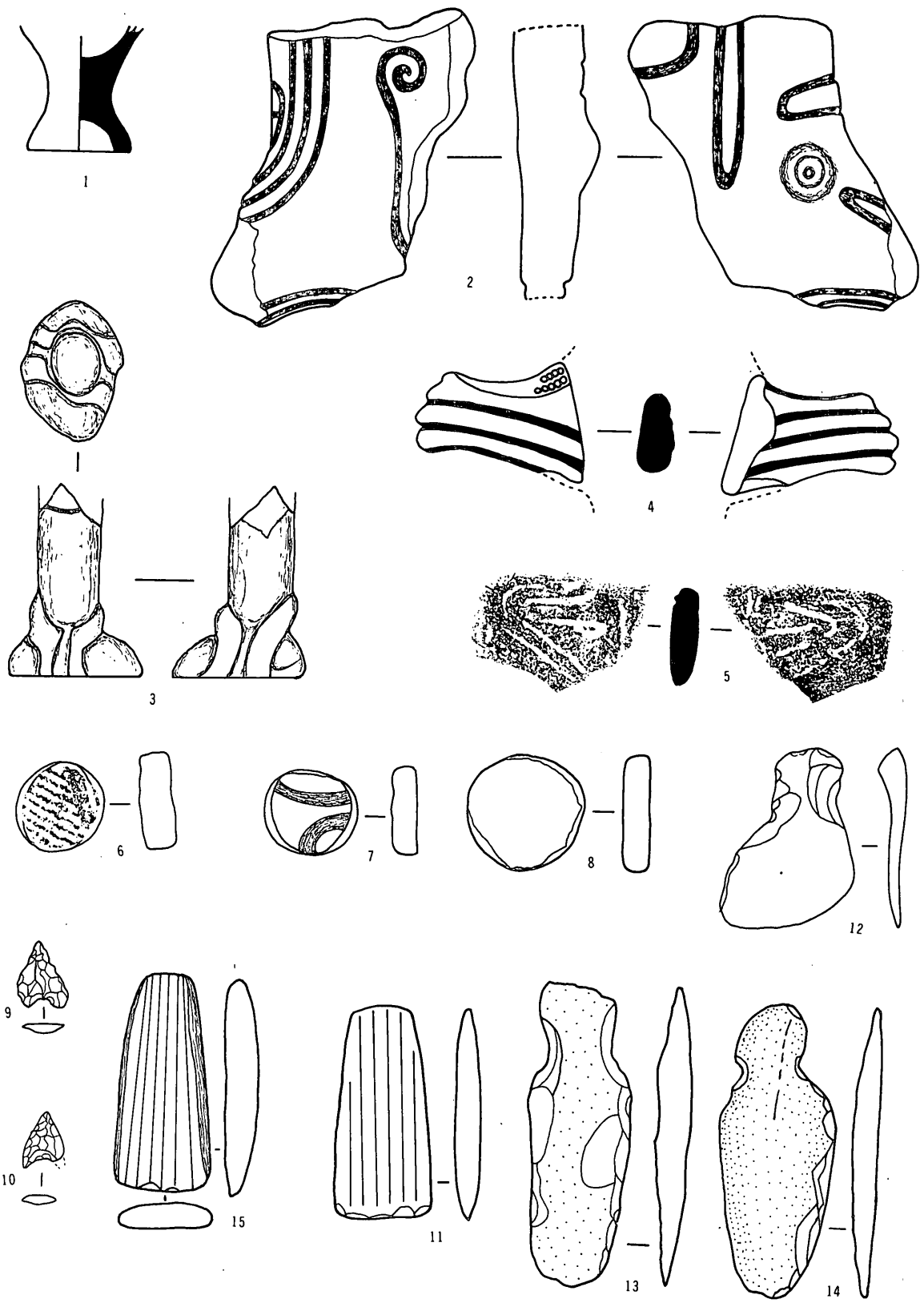


図43　前の原遺跡出土，土製品及び小型の石器類（１：２）

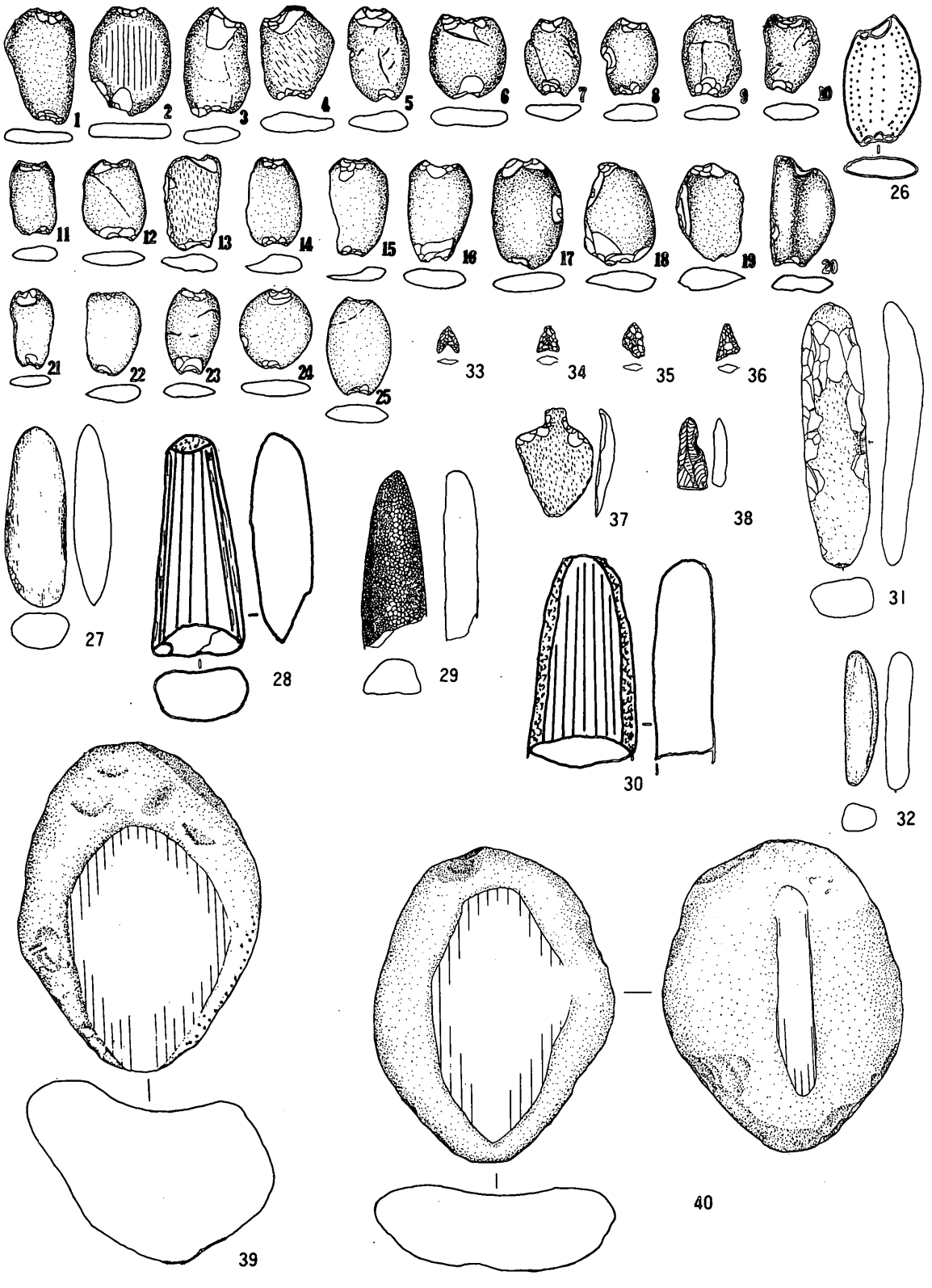


図44　前の原１号住居址出土石器の１部（１：４）

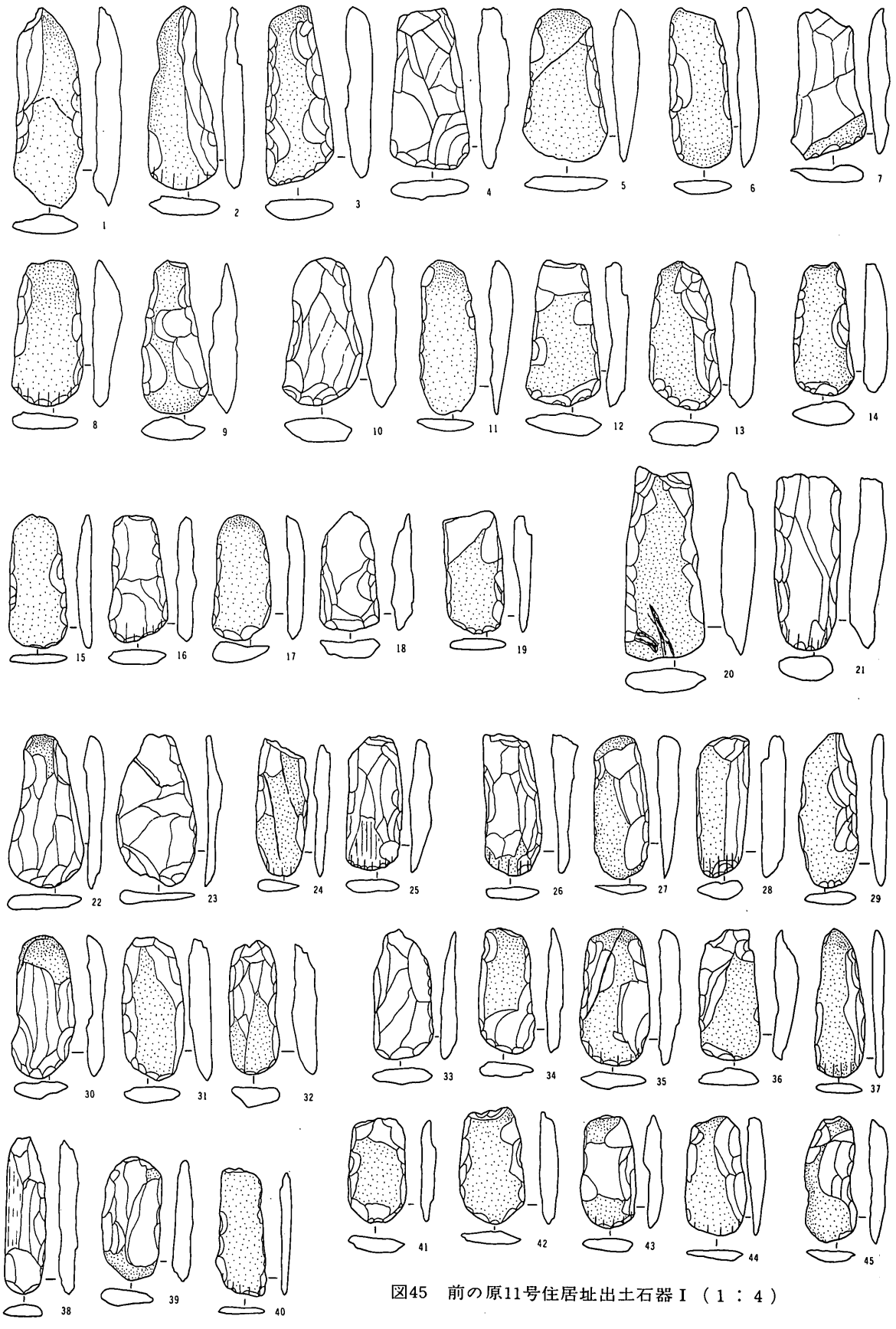


図45　前の原11号住居址出土石器Ⅰ（１：４）

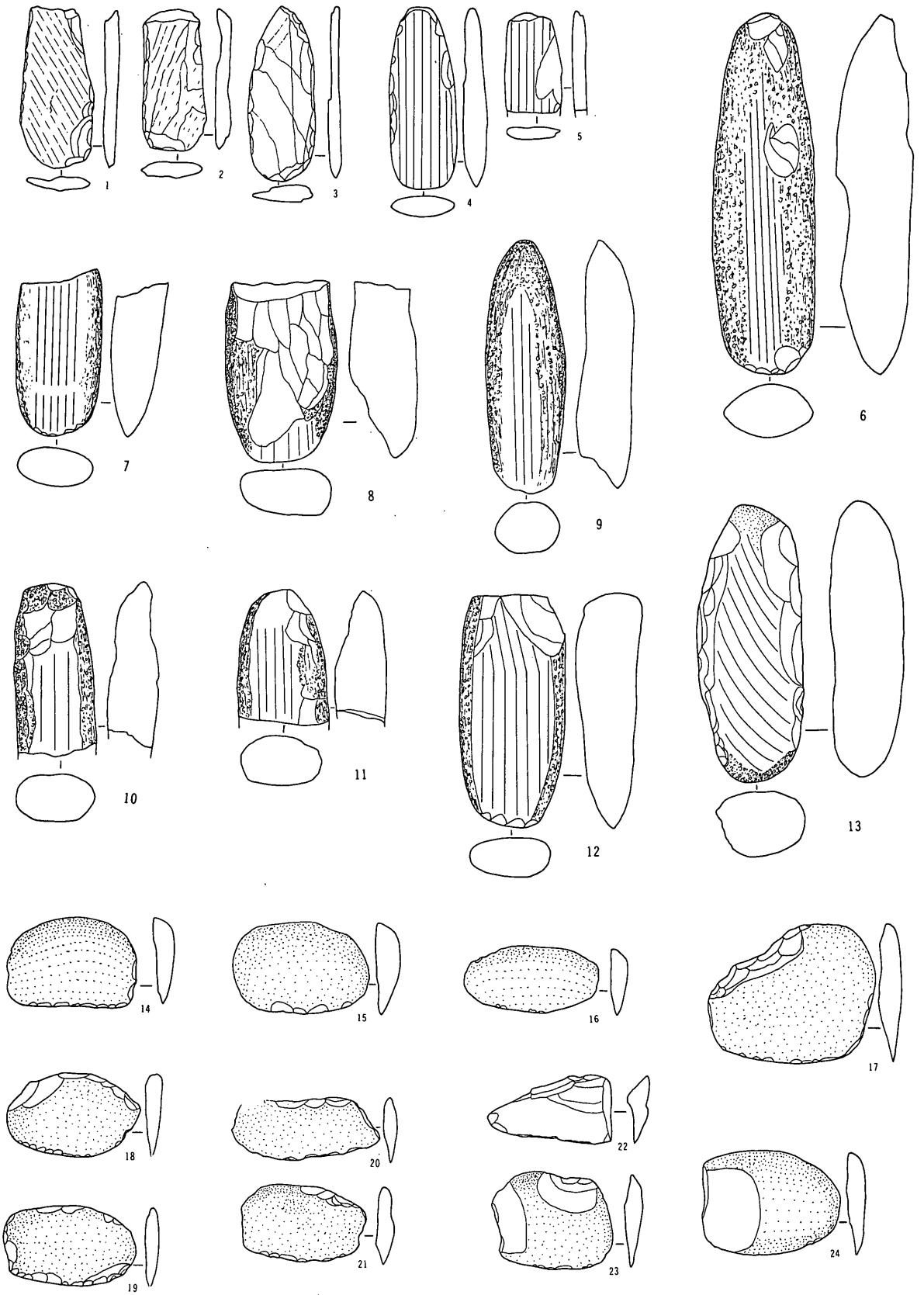


図46　前の原11号住居址出土石器II（１：４）

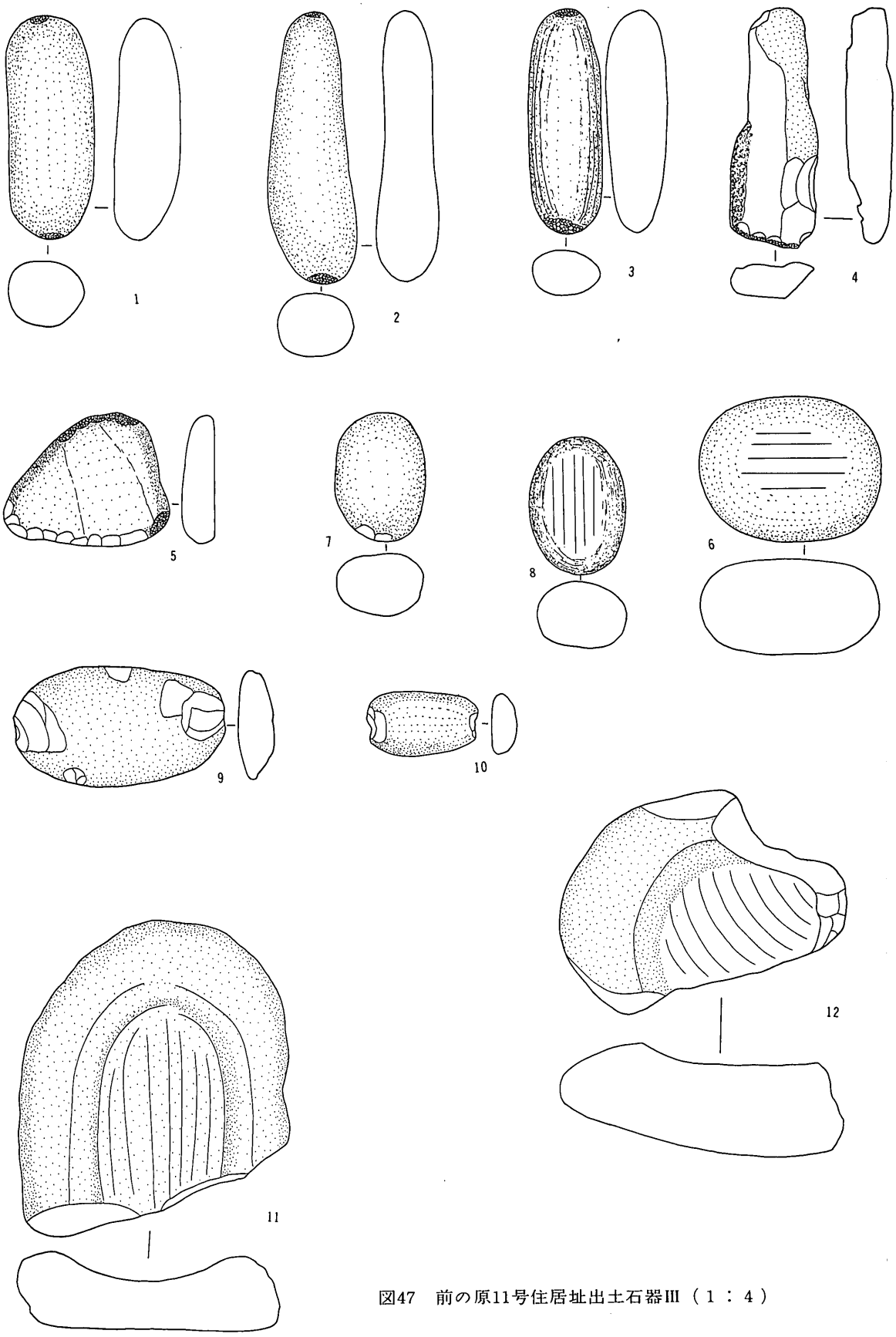


図47　前の原11号住居址出土石器III（１：４）

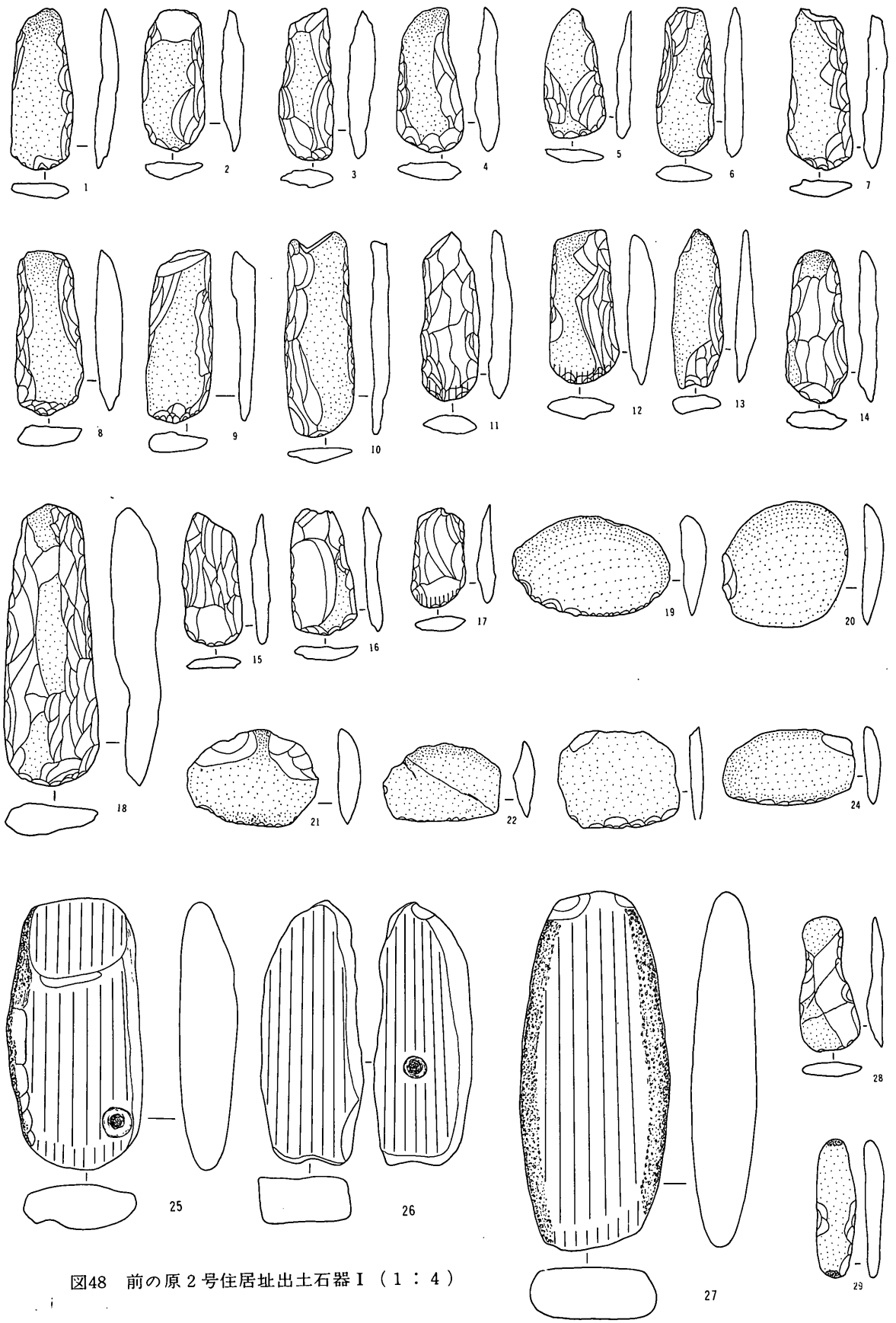


図48　前の原２号住居址出土石器Ⅰ（１：４）

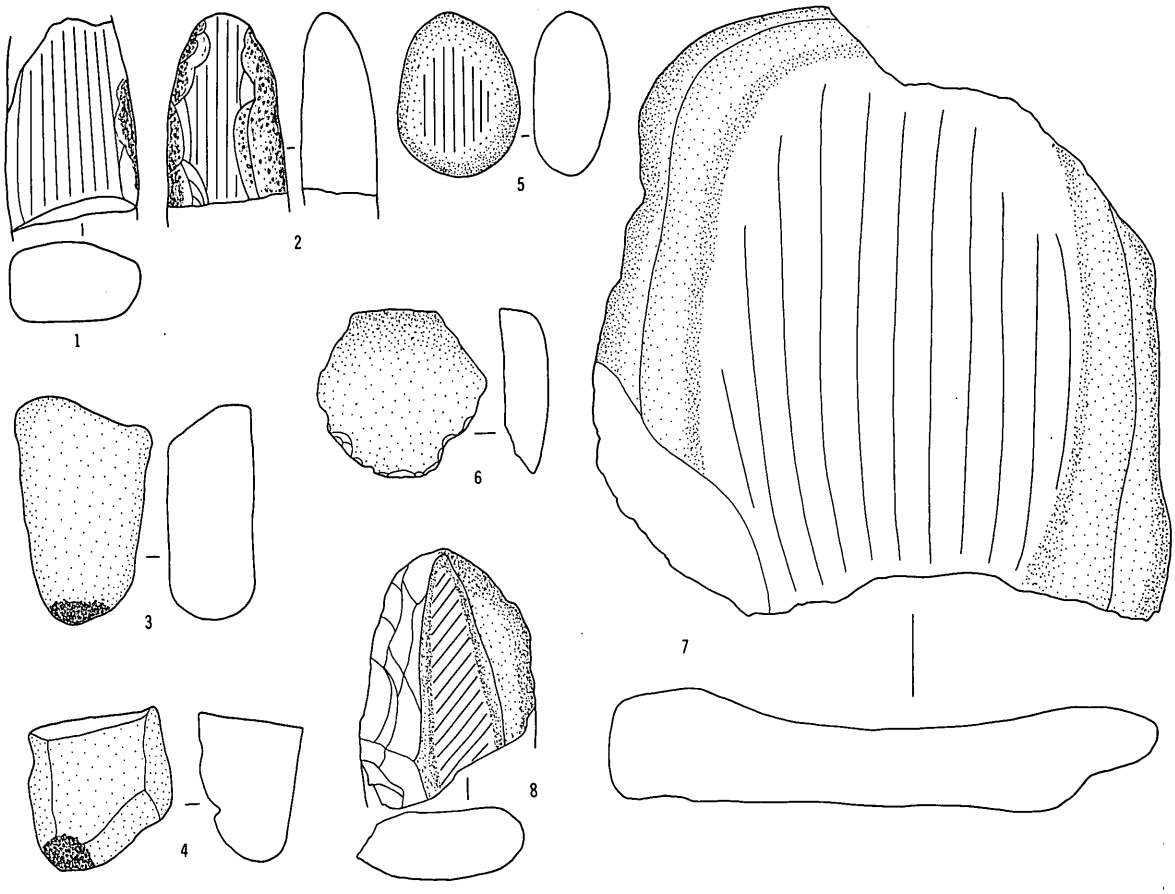


図49　前の原２号住居址出土石器II（１：４）

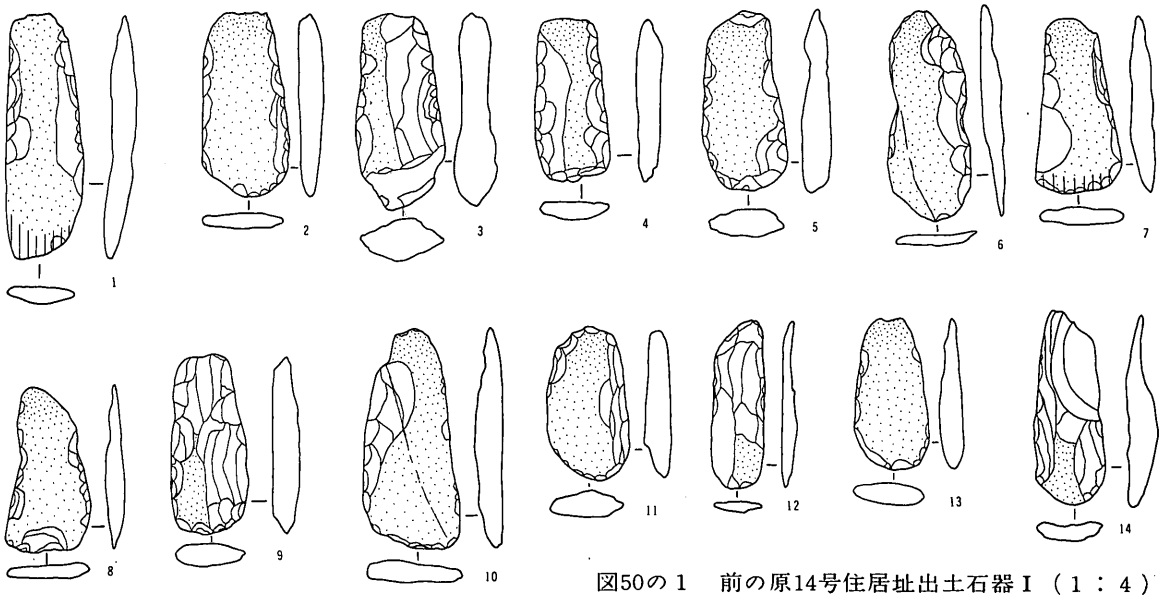


図50の１　前の原14号住居址出土石器Ⅰ（１：４）

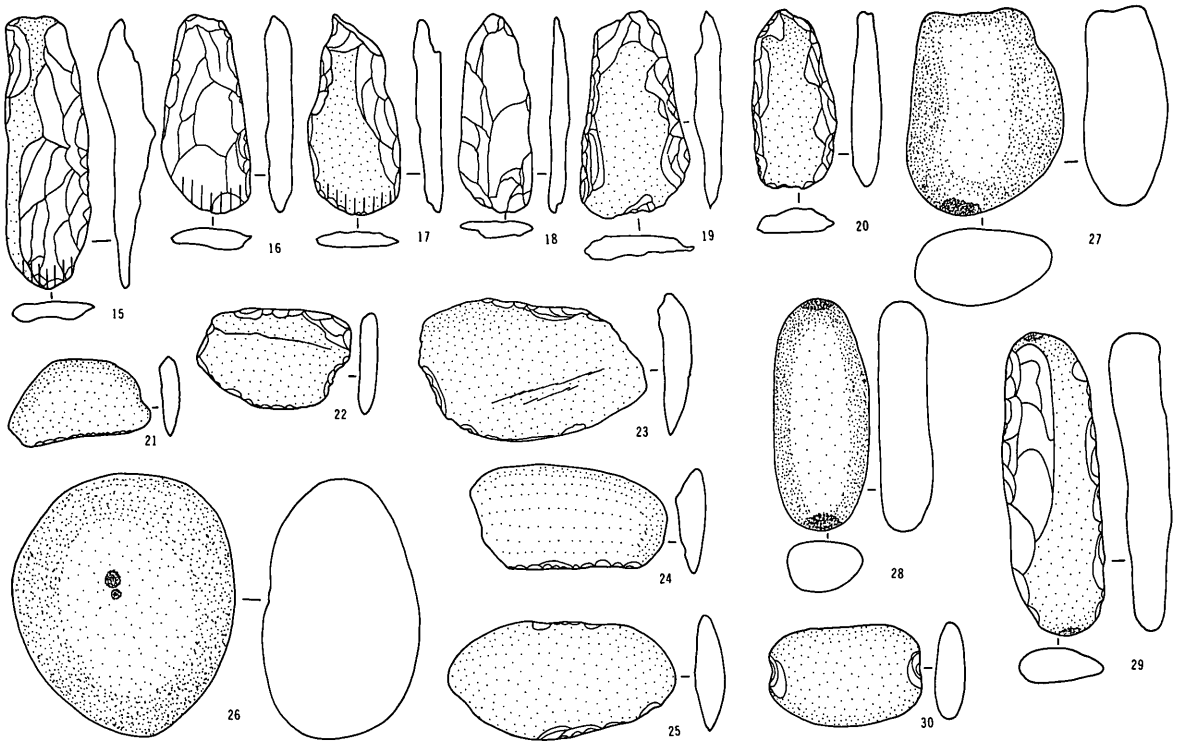


図50の２　前の原14号住居址出土石器Ⅱ（１：４）

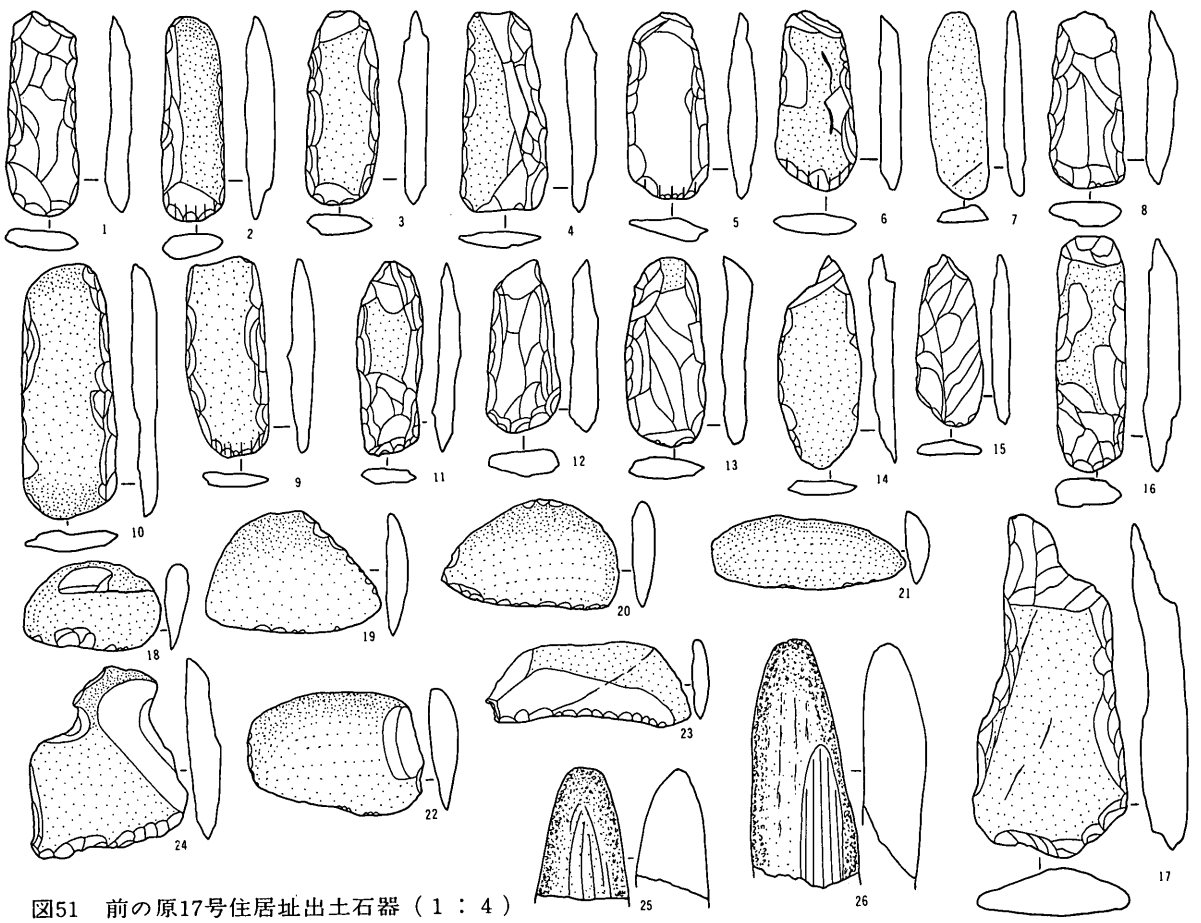


図51　前の原17号住居址出土石器（１：４）

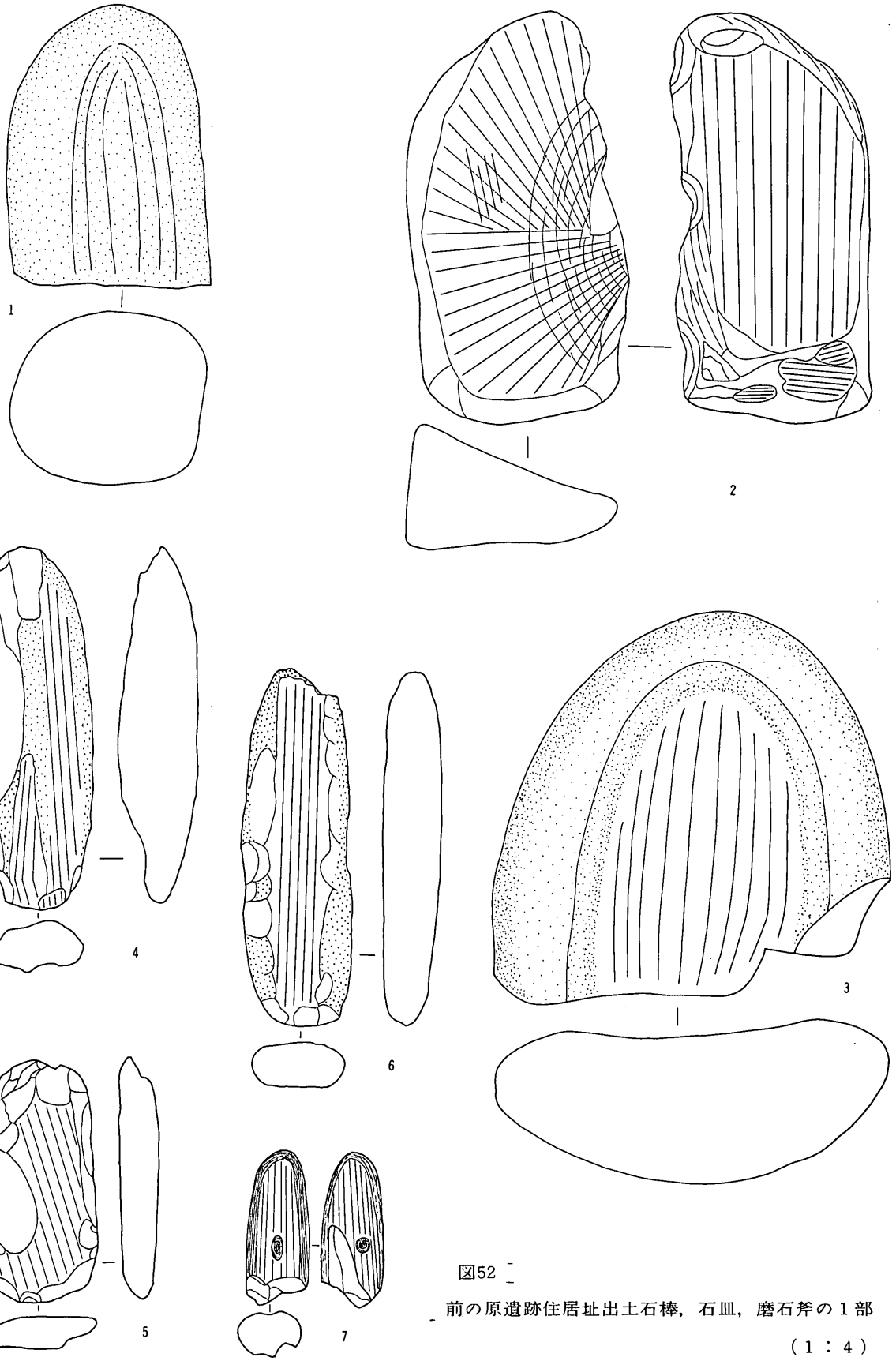


図52

前の原遺跡住居址出土石棒，石皿，磨石斧の１部

（１：４）

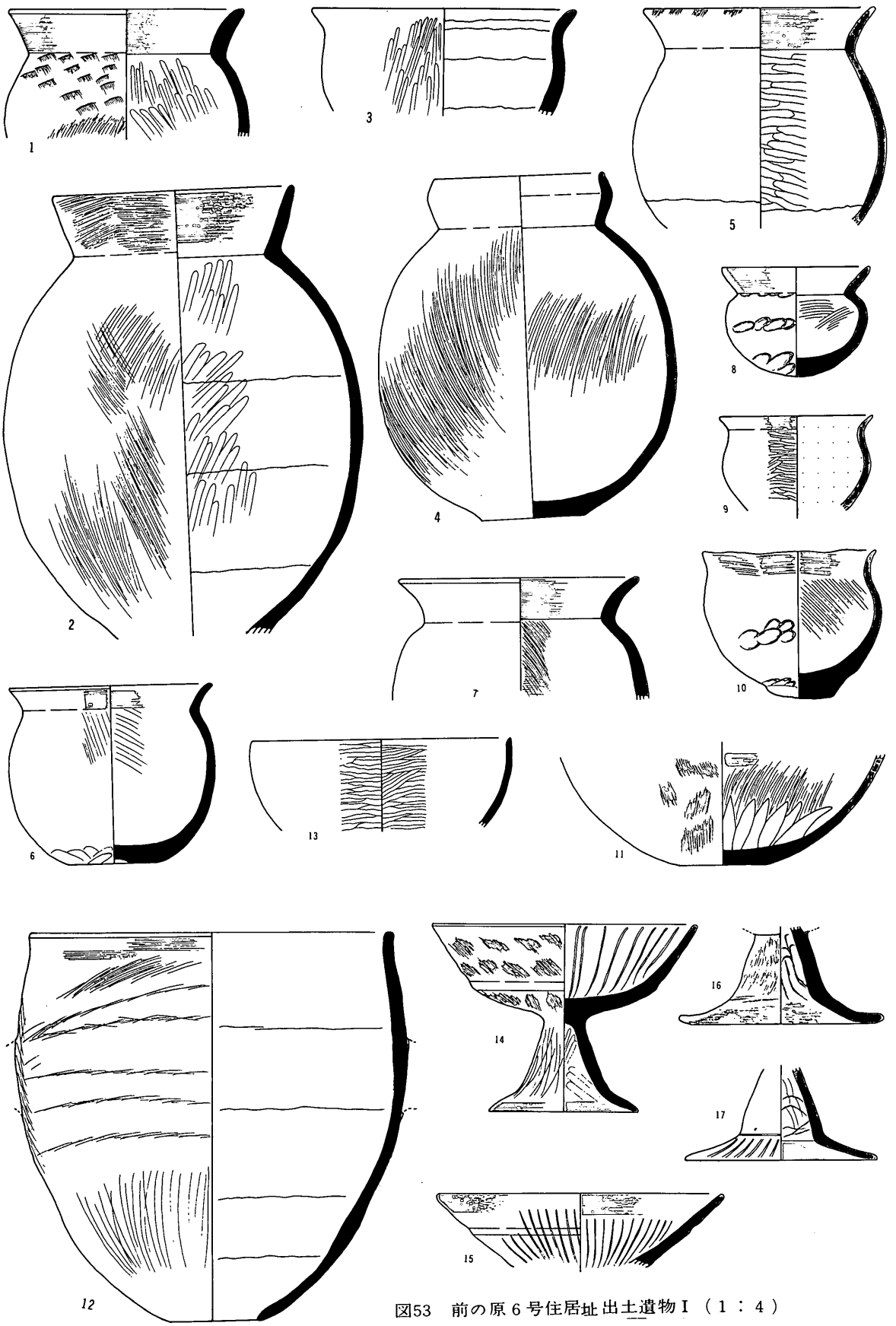


図53　前の原６号住居址出土遺物Ⅰ（１：４）

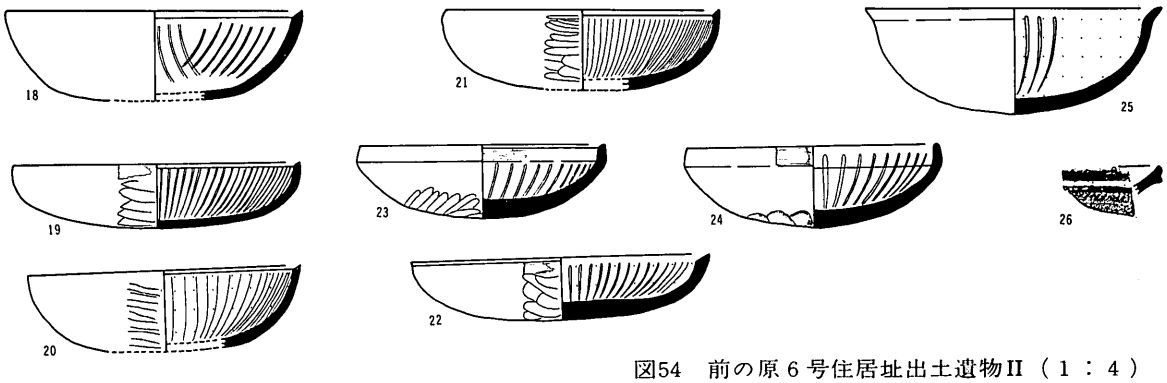
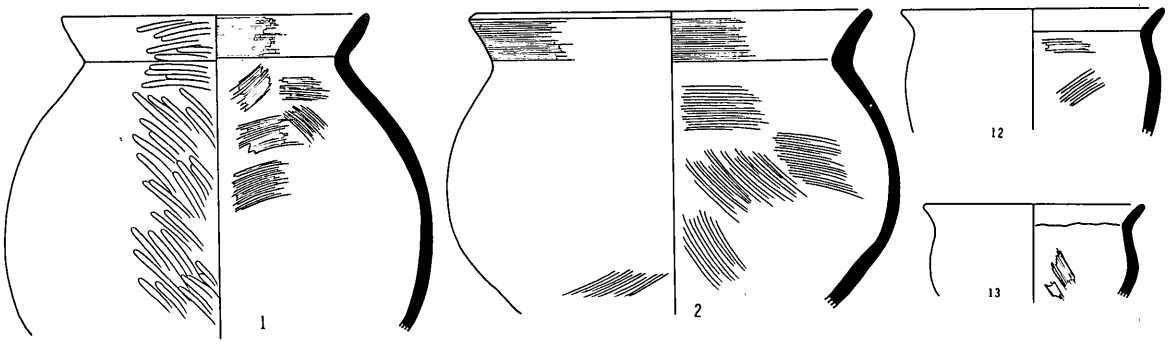


図54　前の原６号住居址出土遺物II（１：４）



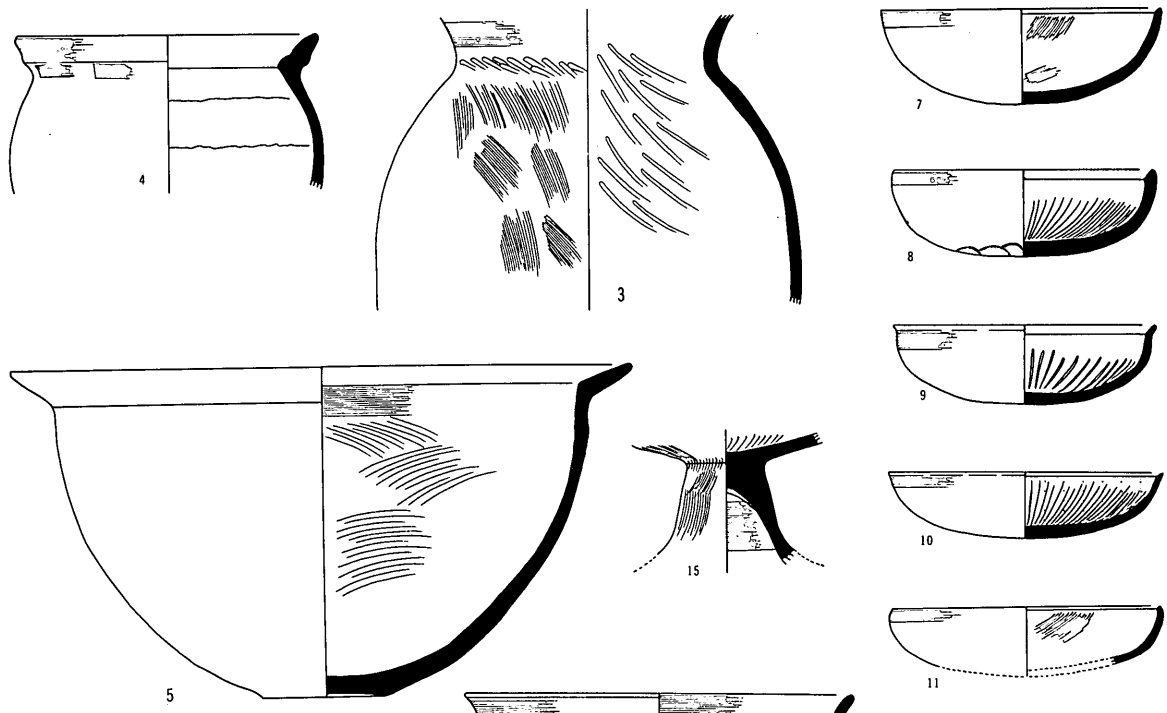


図55　前の原８号住居址

前の原３号墳周溝出土遺物（１：４）

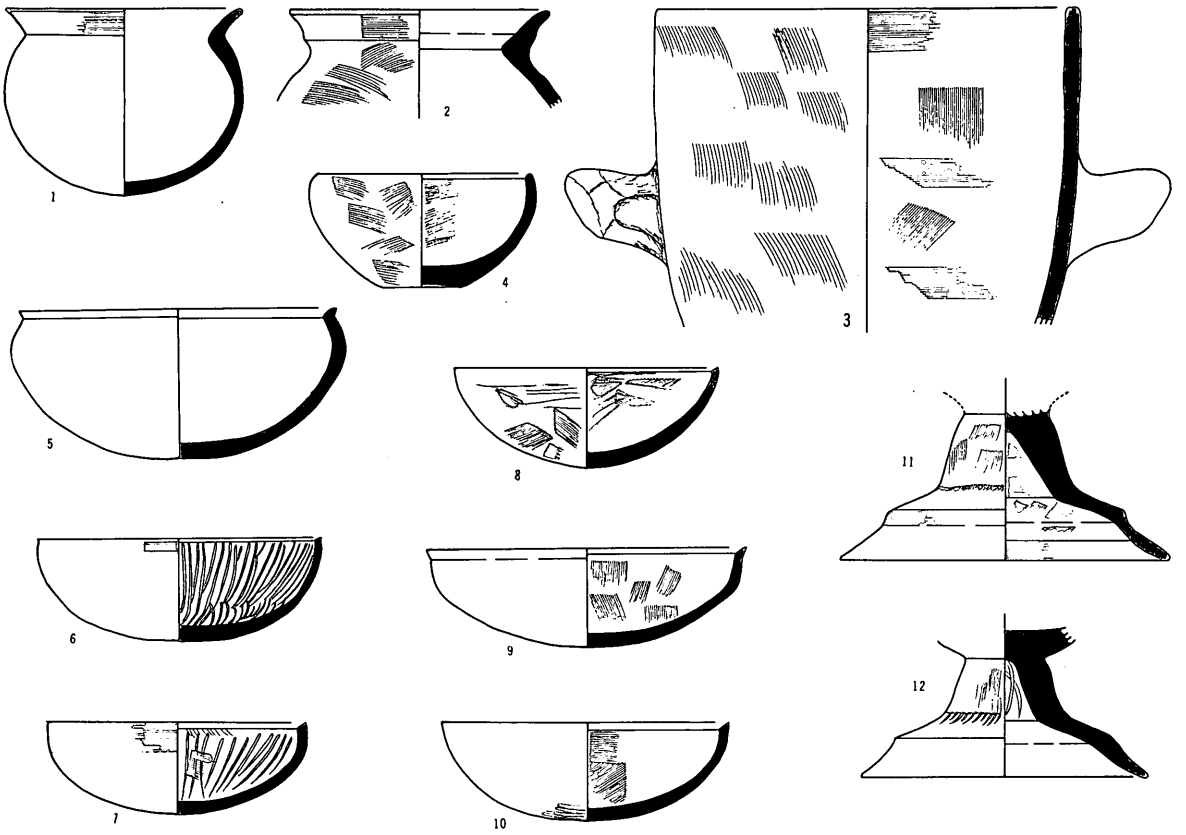


図56　前の原９号住居址出土遺物（１：４）

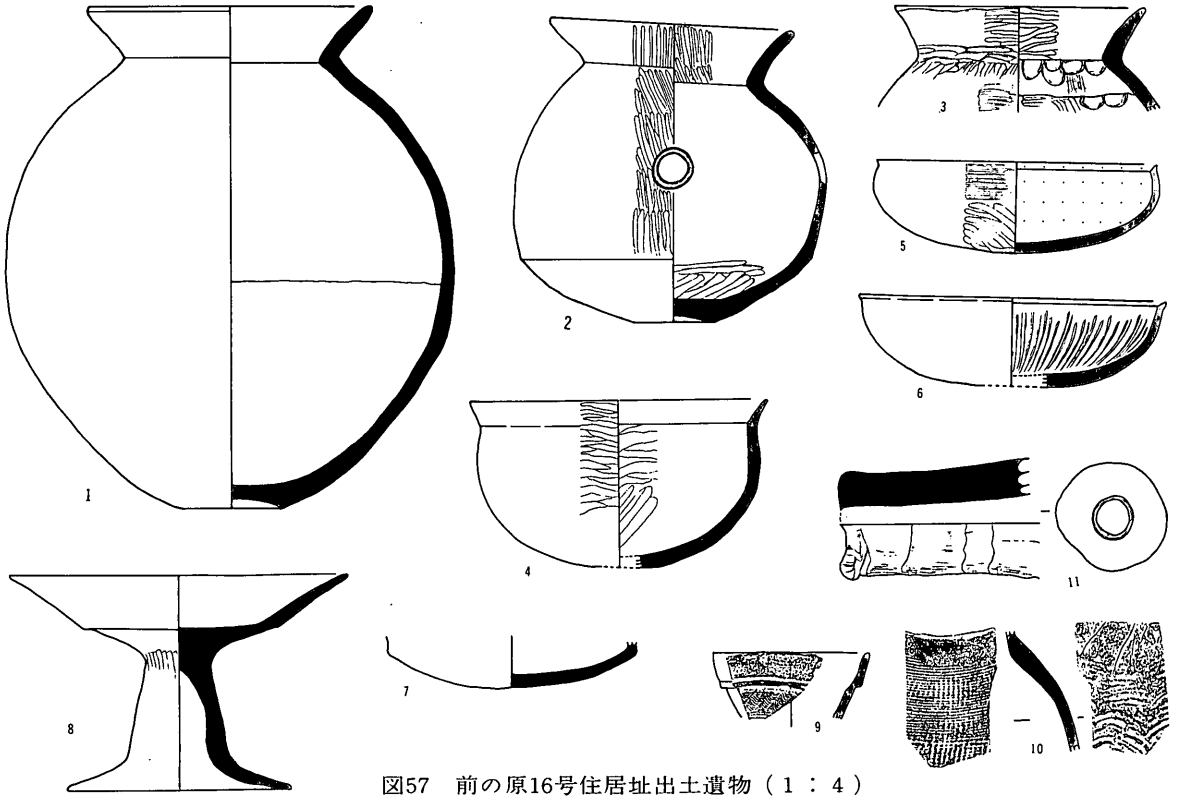


図57　前の原16号住居址出土遺物（１：４）

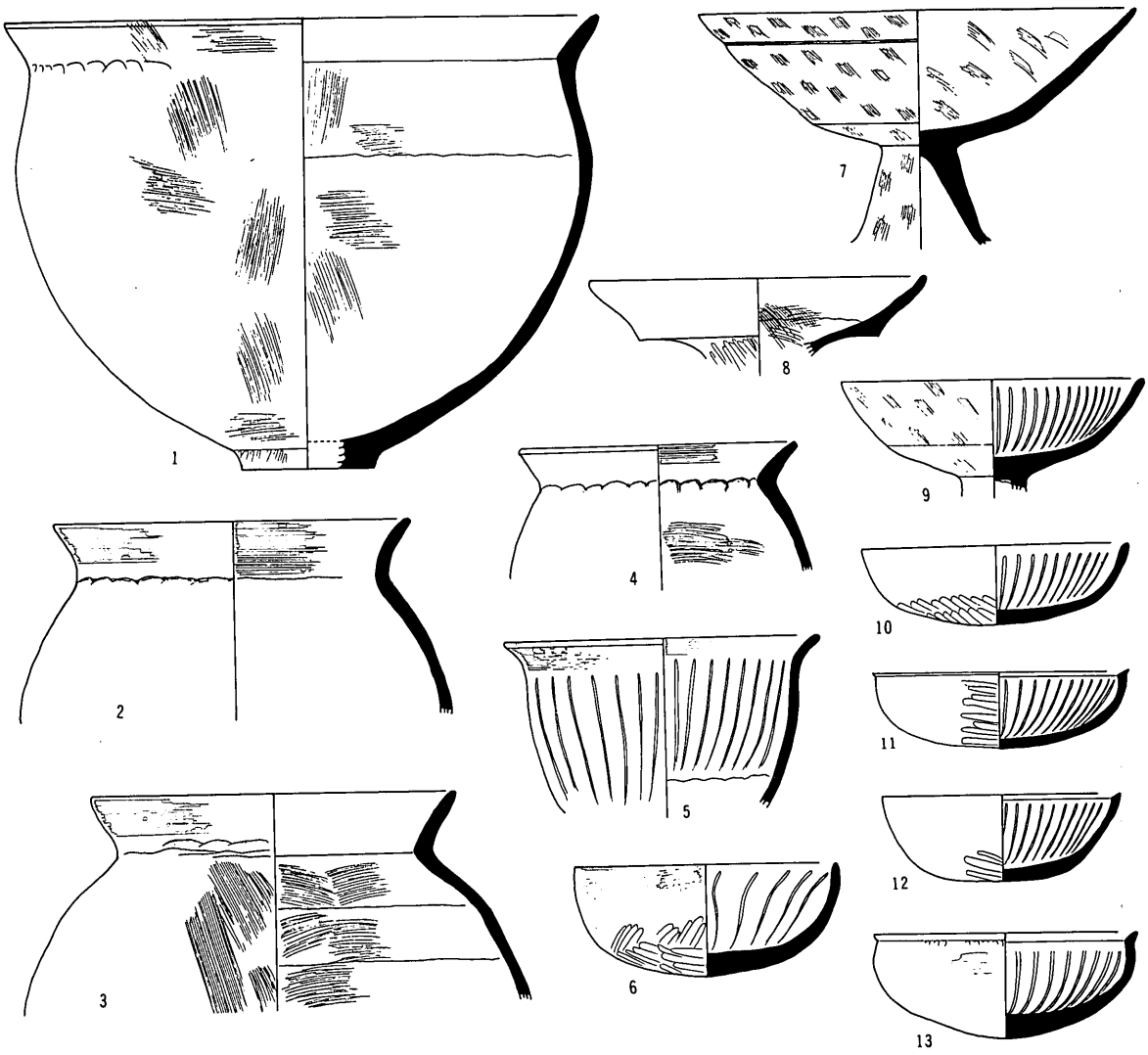


図58　前の原20号住居址出土遺物（１：４）

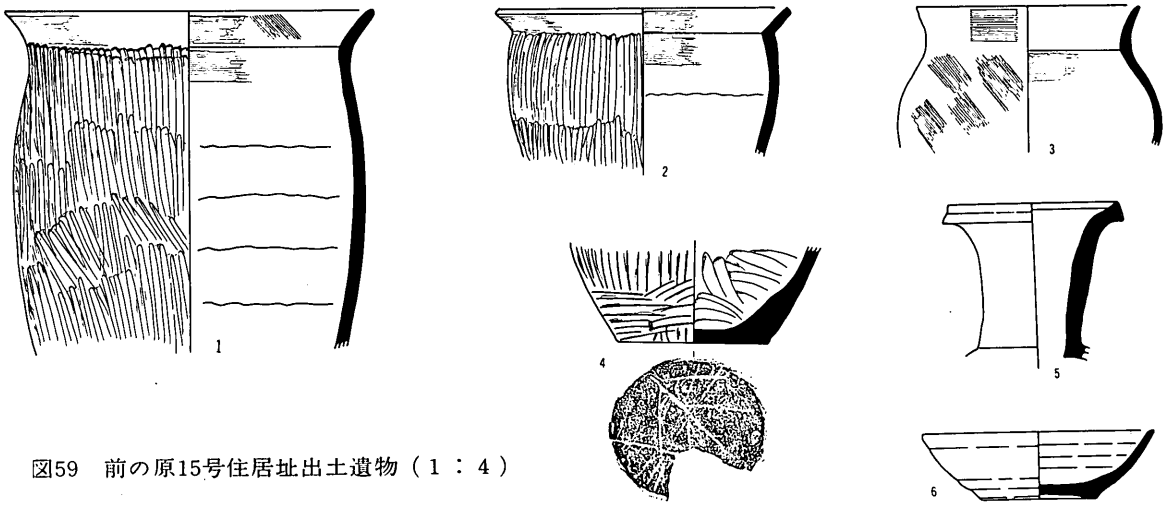


図59　前の原15号住居址出土遺物（１：４）

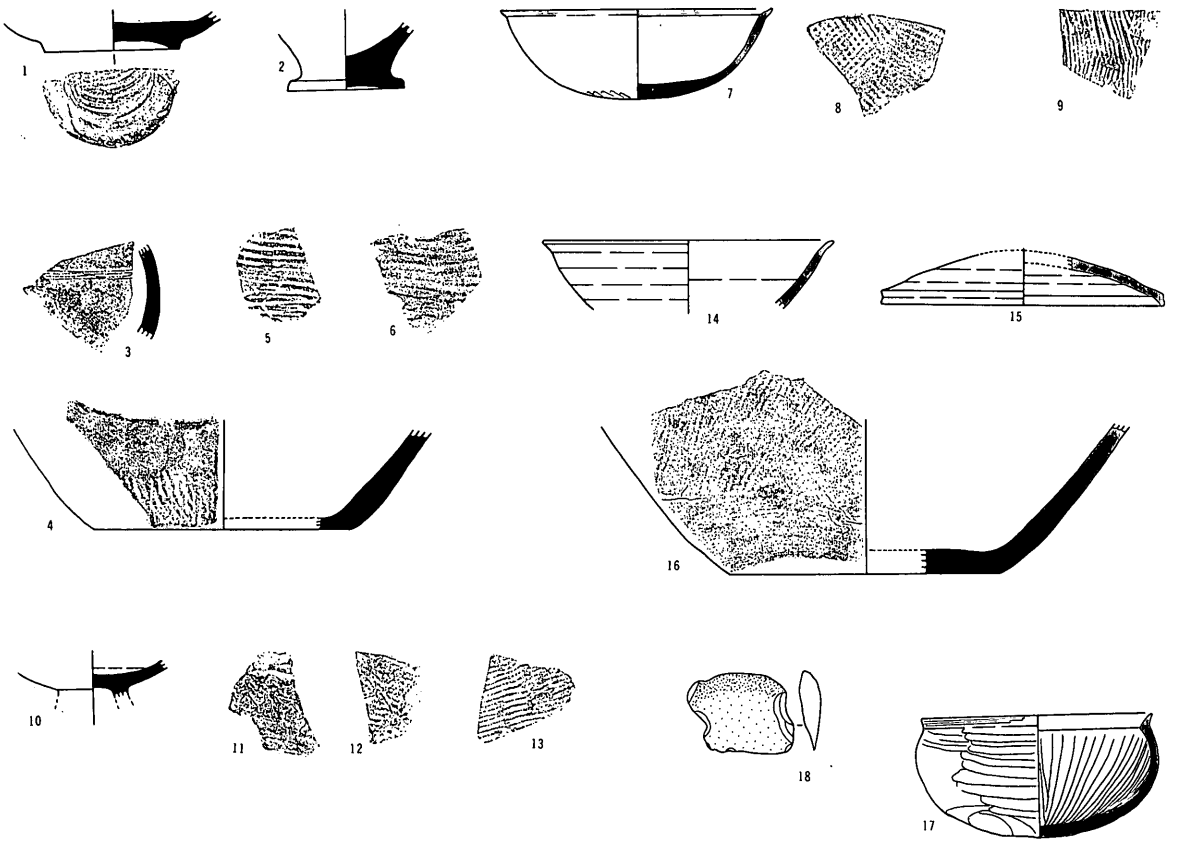


図60　前の原19号・23号住居址，柱列址Ⅰ・Ⅱ，高見塚，中屋Ⅰ号墳？
遺構外出土遺物（１：４）

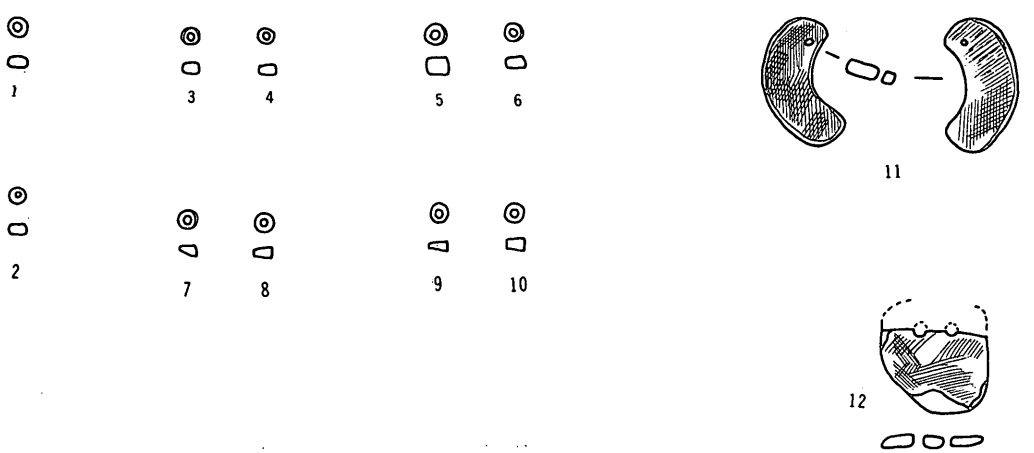


図61　前の原遺跡出土石製模造品（１：２）

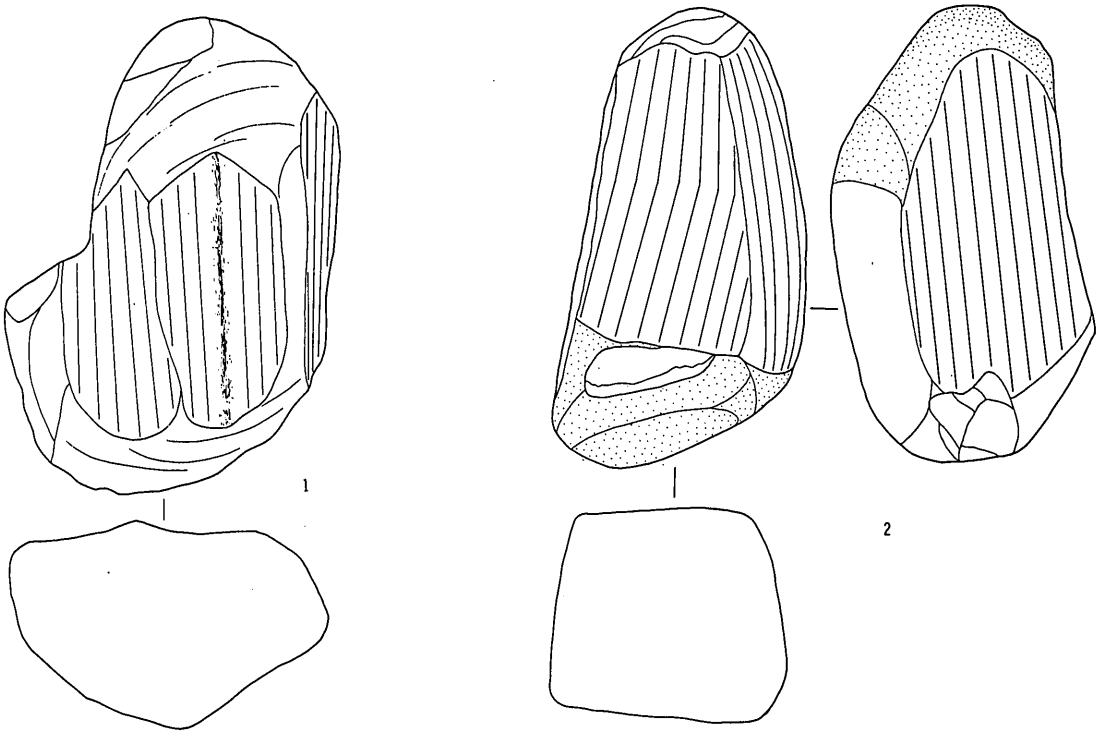
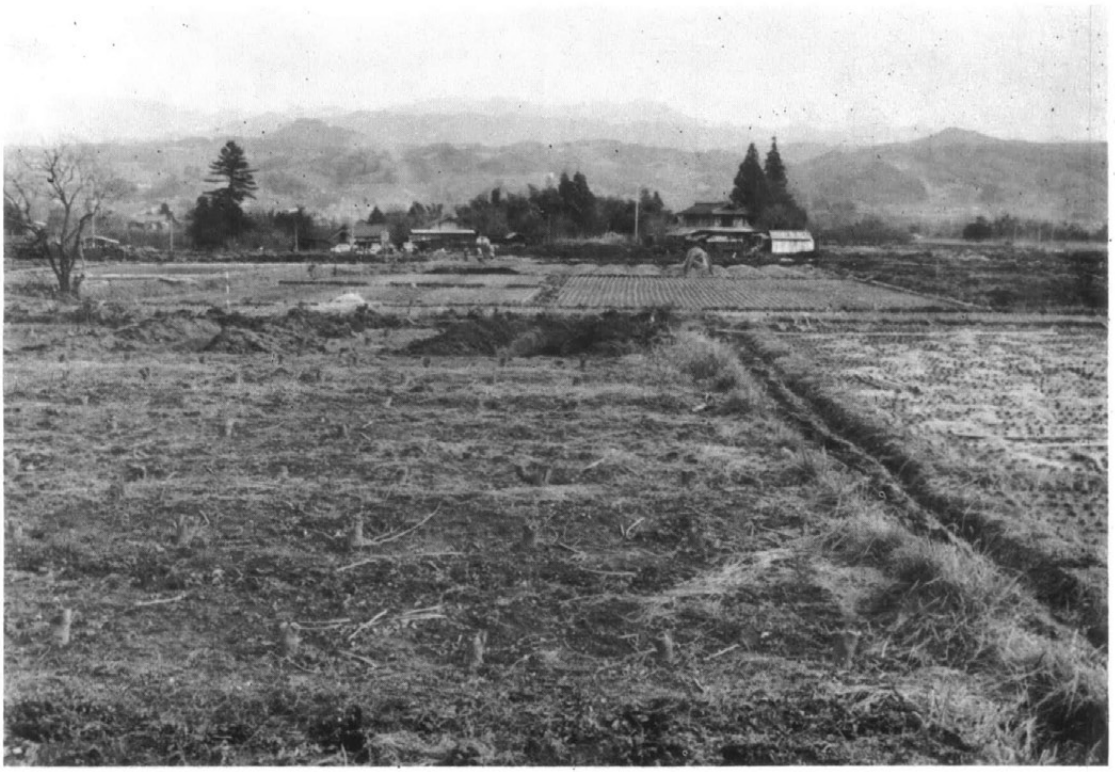


図62　前の原15号・16号出土砥石（１：４）

図版 2　前の原遺跡

遺跡　西をみる

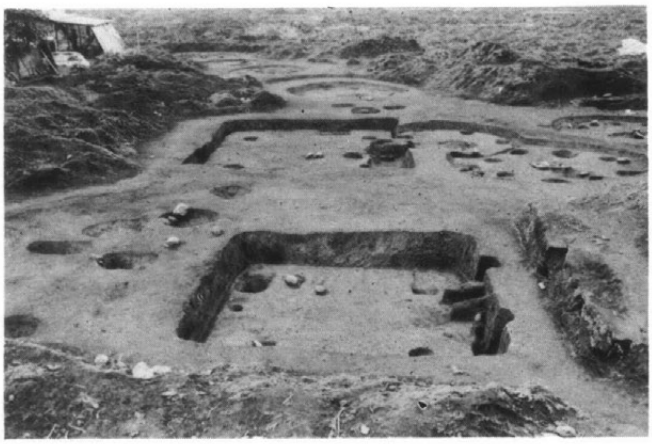


遺跡　東をみる

遺跡　南をみる　— 工事が進む　手前は竜丘小学校

図版 3　前の原遺跡の遺構

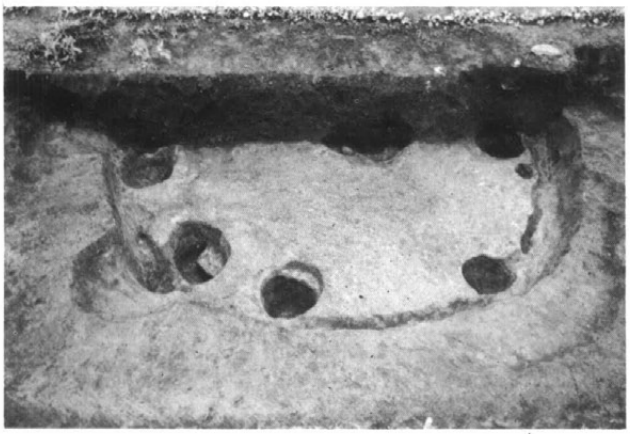
遺構　南から



遺構　北から

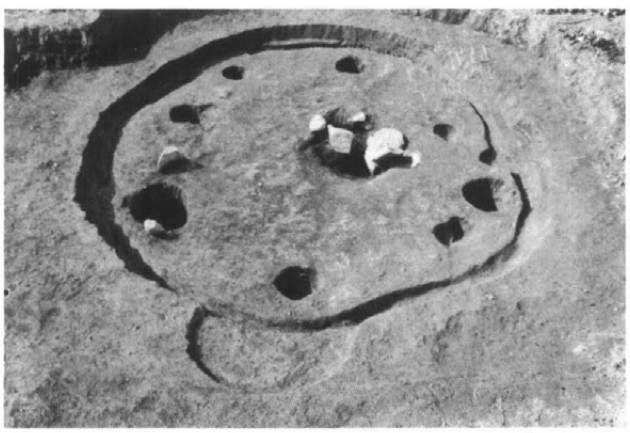
遺構　東から

遺構　西から

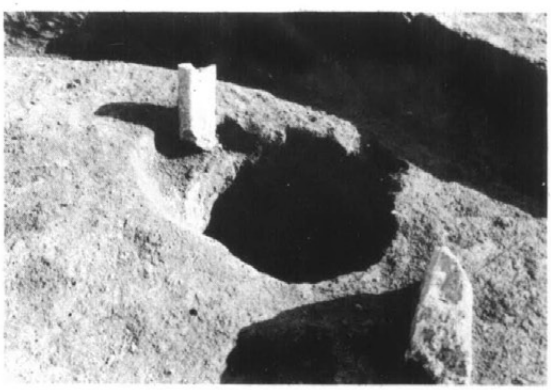


1 号住居址　東半分

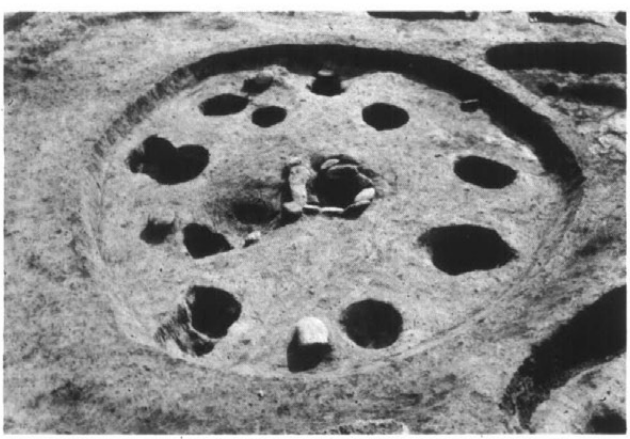
2 号，14号，17号住居址



2 号住居址



2 号住居址石棒



3 号住居址

3 号住居址炉址

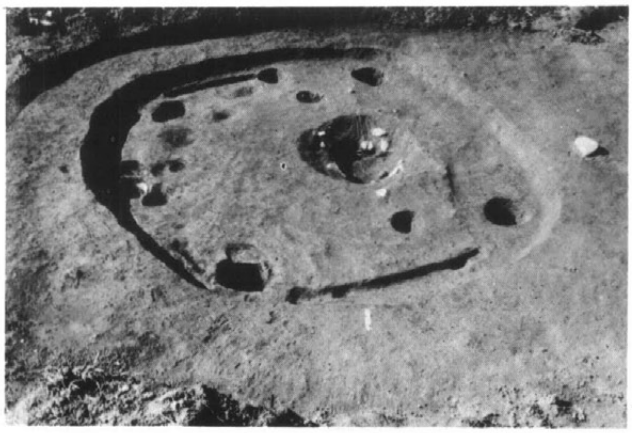
4 号住居址

4 号住居址の東側のテラス上の掘りこみ

4 号住居址の遺物出土状態

4 号住居址の遺物出土状態

4 号住居址埋甕



11号住居址

7 号住居址

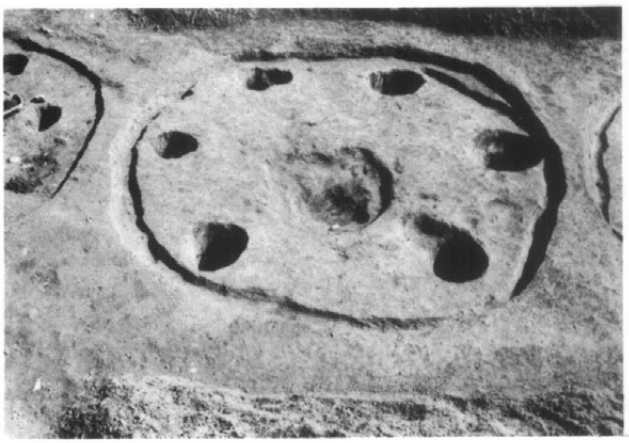
11号住居址埋甕 1

11号住居址炉址

11号住居址埋甕 3

11号住居址埋甕2·1

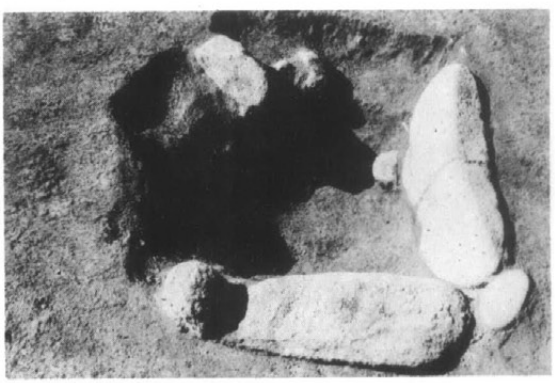
10号住居址(中)上が３号址，右が16号址



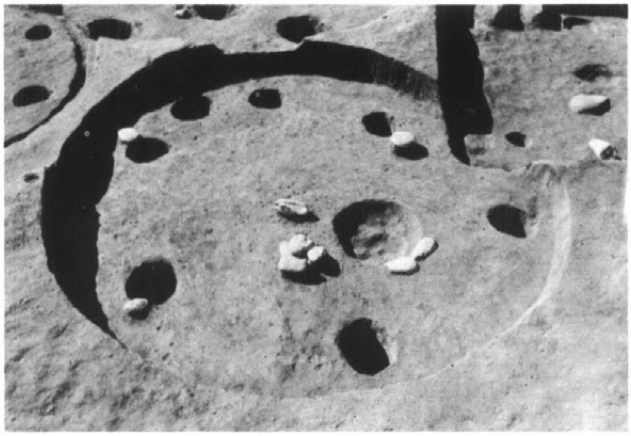
12号住居址

12号・13号住居址　上が12号

13号住居址



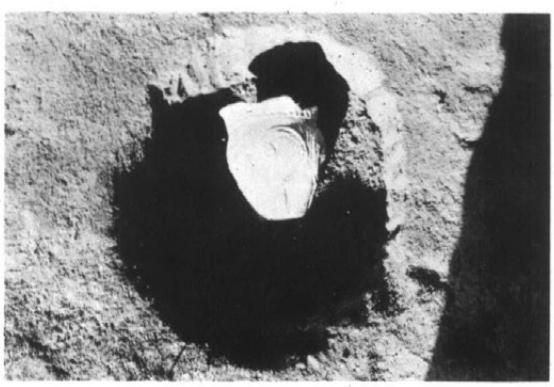
13号住居址炉



19号住居址

17号住居址　土器出土状態

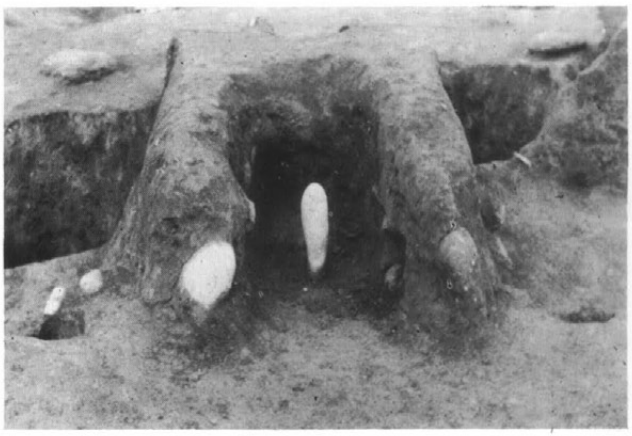
18号住居址



18号住居址　小形鉢出土

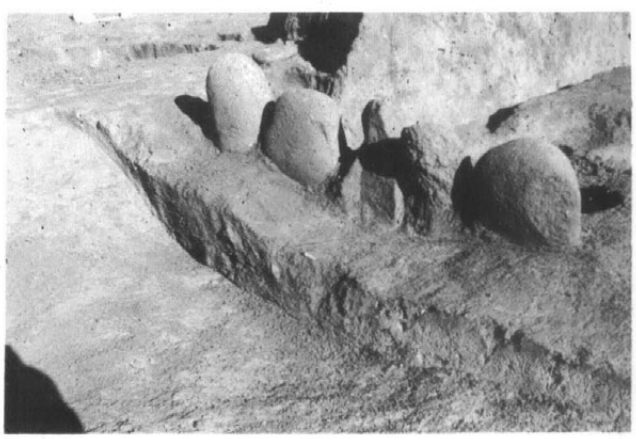
18号住居址　埋甕

6号住居址

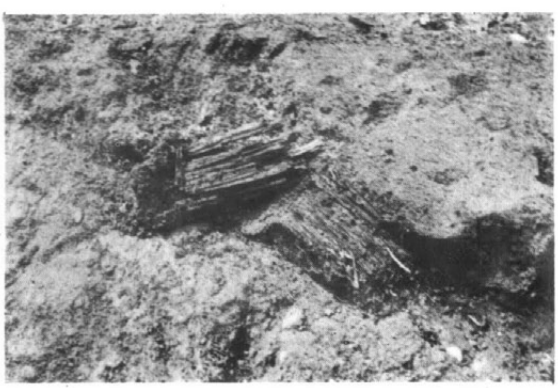


6号住居址　かまど

6号住居址　かまど断面



6号住居址　かまどの石組

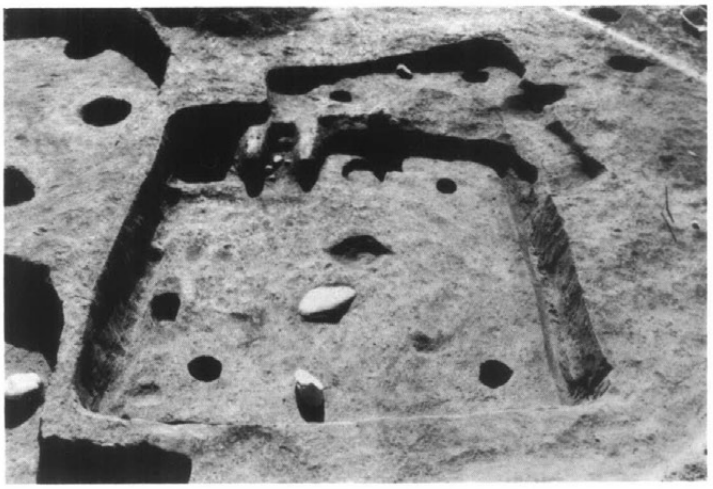


6号住居址の炭化物

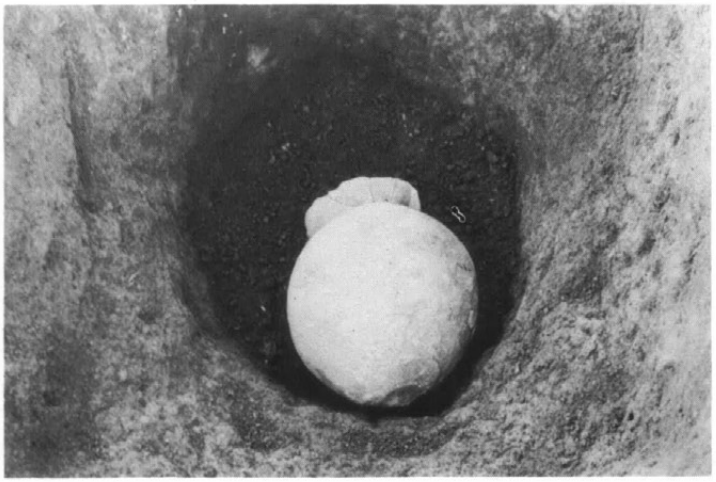
8号住居址　前の原3号墳周溝の一部　土坑1号
（土坑1号，8号住，周溝の一部，右はし5号址の一部）

9号住居址

9号住居址　石製模造品（勾玉）出土



16号住居址

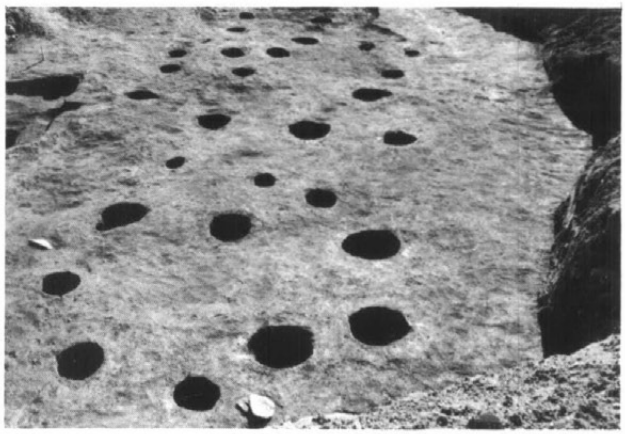


16号住居址　壺出土

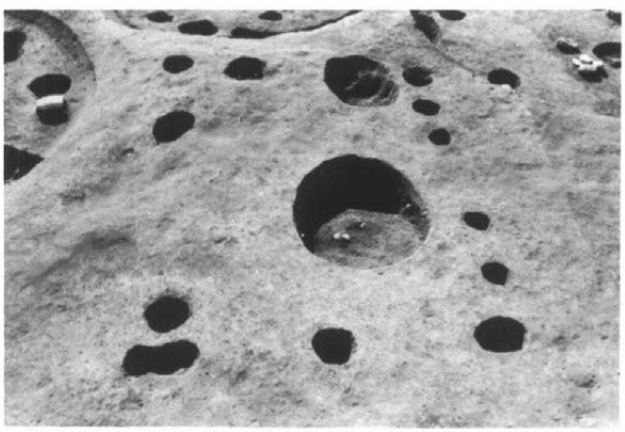
20号住居址

16号住居址　遺物出土状態

15号住居址



柱列址 I



柱列址 II

土坑群 I

高見塚周濠トレンチ調査

中屋 I 号墳トレンチ調査
（浅い溝２本がみられるが周溝とはいえない）

図版 4　前の原遺跡の遺物

11号住居址　埋甕 1

11号住居址　埋甕 3

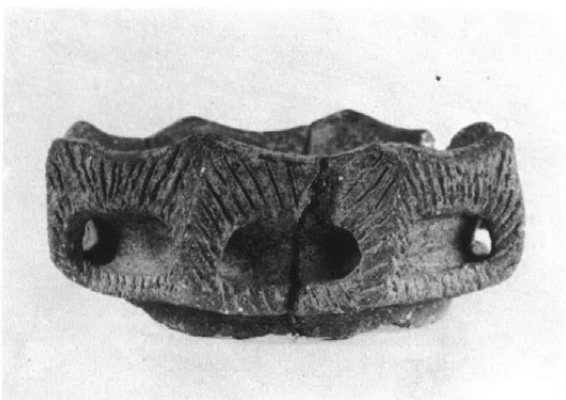
14号住居址出土台付土器

18号住居址出土土器

17号住居址出土浅鉢（釣手土器？）

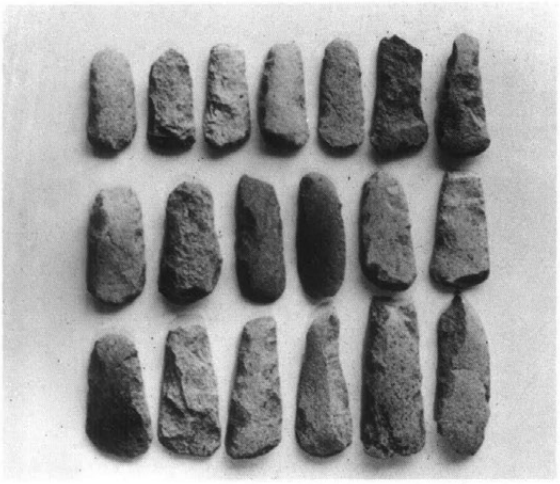
4 号住居址出土土器

4 号住居址出土土器

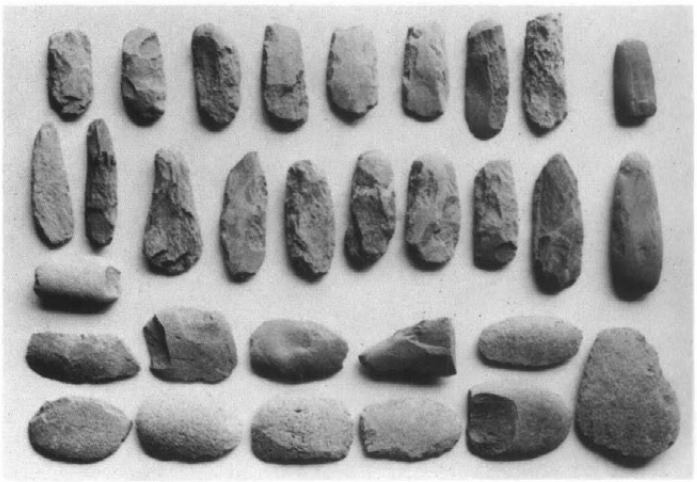


4 号住居址出土土器

4 号住居址出土土器

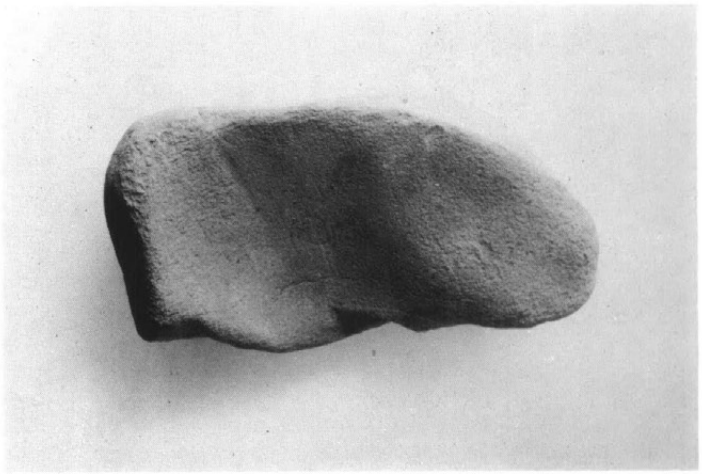


11号住居址出土石器 I



11号住居址出土石器 II

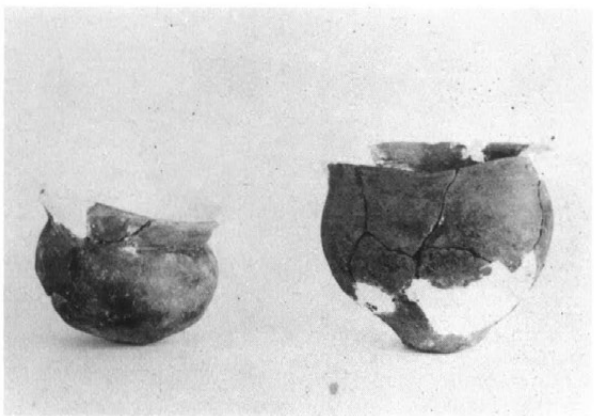
11号住居址出土石器III



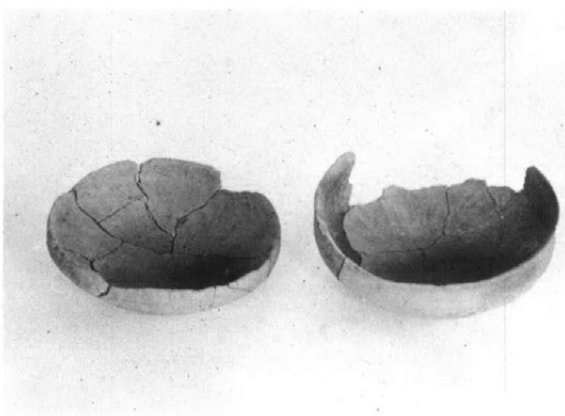
4 号住居址出土砥石

6 号住居址出土土器

8 号住居址出土土器



6 号住居址出土土器

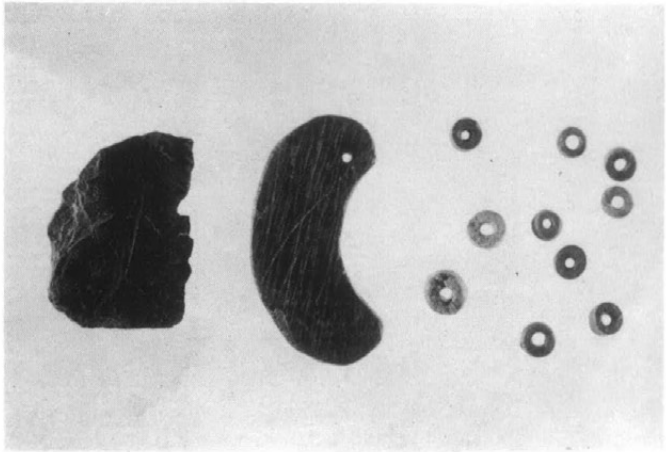


6 号・20号住居址出土坏

16号住居址出土土器

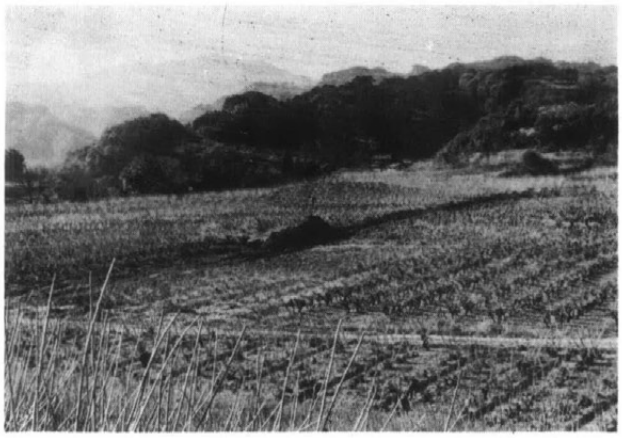
16号住居址出土土器

20号住居址出土高坏



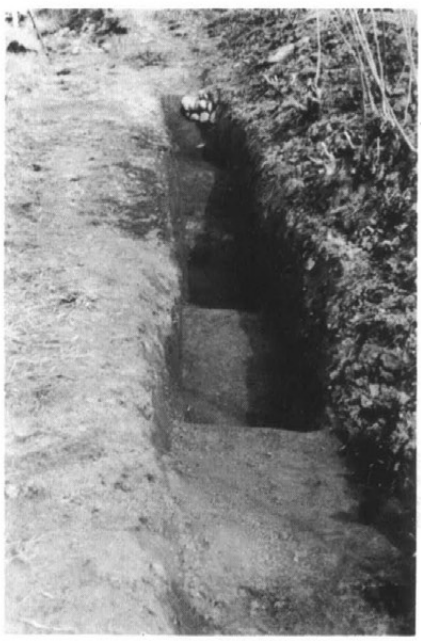
前の原遺跡出土石製模造品

図版5　塚　　原



鏡塚遠景（二子塚よりみる — 中央の高い所）

鏡塚近景



鏡塚周濠トレンチ調査

塚原3号・2号住居址 — 道路の切りとりに見る

二　子　塚 — 東より

図版 6　発掘スナップ

1 号住居址を掘りはじめる

4 号住居址の検出

4 号住居址の調査

遺構検出排土作業

前の原・塚原

昭和49年度竜丘地区農業構造改善事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和50年3月25日　印刷

昭和50年3月31日　発行

発行者　　長野県飯田市教育委員会

印刷所　　飯田市通り町1　㈱秀文社